四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十七冊

郡家大林上遺跡

1995. 3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十七冊

郡家大林上遺跡

1995. 3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

序　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県の高速道路が結ばれることになり，本格的な高速時代の幕開けとなりました。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道高松～善通寺間の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。３年６カ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了しました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行っているところであります。

今回，『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十七冊』として刊行いたしますのは，丸亀市郡家町に所在する郡家大林上遺跡についてであります。郡家大林上遺跡の調査では，縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されております。

本報告書が，香川県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後とも御支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成７年１月

香川県教育委員会
教育長　田　中　壮一郎

例　　言

1.　本報告書は，四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第17冊で，香川県丸亀市郡家町3253番地ほかで実施した郡家大林上遺跡（ぐんげおおばえかみいせき）の発掘調査報告を収録した。

2.　発掘調査は，日本道路公団から委託された香川県教育委員会が調査主体となり，財団法人　香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3.　発掘調査は，昭和63年６月15日から平成元年３月22日までの期間で実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

　　大林修三，木下晴一，吉田良三

4.　調査の実施にあたっては，下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

　香川県土木部横断道対策室，善通寺土木事務所横断道対策室，丸亀市土木部高速自動車道担当，四国横断自動車道建設丸亀市郡家地区対策協議会，各地元自治会

5.　本報告書の作成は，香川県教育委員会の指導のもとに財団法人　香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

6.　本報告書で用いる方位の北は，国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。また遺構は下記の略号により表示している。

　ＳＡ　柵列跡　　ＳＢ　掘立柱建物遺構　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＫ　土坑

　ＳＰ　柱穴　　ＳＺ　その他の遺構

7.　本遺跡の報告にあたっては，下記の機関に鑑定・分析などを委託した。

火山灰分析	財団法人　山梨文化財研究所
花粉分析・樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
C^{14}年代測定	社団法人　日本アイソトープ協会

本 文 目 次

第１章　調査の経緯 …… 1
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　調査区の設定と調査の経過 …… 5
第３節　調査と整理の体制 …… 5
調査体制 …… 5
整理体制 …… 7

第２章　立地と環境 …… 9
第１節　地理的環境 …… 9
第２節　歴史的環境 …… 9

第３章　調査の成果 …… 13
第１節　調査の概要 …… 13
第２節　土層序 …… 13
第３節　遺構と遺物 …… 22
１．自然河川 …… 22
ＳＲ01 …… 23
ＳＲ02 …… 28
ＳＲ03 …… 28
２．掘立柱建物遺構 …… 29
ＳＢ01 …… 29
ＳＢ02 …… 30
ＳＢ03 …… 30
ＳＢ04 …… 32
ＳＢ05 …… 33
３．柵列状遺構 …… 33
ＳＡ01 …… 33

4．溝状遺構 …… 34
ＳＤ01 …… 34
ＳＤ02 …… 34
ＳＤ03 …… 35
ＳＤ04 …… 35
ＳＤ05 …… 35
ＳＤ06 …… 37
5．土　坑 …… 37
ＳＫ01 …… 37
ＳＫ02 …… 37
ＳＫ03 …… 40
ＳＫ04 …… 40
ＳＫ05 …… 40
ＳＫ06 …… 42
ＳＫ07 …… 43
ＳＫ08 …… 47
ＳＫ09 …… 47
ＳＫ10 …… 49
ＳＫ11 …… 50
ＳＫ12 …… 50
ＳＫ13 …… 50
6．その他の遺構 …… 51
ＳＺ01 …… 51
ＳＺ02 …… 51
ＳＺ03 …… 51
7．その他の遺物 …… 52
旧石器 …… 52
その他の石器 …… 52
石製品 …… 52

第４章　自然科学分析 …… 59
郡家大林上遺跡のテフラ層 …… 60
郡家大林上遺跡採取試料の花粉分析 …… 63
郡家大林上遺跡出土木製品の樹種 …… 69
Ｃ－14年代測定 …… 71

第５章　おわりに …… 72

図版目次

図版第1　1．Ⅰ区全景（航空写真）
　　2．Ⅰ区東部全景（航空写真）
図版第2　1．Ⅱ区全景（航空写真）
　　2．Ⅲ区北部全景（航空写真）
図版第3　1．Ⅲ区南部全景（航空写真）
　　2．Ⅳ区西部全景（航空写真）
　　3．Ⅳ区東部全景（航空写真）
図版第4　1．Ⅰ区西部全景（北から）
　　2．Ⅱ区北部全景（東から）
図版第5　1．Ⅱ区南部全景（東から）
　　2．Ⅳ区西部全景（東から）
図版第6　1．ＳＲ01（南から）
　　2．ＳＲ01土層堆積状況（南から）
図版第7　1．ＳＲ01遺物出土状況
　　2．ＳＲ01遺物出土状況
図版第8　1．ＳＲ01遺物出土状況
　　2．ＳＲ01遺物出土状況
図版第9　1．ＳＲ01遺物出土状況
　　2．ＳＲ01遺物出土状況
図版第10　1．ＳＲ02（西から）
　　2．ＳＲ03（東から）
図版第11　1．ＳＢ02（南から）
　　2．ＳＢ03・04（西から）
図版第12　1．ＳＢ04（南から）
　　2．ＳＢ04－ＳＰ44
　　3．ＳＢ04－ＳＰ44
　　4．ＳＢ04－ＳＰ47
　　5．ＳＢ04－ＳＰ47
　　6．ＳＢ04－ＳＰ51
　　7．ＳＢ04－ＳＰ51
図版第13　1．ＳＢ05（東から）
　　2．ＳＡ01（北から）
図版第14　1．ＳＤ01（南から）
　　2．ＳＤ02・03（東から）
図版第15　1．ＳＫ02（西から）
　　2．ＳＫ02（南から）
図版第16　1．ＳＫ02遺物出土状況
　　2．ＳＫ03（東から）
図版第17　1．ＳＫ04（東から）
　　2．ＳＫ05（東から）
図版第18　1．ＳＫ06（北から）
　　2．ＳＫ07（北から）
図版第19　1．ＳＫ08（東から）
　　2．ＳＫ08遺物出土状況（西から）
図版第20　1．ＳＫ09（北から）
　　2．ＳＫ09遺物出土状況（南から）
図版第21　1．ＳＫ10（南から）
　　2．ＳＫ12（南から）
図版第22　1．ＳＫ13（東から）
　　2．ＳＺ01（南から）
図版第23　1．ＳＺ02
　　2．ＳＺ03（西から）
図版第24　ＳＲ01出土遺物
図版第25　ＳＲ01出土遺物

図版第26　ＳＲ01出土遺物
図版第27　ＳＲ01出土遺物
図版第28　ＳＲ01出土遺物
図版第29　ＳＲ01出土遺物
図版第30　ＳＲ01出土遺物
図版第31　ＳＲ01，ＳＤ01～04出土遺物
図版第32　ＳＤ04，ＳＫ01・02出土遺物
図版第33　ＳＫ02出土遺物
図版第34　ＳＫ02出土遺物
図版第35　ＳＫ02・03・05出土遺物
図版第36　ＳＫ06・07出土遺物
図版第37　ＳＫ07出土遺物
図版第38　ＳＫ07出土遺物
図版第39　ＳＫ07出土遺物
図版第40　ＳＫ07出土遺物
図版第41　ＳＫ08・09出土遺物
図版第42　ＳＫ09・10出土遺物
図版第43　石器
図版第44　石器
図版第45　石器
図版第46　石器
図版第47　石製品
図版第48　石製品

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図(1) ---------- 1
第２図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺） ---------- 2
第３図　遺跡位置図(2) ---------- 6
第４図　調査区割り図 ---------- 8
第５図　周辺の遺跡 ---------- 10
第６図　Ⅰ区南壁土層図 ---------- 14
第７図　Ⅱ区南壁土層図(1) ---------- 15
第８図　Ⅱ区南壁土層図(2) ---------- 16
第９図　Ⅲ区南壁土層図(1) ---------- 17
第10図　Ⅲ区南壁土層図(2) ---------- 18
第11図　Ⅳ区南壁土層図 ---------- 19
第12図　Ⅱ区ＳＲ01土層図 ---------- 20
第13図　自然河川配置図 ---------- 22
第14図　ＳＲ01土層実測図 ---------- 23
第15図　ＳＲ01-1出土遺物実測図(1) ---------- 25
第16図　ＳＲ01-1出土遺物実測図(2) ---------- 26
第17図　ＳＲ01-1出土遺物実測図(3) ---------- 27
第18図　ＳＲ01-3出土遺物実測図 ---------- 28
第19図　埋没後の遺物実測図 ---------- 28
第20図　ＳＲ02土層実測図 ---------- 28
第21図　ＳＲ03土層実測図 ---------- 29
第22図　ＳＢ01実測図 ---------- 30
第23図　ＳＢ02実測図 ---------- 31
第24図　ＳＢ03実測図 ---------- 31
第25図　ＳＢ04実測図 ---------- 32
第26図　ＳＢ05実測図 ---------- 33
第27図　ＳＡ01実測図 ---------- 34

第28図　ＳＤ01土層実測図 …… 34
第29図　ＳＤ01出土遺物実測図 …… 34
第30図　ＳＤ02土層実測図 …… 34
第31図　ＳＤ02出土遺物実測図 …… 35
第32図　ＳＤ03土層実測図 …… 35
第33図　ＳＤ03出土遺物実測図 …… 35
第34図　ＳＤ04土層実測図 …… 36
第35図　ＳＤ04出土遺物実測図 …… 36
第36図　ＳＤ05土層実測図 …… 36
第37図　ＳＤ06土層実測図 …… 37
第38図　ＳＫ01実測図 …… 37
第39図　ＳＫ01出土遺物実測図 …… 37
第40図　ＳＫ02実測図 …… 38
第41図　ＳＫ02出土遺物実測図 …… 39
第42図　ＳＫ03実測図 …… 40
第43図　ＳＫ03出土遺物実測図 …… 40
第44図　ＳＫ04・05実測図 …… 41
第45図　ＳＫ05出土遺物実測図 …… 41
第46図　ＳＫ06出土遺物実測図 …… 42
第47図　ＳＫ06実測図 …… 43
第48図　ＳＫ07実測図 …… 43
第49図　ＳＫ07出土遺物実測図(1) …… 44
第50図　ＳＫ07出土遺物実測図(2) …… 45
第51図　ＳＫ07出土遺物実測図(3) …… 46
第52図　ＳＫ08実測図 …… 47
第53図　ＳＫ08出土銭貨拓影 …… 47
第54図　ＳＫ09実測図 …… 47
第55図　ＳＫ09出土遺物実測図 …… 48
第56図　ＳＫ10実測図 …… 49
第57図　ＳＫ10出土遺物実測図 …… 49

第58図　ＳＫ11実測図 …… 50
第59図　ＳＫ12実測図 …… 50
第60図　ＳＫ13実測図 …… 50
第61図　ＳＺ03土層実測図 …… 51
第62図　石器実測図(1) …… 53
第63図　石器実測図(2) …… 54
第64図　石製品実測図(1) …… 55
第65図　石製品実測図(2) …… 56
第66図　石製品実測図(3) …… 57
第67図　試料採取地点 …… 59
第68図　テフラ層分析結果 …… 62
第69図　花粉化石群集 …… 66
第70図　花粉化石(1) …… 67
第71図　花粉化石(2) …… 68
第72図　顕微鏡写真 …… 70

表　目　次

第１表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1) ---------- 3
第２表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2) ---------- 4
第３表　採取試料表 ---------- 59
第４表　屈折率測定値 ---------- 61
第５表　花粉分析結果 ---------- 65

付 表 目 次

付表１　土器観察表 ---------- 1
付表２　石器・石製品観察表 ---------- 12
付表３　木製品観察表 ---------- 13
付表４　金属器観察表 ---------- 13

付 図 目 次

付図１　遺構配置図

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経緯

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は，同善通寺～豊浜間に引き続き，昭和57年１月８日に整備計画が決定され，昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では，この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に分布調査事業を実施し，これをもとに調査対象面積を39万㎡余りと判断した。また路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては，日本道路公団と文化庁の協議により基本的には記録保存で対応することが決定した。

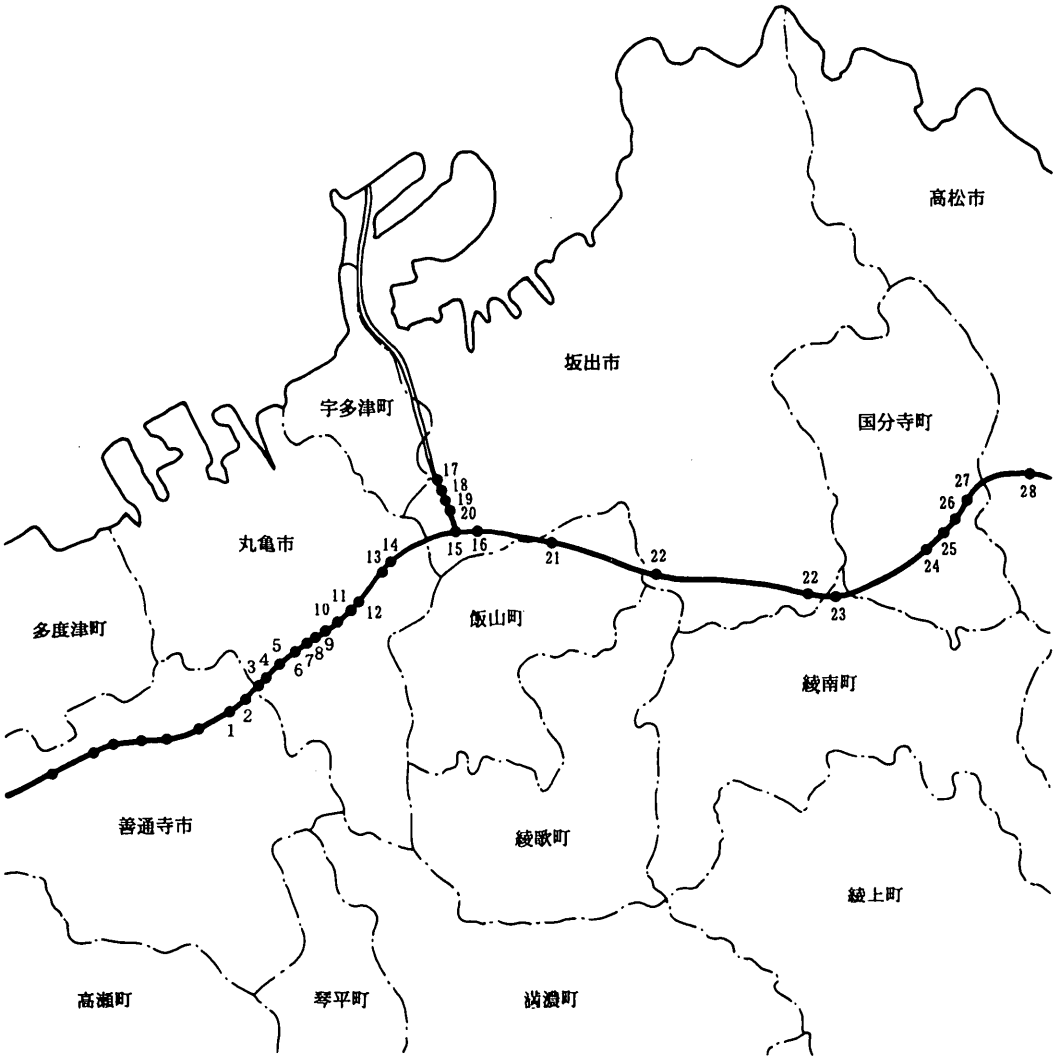
香川県教育委員会では，これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。協議の結果，昭和63年度当初から２ヵ年の予定で本調査を実施すること，整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。これを受けて県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に，昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに，専門職員の増員等の措置を実施した。またこれと並行して，路線内の埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため，日本道路公団と協議の上，予備調査を実施することになり，昭和63年３月に県教育委員会が用地の買収が進んでいた丸亀市郡家地区を対象として実施した。

予備調査の結果，郡家地区で集落跡を中心とする６遺跡の内容を把握することができ，同地区の本調査面積を 85,150㎡に確定した。

昭和63年度からの本調査は，香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

第１図遺跡位置図(1)

が調査担当者として実施した。昭和63年４月18日から三条番ノ原遺跡，郡家原遺跡，郡家一里屋遺跡の調査を，６月15日から郡家大林上遺跡外２遺跡の調査を実施した。今回報告する郡家大林上遺跡は，郡家地区６遺跡の東辺部に位置し，調査対象面積は11,175㎡である。



第２図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～善通寺）

第1表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No.	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	調査期間	遺構	遺物
1	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10,200	元. 6.26～ 2. 3.31 2. 4. 9～ 2.12. 5	弥生時代（環濠，竪穴住居，溝）古代溝，中世建物，近世井戸	弥生土器・土師器・須恵器，石器，木製品
2	龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元. 7. 1～ 2. 3.21 2. 5.28～ 2.12. 5 3. 4. 4～ 3. 6.18	古代掘立柱建物，中世建物，溝，土坑，墓，自然河川	縄文土器，土師器，須恵器，瓦器，磁器，中世鏡
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町中村	12,041 1,300	63. 4.18～元. 2.10 元. 4.10～ 2. 3.31	弥生時代竪穴住居，溝，自然河川	弥生土器ほか
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町黒島	7,677	63. 6.15～63.11.26	ユニット，溝，建物	旧石器，弥生土器，陶磁器
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町黒島・郡家町八幡下	17,099 2,600	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～ 2. 3.31	竪穴住居，掘立柱建物，溝	弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，斎串ほか
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町八幡上	14,067 6,450	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～ 2. 3.31	掘立柱建物，溝，自然河川	弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，有舌尖頭器ほか
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町大林上	11,175	63. 6.15～元. 3.22	掘立柱建物，溝，自然河川	須恵器，斎串ほか
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町田代	12,741	63. 6.15～元. 2.17	掘立柱建物，溝，火葬墓	弥生土器，須恵器，近世陶磁器，ナイフ形石器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町北・原	3,033	63.12.12～元. 3.25	掘立柱建物，溝	
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町北七条	4,034	63.12.13～元. 3.27	溝，自然河川	土師器・須恵器
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町北七条	4,760	元. 2. 2～元. 3.31	掘立柱建物，溝	土師器
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	12,208	元. 4.10～元. 8.11	中世掘立柱建物，溝，自然河川	土師器，須恵器，近世陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町東二瓦礫	3,366	63.12.13～元. 3.27	掘立柱建物，溝，自然河川	土師器・須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2. 3. 1～ 2. 3.31		
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 飯山町東坂元	28,100 500	2. 8. 2～ 3. 3.20 3. 9. 2～ 3. 9. 4	弥生時代竪穴住居，古墳時代竪穴住居，柱穴	弥生土器，土師器，須恵器

第2表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

No.	遺　跡　名	所　在　地	調査面積（㎡）	調　査　期　間	遺　　溝	遺　　物
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5.10～ 3. 1.17	古墳時代竪穴住居，古代～中世建物，溝	縄文土器，土師器，須恵器，墨書土器，土馬，耳環
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5.10～ 3. 2.28 3. 4. 4～ 3. 9.13	弥生時代竪穴住居，古代～中世掘立柱建物，溝，土坑，土坑墓	弥生土器，土師器，須恵器，耳環，鉄小刀
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5.10～ 3. 1.31 3. 7. 1～ 3. 7.16	弥生時代（水田，井堰），溝，自然河川	縄文晩期土器，弥生土器，石器，(打製石庖丁ほか)，木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5.10～ 3. 3. 8	弥生時代（溝，自然河川），中世（建物，溝）	弥生土器，土師器，石器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2. 4.12～ 3. 3.28 3. 7.18～ 3. 9.27	弥生時代自然河川，弥生時代～古墳時代(竪穴住居，掘立柱建物，土坑)，古代～中世（溝，水田）	弥生土器，土師器，須恵器，石器，木製品，帯金具
21	飯山一本松遺跡	飯山町	2,200	元. 4.17～元. 5.16		弥生土器，土師器，須恵器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～ 2.12.26	土坑	須恵器
23	綾南奥下池南遺跡	綾南町	2,900	元. 5.22～元. 7.24	須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	11,350	元. 8.19～ 2. 2.28	弥生時代溝，水田，動物足跡	弥生土器，土師器，須恵器
25	国分寺楠井遺跡	国分寺町福家	4,400	2. 4.11～ 2.10. 2	古墳時代横穴式石室，中世窯，建物	土師器，須恵器，瓦質土器，耳環
26	国分寺六ツ目山古墳	国分寺町福家	900	元. 9. 1～元.12.28	前方後円墳（埋葬施設3基）	古式土師器・鉄器
27	国分寺六ツ目山遺跡	国分寺町福家	5,600	元.10. 1～ 2. 2.28	中近世建物	弥生土器，近世陶磁器，石器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元. 8.19～ 2. 3.25 2. 5.10～ 3. 3.25 3. 4. 5～ 3. 7.18	旧石器ブロック，弥生時代～近世建物，埴輪焼成土坑，古墳，溝，土坑	弥生土器，土師器，須恵器，埴輪，陶棺，ナイフ形石器，船底形石器

第２節　調査区の設定と調査の経過

郡家大林上遺跡は，丸亀市郡家町大林上を中心にして所在する。今回の調査対象地は，西を市道八幡下原線，東を市道柞原郡家線に挟まれた部分である。

第４図に示すとおりの調査区を設定した。対象地の南西隅を基準（＋29.080，＋139.360）として，20×20ｍの調査区を設け，東西方向にアルファベットのＡからＫを，南北にアラビア数字の１から９をつけて調査区の記号とした。調査区の主軸方位は国土座標系第Ⅳ系に準拠する。

調査の進行にともなって，現状の地割りをもとに調査を行うことにし，西から東に向ってⅠ～Ⅳ区の2,500㎡程度の４つの掘削区域を設定した。さらにその内部を３～４の小区画に区分して順次調査を実施した。調査は，水田耕作土を重機によって除去し，当初は各層ごとに遺構検出を行ったが，第２層の上面は遺構が稀薄であることが判明したため，のちは本調査区における地山と考えられる第４層上面までを人力で除去し，第４層上面で遺構検出を行った。

第３節　調査と整理の体制

調査体制

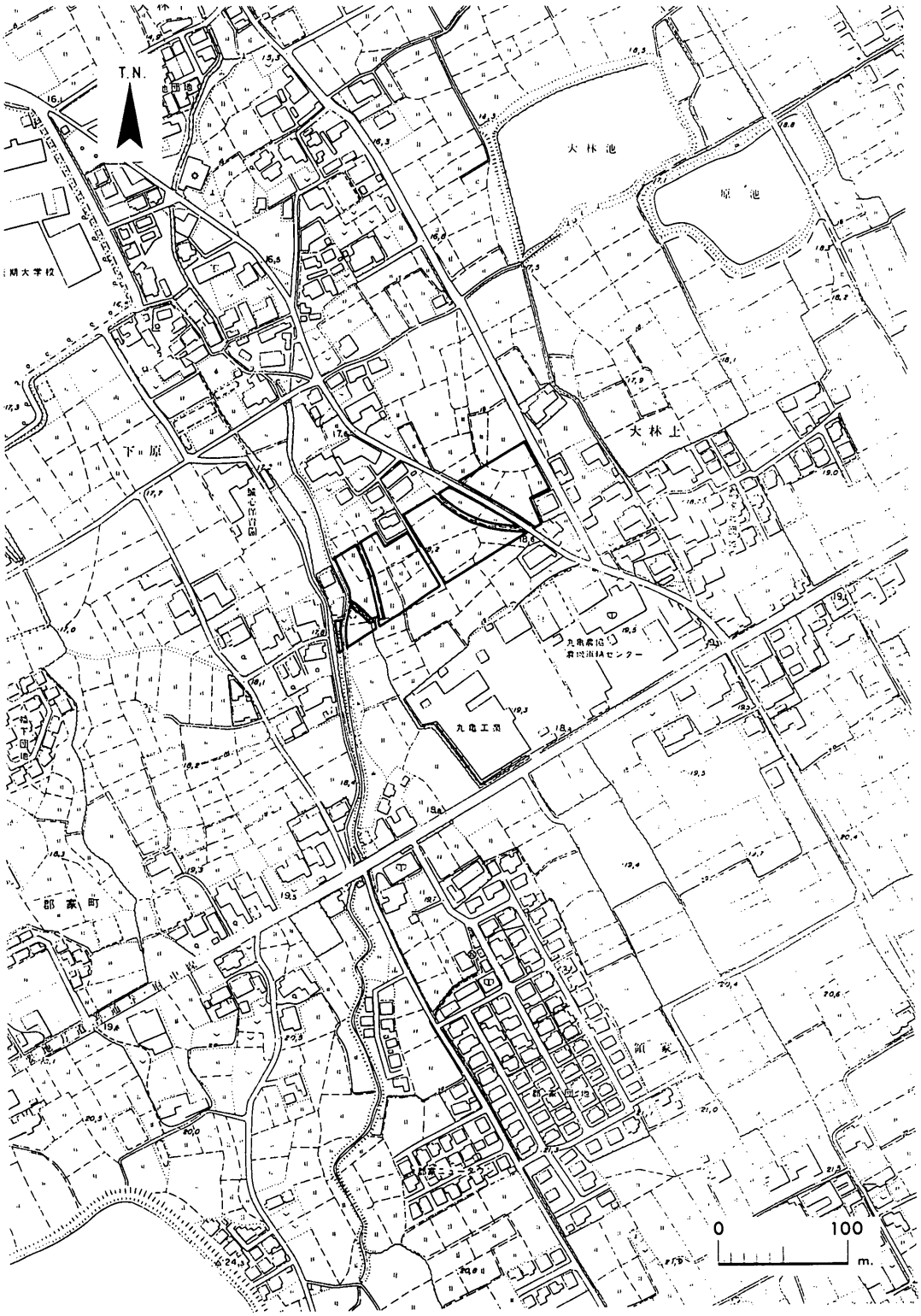
昭和63年度の調査体制は下記のとおりである。

香川県教育委員会事務局　文化行政課

課　　長	廣瀬和孝
課長補佐	高木　尚
副主幹	野網朝二郎（6．1～）
総務係長	宮谷昌之（～5.31）
係長	宮内憲生（6．1～）
主事	横田秀幸（6．1～）
主事	水本久美子
埋蔵文化財係長	大山真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所　　長	田丸秀明
次　　長	小原克己
総務主査	加藤正司
主査	山地　修(6．1.～)
主事	三宅浩司
参事	見勢　護
調査文化財専門員	真鍋昌宏
技師	大林修三
技師	木下晴一
調査技術員	吉田良三



第3図　遺跡位置図　(2)

整理体制

郡家大林上遺跡の整理業務は，平成５年10月１日から同６年３月31日までの期間で実施したが，現地の調査を中心となって実施した職員が他の整理業務を担当したり転出したため，廣瀬が担当した。また，西村尋文・木下晴一・蔵本晋司が援助した。

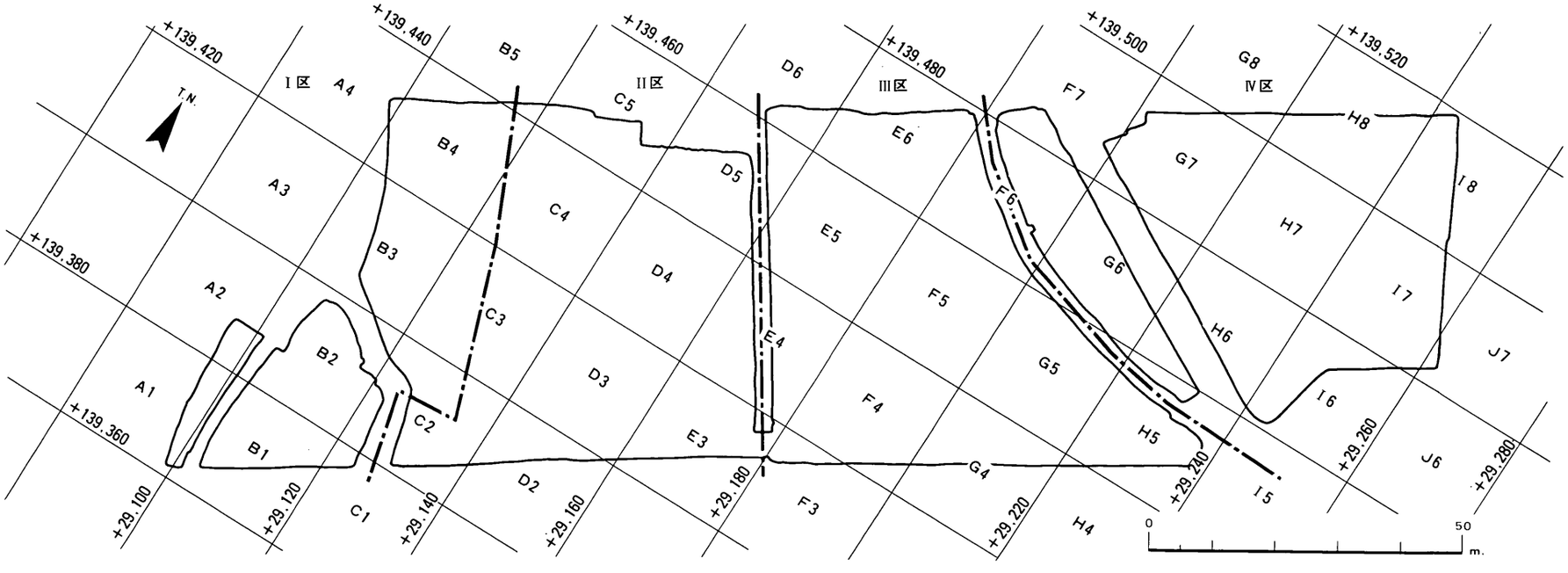
平成５年度の整理体制は下記のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

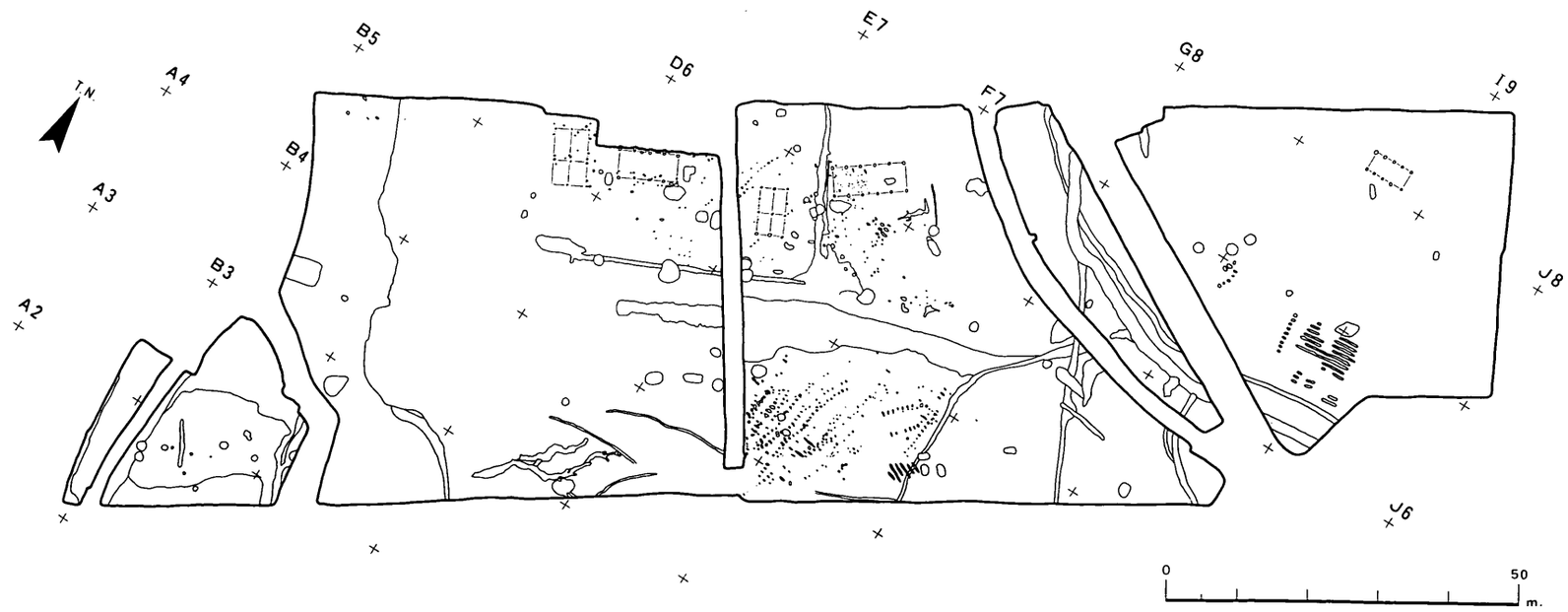
課　長	中村　仁
主　幹	菅原良弘
主　幹	小原克己
総務係長	源田和幸
主任主事	櫻木新士
主　事	石川恵三子（～5.31）
主　事	藤原和子（6. 1～）
埋蔵文化財係長	藤好史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所　長	松本豊胤
次　長	真鍋隆幸
総務係長	土井茂樹
主任主事	西村厚二
調査係長	廣瀬常雄
整理補助員	葛西　薫
整理補助員	石川ゆかり
整理補助員	長谷川郁子
整理作業員	陶川真由美
整理作業員	前田好美
整理作業員	加藤珠里
整理作業員	谷　純子


+139.420
+139.440
+139.460
+139.480
+139.500
+139.520
+139.380
+139.360
+29.100
+29.120
+29.140
+29.160
+29.180
+29.220
+29.240
+29.260
+29.280
T.N.
I区
II区
III区
IV区
A1
A2
A3
A4
B1
B2
B3
B4
B5
C1
C2
C3
C4
C5
D2
D3
D4
D5
D6
E3
E4
E5
E6
F3
F4
F5
F6
F7
G4
G5
G6
G7
G8
H4
H5
H6
H7
H8
I5
I6
I7
I8
J6
J7
0
50
m.

第4図　調査区割り図


T.N.
A2
A3
A4
B3
B4
B5
D6
E7
F7
G8
I9
J6
J8
0
50
m.

第2章　立地と環境

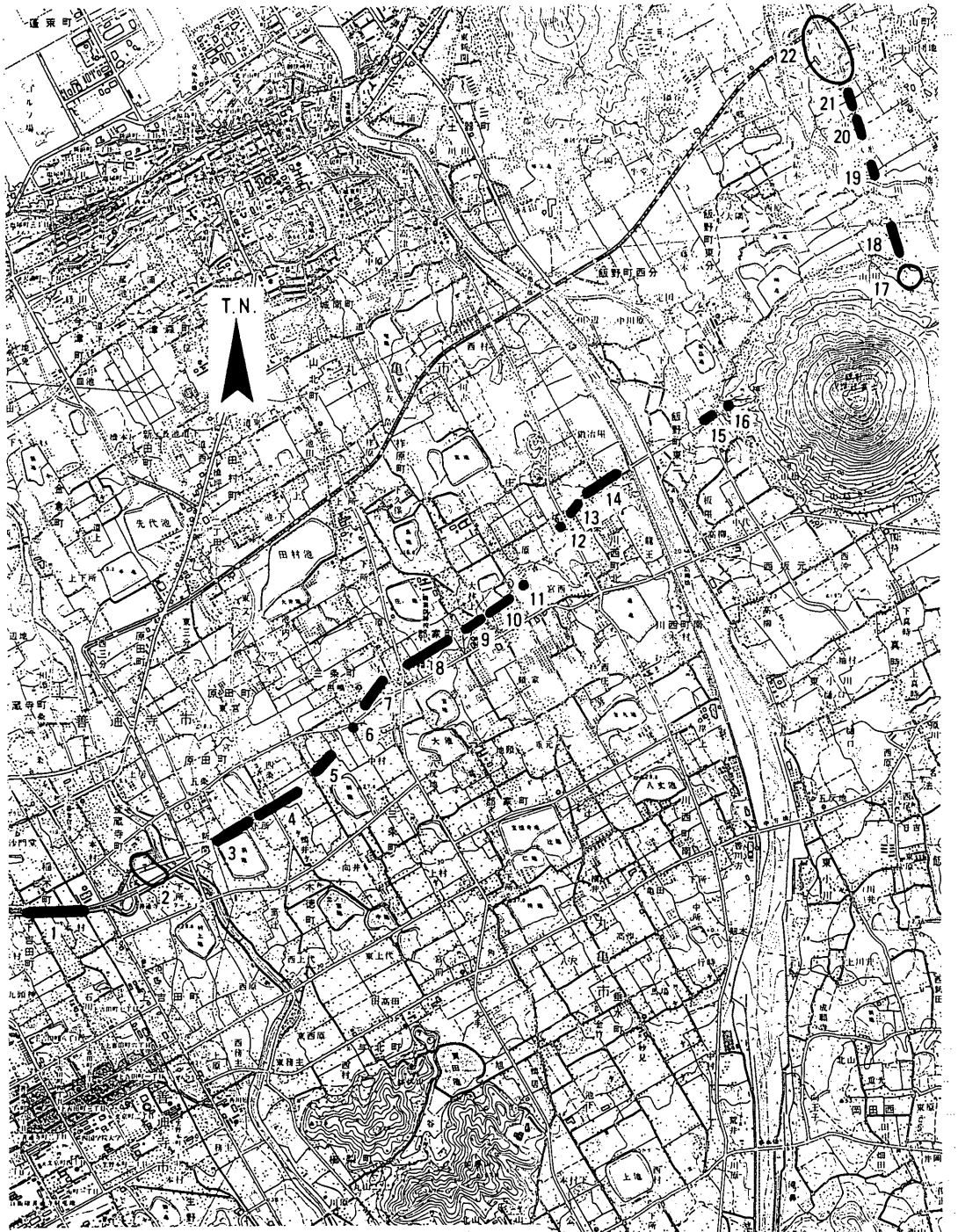
第1節　地理的環境

香川県の中央部から西にひろがる丸亀平野は，土器川・金倉川・弘田川などの中小河川の長期にわたる氾濫・堆積作用によって形成された沖積平野とされてきた。しかし，昭和63年に実施した丸亀市の三条黒島遺跡の調査で，表土下約70センチのところで旧石器の接合資料を検出し，また今回報告する郡家大林上遺跡や郡家一里屋遺跡では，ＡＴ火山灰の純粋層が確認された。これらのことから，土器川と金倉川に挟まれた範囲を中心とした地域の成り立ちについては，再検討が必要となってきている。

郡家大林上遺跡は，丸亀平野の中央部，丸亀市郡家町大林上を中心として所在し，金倉川と土器川に挟まれた微高地上に営まれている。その標高は17～18メートルであり，また南から北に僅かに下っている。調査地内に自然河川跡と考えられる落ち込みが認められる。

第2節　歴史的環境

丸亀平野では，三井遺跡（多度津町三井周辺），五条遺跡（善通寺市原田町周辺），中の池遺跡（丸亀市金倉町周辺）などの弥生時代前期の土器を出土する遺跡がはやくから知られており，内陸部における旧石器，縄文時代の実態がいま一つ明確ではない香川県においては，比較的はやくから人々の生活が始まった地域の一つとして考えられてきた。しかし，昭和57年度末から実施してきた四国横断自動車道建設に伴う発掘調査によって，新たに旧石器・縄文時代の遺物を出土する遺跡が知られるようになってきた。丸亀市の三条黒島遺跡の調査では，翼状剝片石核や翼状剝片などの接合資料からなる旧石器群が原位置を保って出土し，また同市郡家田代遺跡の調査では，ナイフ形石器などがまとまって出土している。善通寺市の永井遺跡の調査では縄文時代後・晩期の土器が多量に出土している。明確な遺構はないものの，大規模な流路の底に杭を打ち込んで流れを制御する遺構が確認できている。またこれら以外にも，四国横断自動車道建設に伴い実施した発掘調査で，明



1．稲木遺跡
2．金蔵寺下所遺跡
3．龍川五条遺跡
4．龍川四条遺跡
5．三条番ノ原遺跡
6．三条黒島遺跡
8．郡家原遺跡
8．郡家一里屋遺跡
9．郡家大林上遺跡
10．郡家田代遺跡
11．川西北・原遺跡
12．川西北・七条Ⅰ遺跡
13．川西北・七条Ⅱ遺跡
14．川西北・鍛冶屋遺跡
15．飯野・東二瓦礫遺跡
16．飯野・東分山崎南遺跡
17．川津東山田遺跡
18．川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区
19．川津二代取遺跡
20．川津下樋遺跡
21．川津中塚遺跡Ⅰ・Ⅱ区
22．下川津遺跡

確な遺構には伴わないものの，旧石器や縄文土器が多くの遺跡で確認され出してきており，弥生時代以前の同地域の様相も資料の増加を待って再検討しなければならないだろう。

弥生時代の遺跡は，前期から後期の全時期を通して広く営まれている。前期には，善通寺市の甲山北遺跡・三井遺跡・稲木遺跡，丸亀市の三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡などがこの平野に営まれている。中期には，善通寺市の矢ノ塚遺跡や同市西碑殿遺跡が平野西方の天霧山の麓に営まれる。後期の遺跡としては，丸亀市の三条番ノ原遺跡・群家原遺跡，善通寺市の旧練兵場遺跡・稲木遺跡などが営まれる。いづれにしても，この沖積平野と密接に関連した遺跡が広範囲にわたって認められるのが状況である。弥生時代を代表する遺物である青銅器が集中して出土しているのも，この地域の特徴の一つである。我拝師山の北斜面で銅鐸・銅剣が，南側で銅鐸・銅剣・銅鉾が出土している。

古墳時代のこの地域は，香川県の古墳集中地域の一つであり，平野奥部の山麓を中心として 400基程度の古墳が数えられている。平野奥部の磨臼山から池下にいたる約２キロには，磨臼山古墳・鶴ヶ峯１号墳・同２号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳などの６基以上の前方後円墳が近接して直線上に築造されている。これらは古墳時代の前期末から後期の中頃までにわたって築かれたと思われ，まとまった古墳群として注目される。古墳時代前期のこの地域の特徴の一つは，海抜約 400メートルの高地に築かれた野田院古墳をはじめ，椀貸塚古墳・経塚古墳・丸山１号墳・同２号墳・大窪古墳などの積石塚が大麻山山腹から東麓部にかけて築造されることである。県内で積石塚が集中して築造されるのは，高松平野の西辺部と坂出平野の東辺部，それに津田湾の一部である。積石塚の発生要因はいま一つ明確ではないが，平野中央部の稲木遺跡で確認されている弥生時代後期後半を中心とした時期の集石墓群にも注意すべきである。古墳時代後期の古墳にも注目すべきものが平野奥部や大麻山山麓部に認められる。善通寺市善通寺町にある前方後円墳の王墓山古墳は，横穴式石室を埋葬施設としており，金銅製の冠帽をはじめ優れた馬具や武具類を副葬していた。また大麻山山麓には，夫婦岩・岡古墳群などの10基単位程度の群集墳が数多く築造されており，これらも旧練兵場遺跡を中心として平野部に営まれた集落遺跡との関連で考えられるだろう。

歴史時代のこの地域は，平安時代にまとめられた『延喜式』・『倭名類聚鈔』によると那珂郡と多度郡とに分かれ，那珂郡は眞野・良野・子松・高篠・櫛無・垂水・喜徳・郡家・柳原・金倉・智多の十一郷，多度郡は生野・良田・葛原・三井・吉原・弘田・仲村の七郷に分かれていたとされる。また，古代の文化や政治に重要な役割を担った幹線道路であ

る南海道には，引田・松本・三渓・河内・甕井・柞田に驛が置かれたとされている。「河内」は，現在の坂出市の府中近辺に，また「甕井」は多度津町三井近辺に比定されることが多い。いずれにしても南海道は，この平野を東西に横切ることになり，肥沃な水田を背景として繁栄した地帯であったのだろう。古代豪族と密接な関係をもつ古代寺院も仲村廃寺（伝導寺跡）や善通寺などがこの地域に建立される。

第3章　調査の成果

第1節　調査の概要

今回検出した遺構面は，後世の削平や地下げを受けているため，良好なものではない。検出している遺構は，掘立柱建物遺構，ピット，土坑，井戸，溝状遺構，畝状遺構，自然河川跡などである。

掘立柱建物遺構は5棟を確認した。柱穴掘形は，いずれも比較的小規模なものである。5間×1間の建物遺構が1棟，4間×2間の建物遺構が1棟，4間×1間の建物遺構が2棟，2間×2間の建物遺構が1棟である。これらの建物遺構から出土している遺物が極めて少ないため，時期の特定には困難を伴うが，近接して検出している土坑が同じよう埋土を伴っているため，その出土遺物から近世の建物遺構と判断しておく。

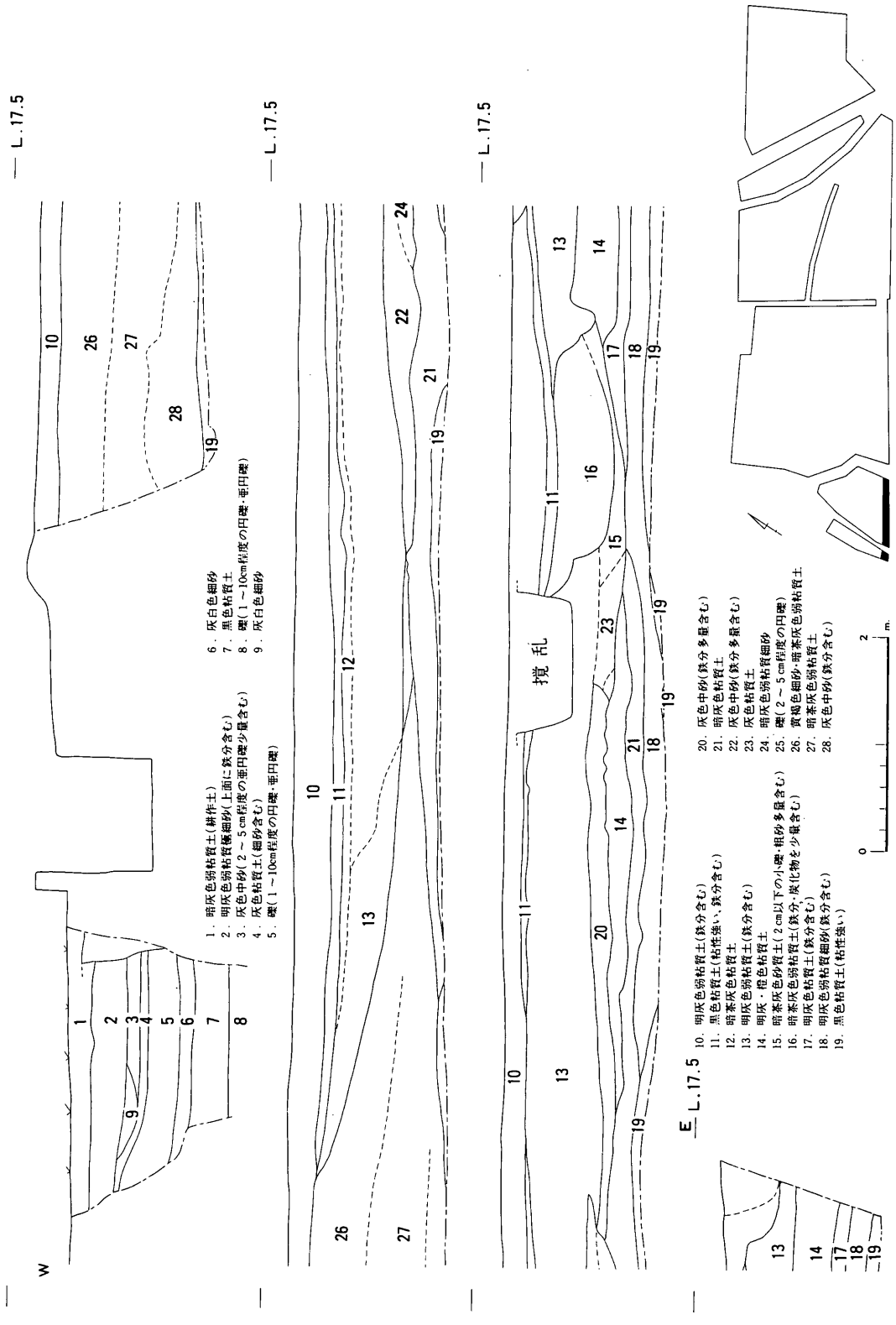
比較的大規模な土坑を13基検出した。坑内の上部に大量の礫が含まれ，近世を中心とした時期の遺物を包含していた。また，土坑内部に底部を打ち欠いた大型の土器や曲物片を伴うものがあり，井戸遺構と考えられる。調査区の東部で畝状遺構を検出した。ほぼ東西方向に伸びており，幅約40cm，高低差約7cmの状態で検出している。

自然河川は，調査地の東西両端部で検出しており，おおむね南北方向の流路を持っているようである。西端部で検出した自然河川は，堆積状況や埋土から3時期以上にわたる自然河川と考えられる。弥生土器から中世にいたる土器や斎串が出土している。東端部で検出した自然河川は遺物が検出できなかったため，時期は明らかにできなかったが，幅約13m，深さ約2mの規模をもつ。

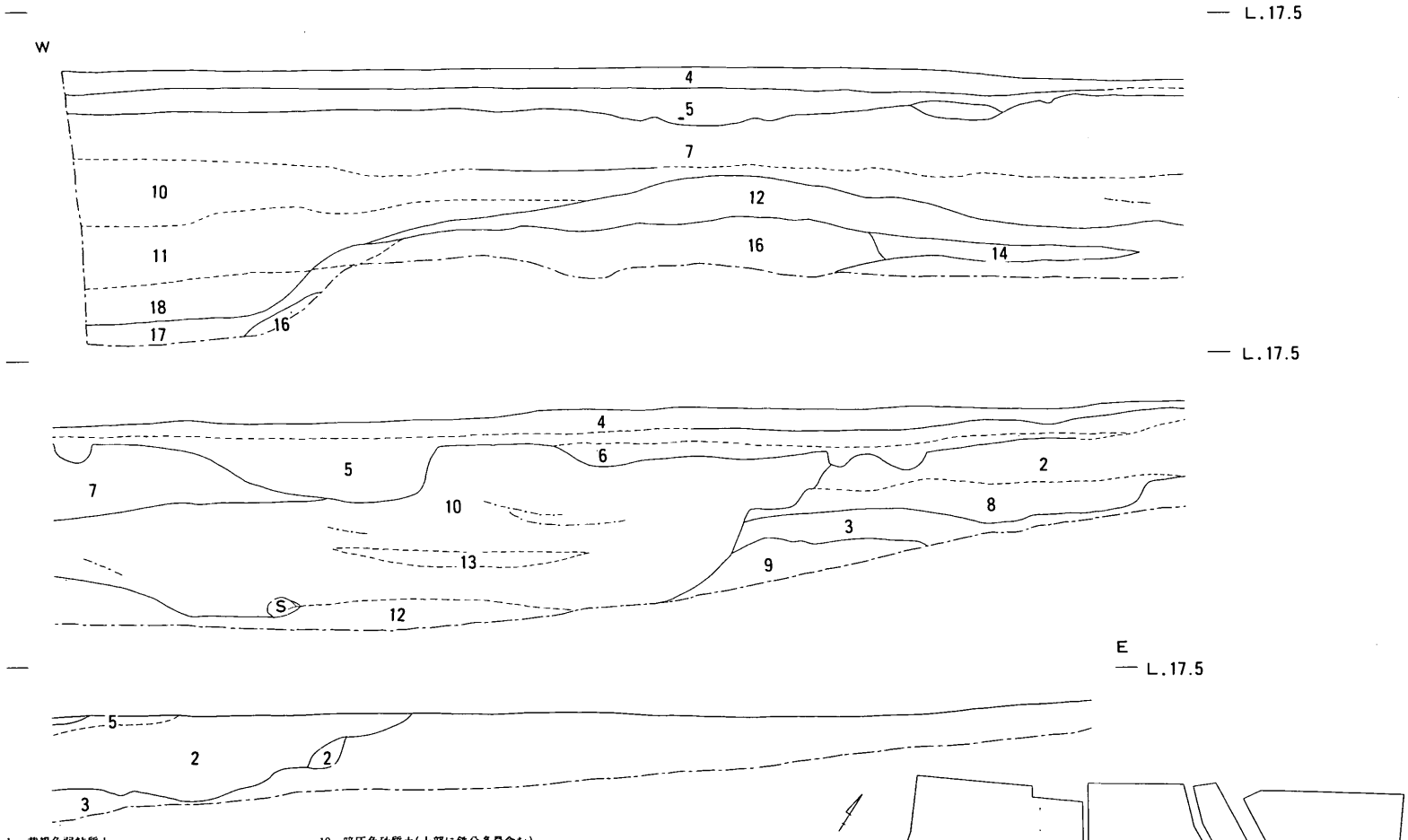
また，これらの自然河川に挟まれた部分で東西方向に流れをもつ小規模な流路を検出している。

第2節　土　　層　　序

郡家大林上遺跡は丸亀平野に位置し，西方約2.9kmに金倉川が，また東方約 1.6kmに土


L.17.5
W
E
1. 暗灰色弱粘質土(耕作土)
2. 明灰色弱粘質極細砂(上面に鉄分含む)
3. 灰色中砂(2～5cm程度の亜円礫少量含む)
4. 灰色粘質土(細砂含む)
5. 礫(1～10cm程度の円礫・亜円礫)
6. 灰白色細砂
7. 黒色粘質土
8. 礫(1～10cm程度の円礫・亜円礫)
9. 灰白色細砂
10. 明灰色弱粘質土(鉄分含む)
11. 黒色粘質土(粘性強い、鉄分含む)
12. 暗茶灰色粘質土
13. 明灰色弱粘質土(鉄分含む)
14. 明灰・橙色粘質土
15. 暗茶灰色砂質土(2cm以下の小礫・粗砂多量含む)
16. 暗茶灰色弱粘質土(鉄分・炭化物を少量含む)
17. 明灰色粘質土(鉄分含む)
18. 明灰色弱粘質細砂(鉄分含む)
19. 黒色粘質土(粘性強い)
20. 灰色中砂(鉄分多量含む)
21. 暗灰色粘質土
22. 灰色中砂(鉄分多量含む)
23. 灰色粘質土
24. 暗灰色弱粘質細砂
25. 礫(2～5cm程度の円礫)
26. 黄褐色細砂・暗茶灰色弱粘質土
27. 暗茶灰色弱粘質土
28. 灰色中砂(鉄分含む)
撹乱
0
2
m

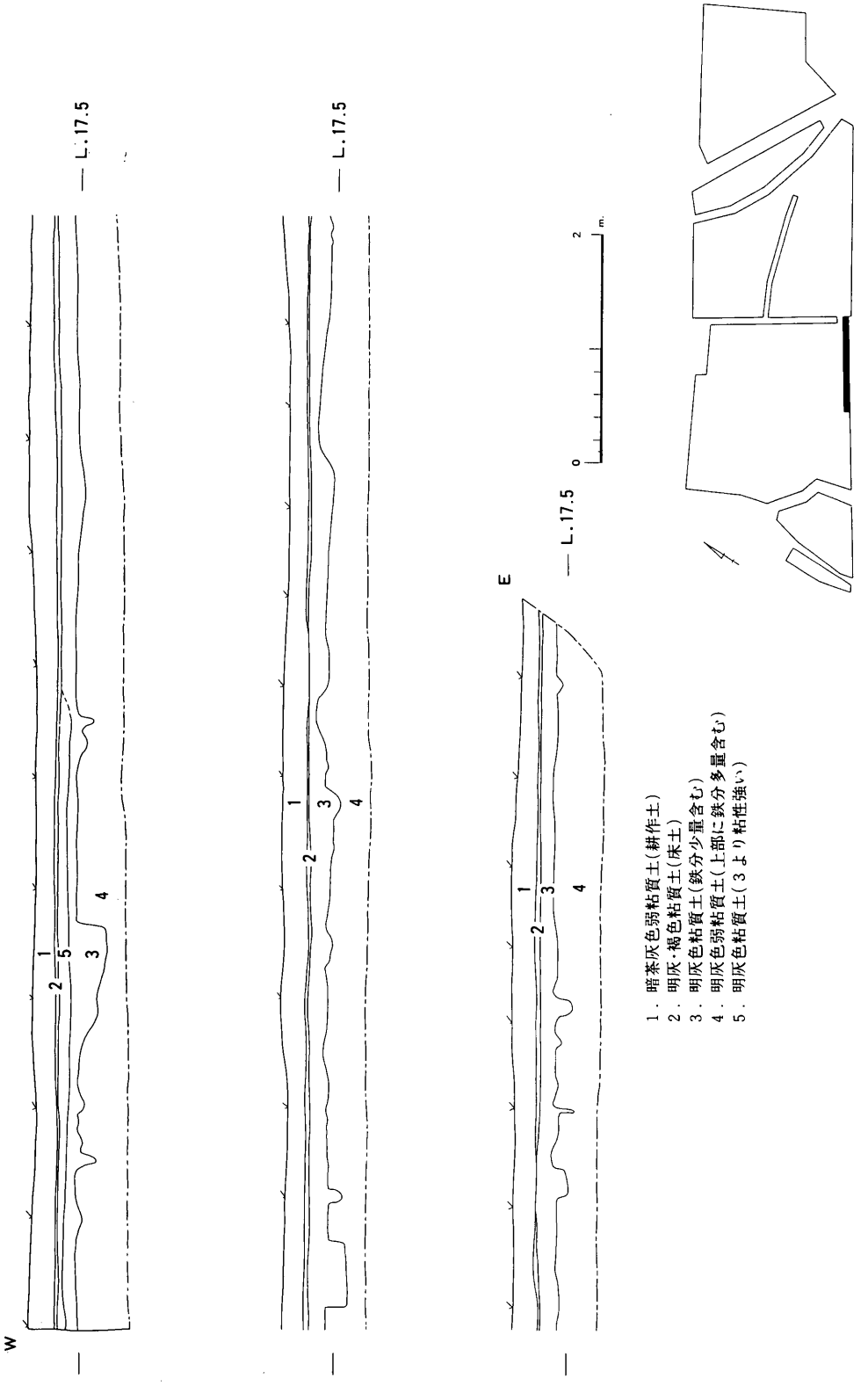
第6図　Ⅰ区南壁土層図



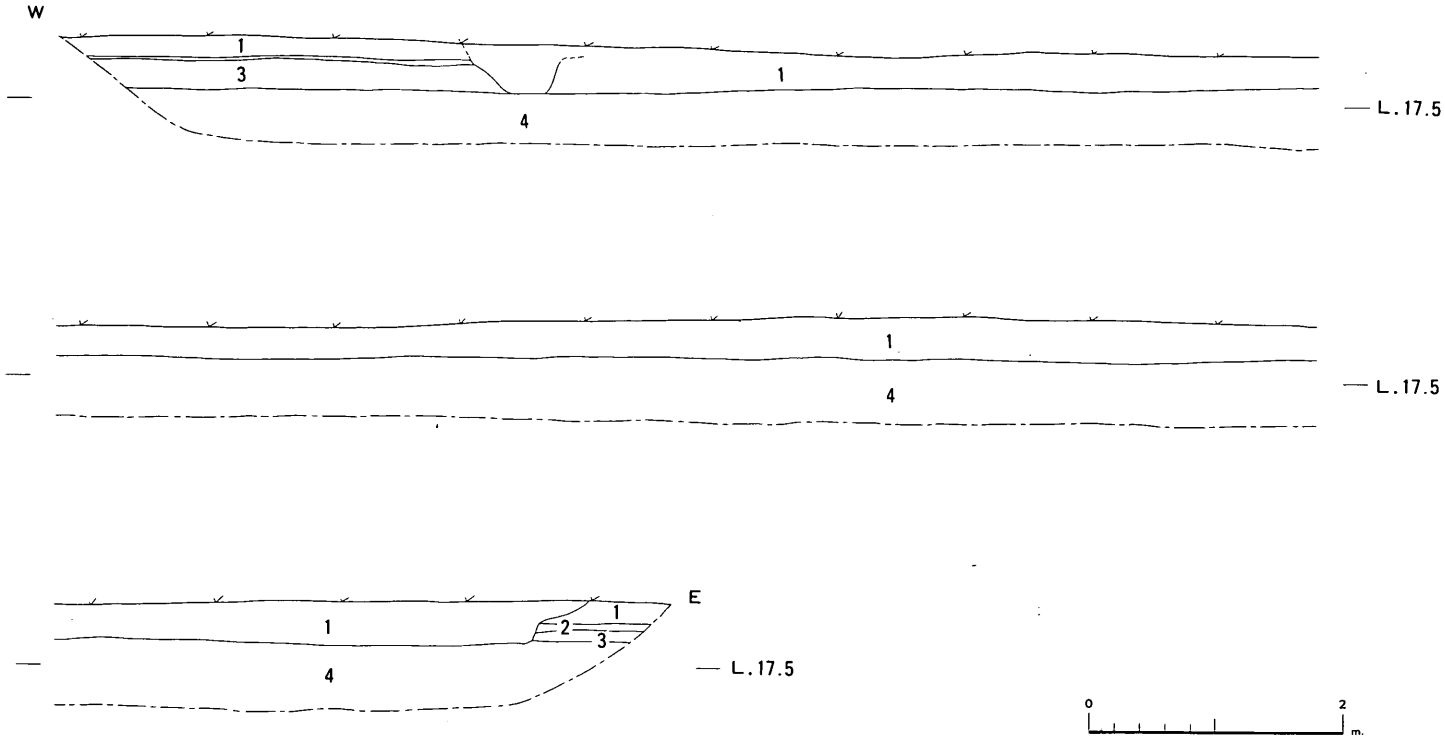
1．黄褐色弱粘質土
2．灰色弱粘質土(鉄分多量含む)
3．黒色粘土
4．明灰色弱粘質土(鉄分少量含む)
5．明灰色弱粘質土(鉄分含む)
6．明灰色弱粘質土(鉄分多量含む)
7．明灰色弱粘質土(6より鉄分多い)
8．茶褐色中砂(鉄分多量含む)，灰色粘質土(礫少量含む)
9．明灰色弱粘質土(鉄分含む)
10．暗灰色砂質土(上部に鉄分多量含む)
11．灰～暗灰色弱粘質土(鉄分多量含む)
12．礫(3～10cm程度の亜円礫)
13．暗灰色中砂(0.5～1cm程度の礫多量含む)
14．暗灰色中砂～粗砂
15．礫(2～10cm程度の円礫・亜円礫)
16．暗灰色粘質土(細砂含む)
17．暗灰色粘質土
18．暗青灰色砂質土

0　2 m.

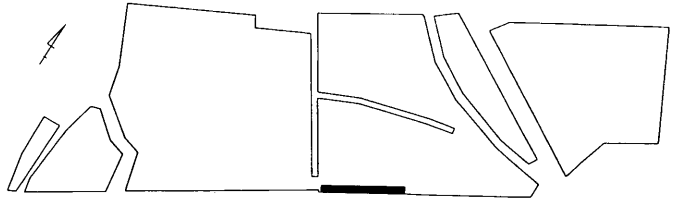
第7図　Ⅱ区南壁土層図（1）



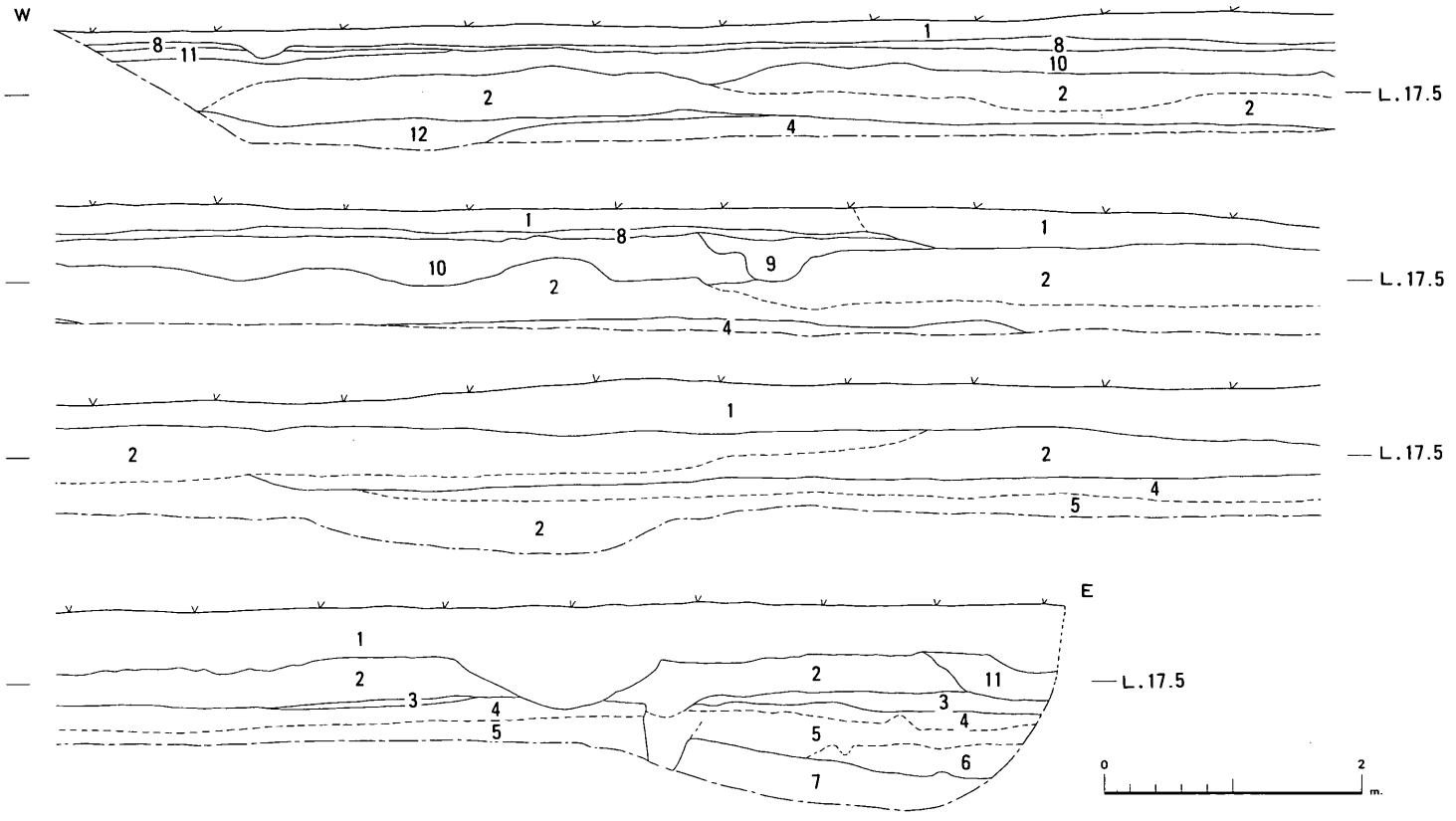
第8図　Ⅱ区南壁土層図（2）



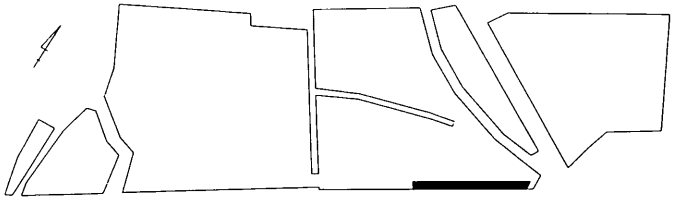
1．黒褐色弱粘質土(耕作土)
2．灰・褐色弱粘質土(床土)
3．明灰色粘質土
4．黄褐色弱粘質土



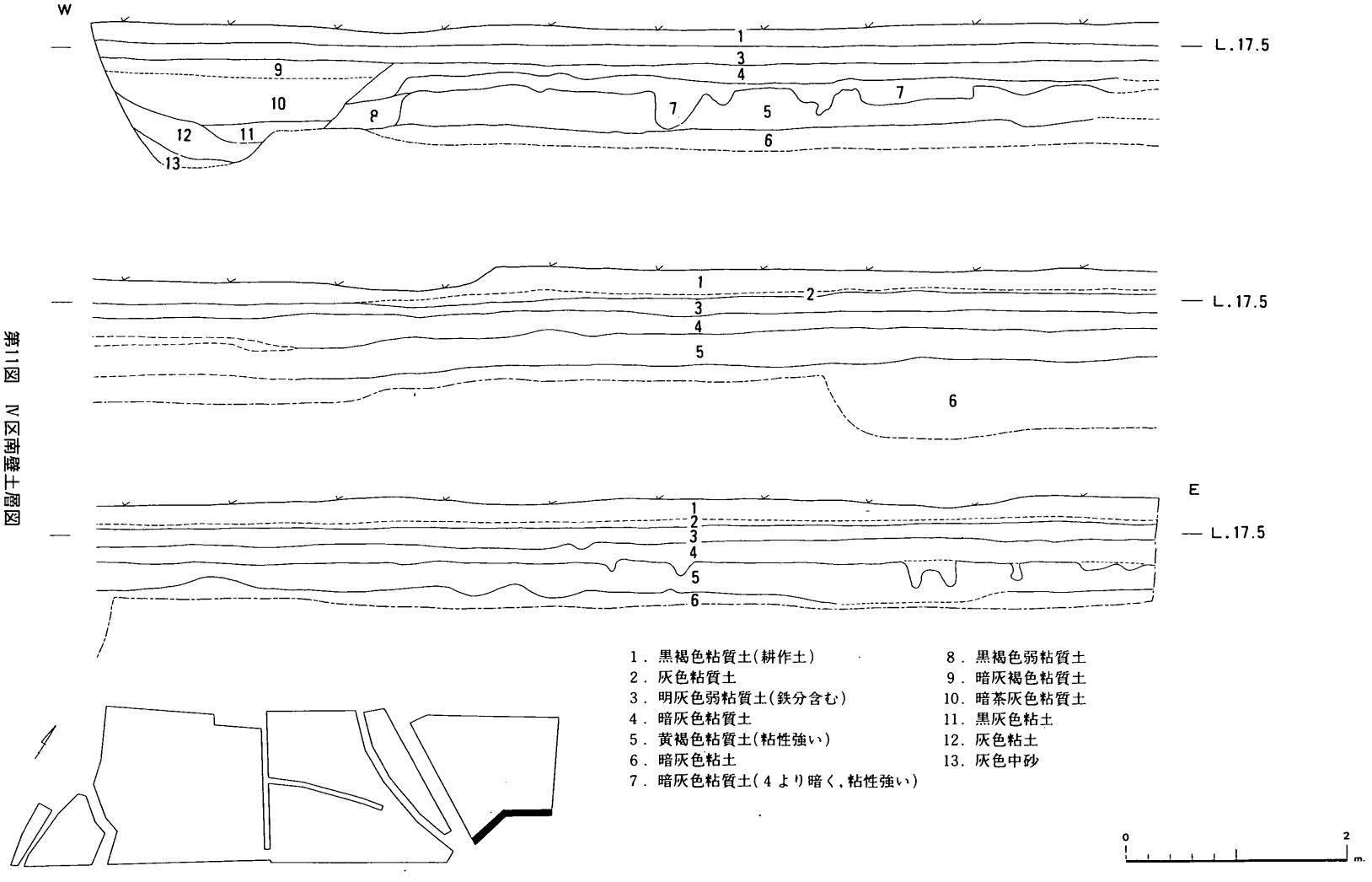
第9図　Ⅲ区南壁土層図（1）



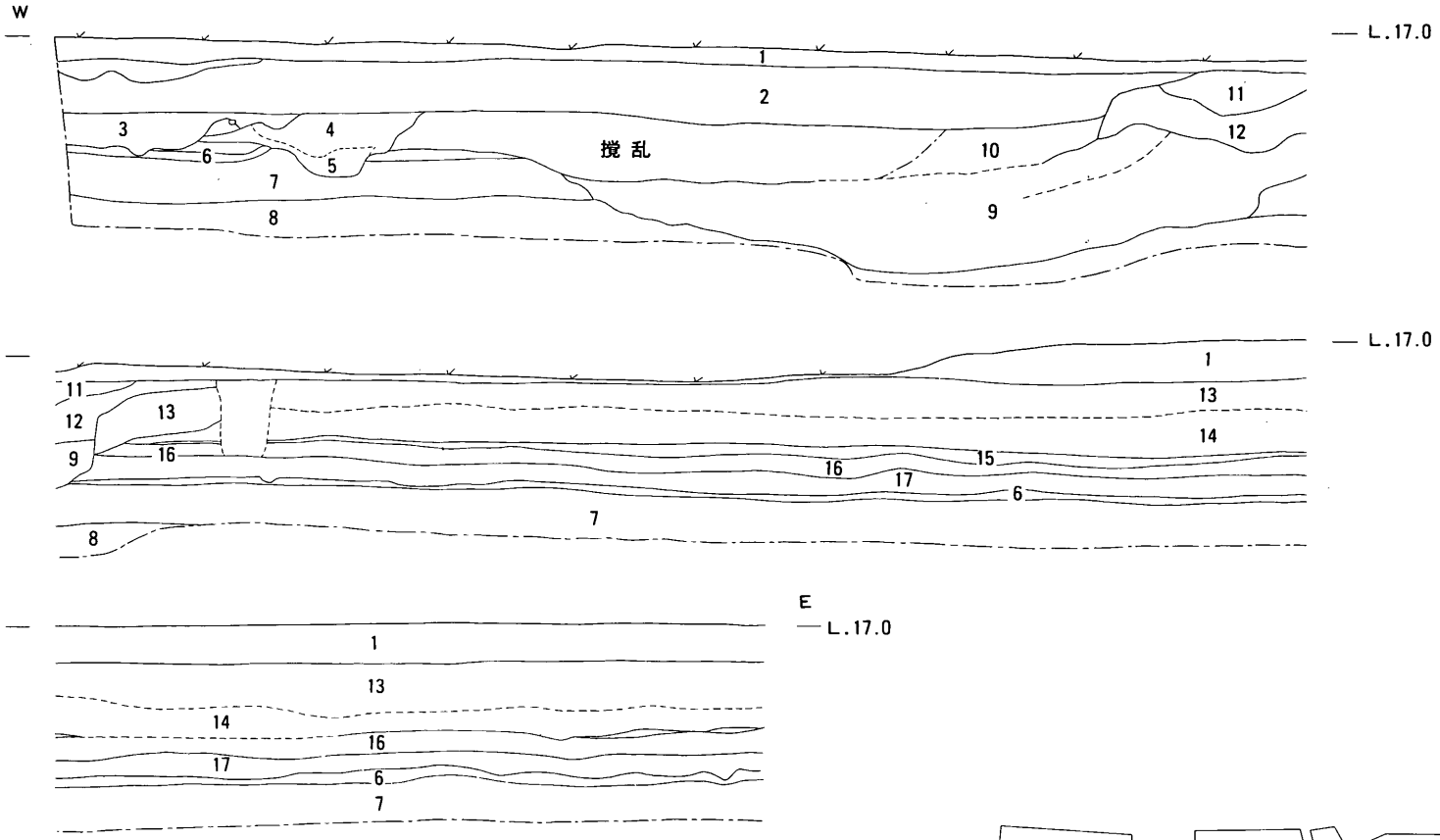
1．暗灰褐，明灰褐色弱粘質土（耕作土）
2．灰色砂質土（3～5cm程度の円礫多量含む）
3．灰色粘質土（鉄分多量含む）
4．暗茶灰色粘質土（上面に鉄分含む）
5．暗茶灰色砂質土
6．暗茶灰色砂質土（5より細砂でよくしまる）
7．暗茶灰色砂質土（6よりさらにしまる）
8．灰・褐色弱粘質土（床土）
9．暗灰褐色弱粘質土
10．黄灰色砂質土（鉄分含む）
11．灰色弱粘質土（鉄分含む）
12．黄褐色弱粘質土（硬い）

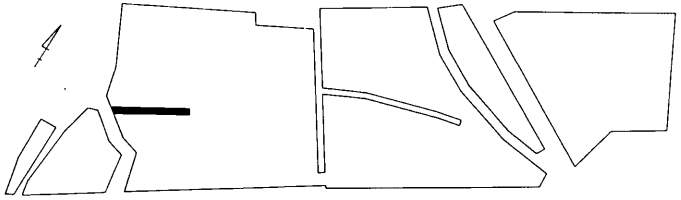


第10図　Ⅲ区南壁土層図（2）



第11図　Ⅳ区南壁土層図





1．暗灰色弱粘質土(耕作土)
2．明灰色弱粘質極細砂(鉄分多量含む)
3．灰色極細砂(鉄分少量含む)
4．明灰色細砂(1～3cm程度の小礫含む)
5．明灰色弱粘質極細砂
6．黒色粘土
7．茶灰色粘質土(粘性強い)
8．礫(1～10cm程度の円礫・亜円礫)
9．黒灰色弱粘質土
10．黒灰色弱粘質土(中・粗砂含む)
11．灰色弱粘質土(下部に鉄分多量含む)
12．灰色弱粘質土(鉄分含む,11よりやや明るい)
13．茶灰色砂質土
14．明灰色砂質土(鉄分含む)
15．粗砂(1cm程度の礫含む)
16．明灰色弱粘質細砂
17．灰色砂(鉄分多量含む)

0　2 m.

第12図　Ⅱ区SR01土層図

器川が北に向って流れており，両河川に挟まれた微高地上に所在する。調査の着手時にはほぼ全域が水田に開墾されていた。今回の調査は，東西の最大幅約216m，南北の最大幅約60mの範囲で実施したが，現地表面の標高は東辺部で約18.2m，西辺部17.1m程度であり，わずかに西に向って傾斜しているようである。また北に向って下っている。

本遺跡の土層図は南壁で図化したが，基本的な層序は第6図～第11図に示すとおりである。調査区の東端では，水田耕作土直下に5cm程度の粒径を中心とする亜円・円礫からなる礫層があり，それが下方にもぐるにつれ，上から明灰色弱粘質土層（第2層）・黄褐色弱粘質土層（第4層）などが堆積している。また西辺部で検出したＳＲ01と呼ぶ自然河川の微窪地には暗茶灰色粘質土層（第3層）があり，礫層・第2層・第3層・第4層の各上面で遺構が検出された。

第3節　遺構と遺物

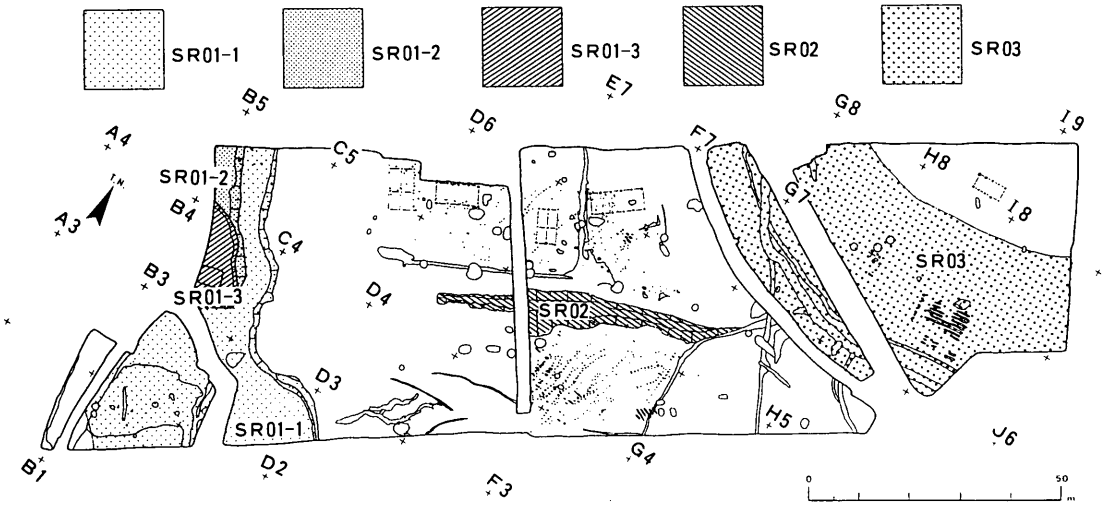
1．自然河川

今回の調査で3条の自然河川を検出している。西辺部で検出している自然河川をＳＲ01，中央部で検出しているものをＳＲ02，東端部で検出している自然河川をＳＲ03と呼称した。

ＳＲ01は，蛇行しているようであるが南北方向の流れをもつ。黄褐色粘質土を東岸として検出しているが，対応する西岸が調査区の外に位置すると考えられ，今回の調査では検出できなかった。堆積状況によって3時期以上の流路に区分できそうである。

ＳＲ02は東西方向の流れをもつ。狭小で小規模なものであり，東端は浅くなって消滅している。落ち込み状を呈する自然地形とも判断できそうである。

ＳＲ03は，南東方向から北西方向に向って，大きく蛇行して流れているようである。耕作土の直下に拳大以上の大きさの礫からなる礫層が堆積している。この礫層などを河川の岸としているようである。西に向うにしたがって，この礫層が深く落ち込んでいくようである。また，その上に泥炭層，砂層，黄褐色弱粘質土層などが順次堆積して，黄褐色弱粘質土層がこの遺跡の大部分の遺構面となるようである。礫層などに対する対岸は，現在の用水路などの障害物があり，確認できていない。



第13図　自然河川配置図

ＳＲ01　（図版第６～９，第13～19図）

今回の調査地の西端部，Ａ－１，Ｂ－１～４，Ｃ－２・３にかけて検出した自然河川跡である。西岸が検出できていないが，幅50m以上，深さ約２ｍの規模をもち，おおむね南から北に向って流下していた自然河川跡である。土層断面の観察によって３時期以上の流路に区分できるようであり，また東から西に向って流路が移動したようでもある。この自然河川が最終的に埋没した時期は，上面に堆積した層からの出土遺物から，近世と考えられる。

この自然河川の東岸の上層は粘質土であり，さらにその東方に今回検出している建物跡や土坑などの遺構が分布する。

ＳＲ01は，規模・堆積状況からみて長時間にわたる自然河川跡と考えられるが，Ｂ－３北辺部付近の堆積状況を例にとって説明すると，３時期以上の流路に区分できるようである。

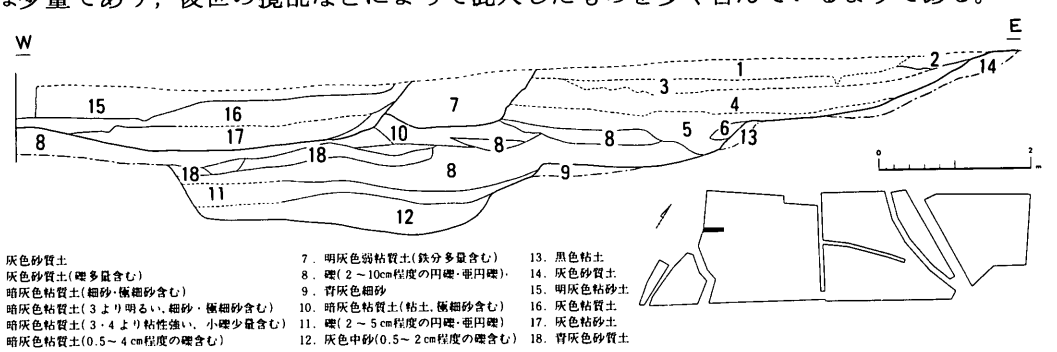
最も古い流路（第Ⅰ期流路）は，１～６，８，10～12，18各層の灰色砂質土，暗灰色粘質土，礫層，灰色砂層，礫層，灰色砂層で区分できるものであり，深さ２ｍ程度の規模をもつ一つの流路と考えられる。

４・５・10各層を流路の底として堆積する７層の明灰色弱粘質土も幅は最大2.0ｍ程度であろうが，深さ0.7m程度の流路であろう（第Ⅱ期流路）。

10層の暗灰色粘質土や７層を侵食して第Ⅲ期の流路が認められる。15～17層の明灰色粘砂土，灰色粘質土で，大きく一つの流路と考えられる。深さは0.8m程度のものである。

また，５・８層を最下層として機能していた時期や，18層を最下層として機能していた時期なども考えられるが判断できない。

なお，出土遺物の大半が第Ⅰ期流路からのものである。それ以外の流路からの出土遺物は少量であり，後世の攪乱などによって混入したものを多く含んでいるようである。



第14図　ＳＲ01土層実測図

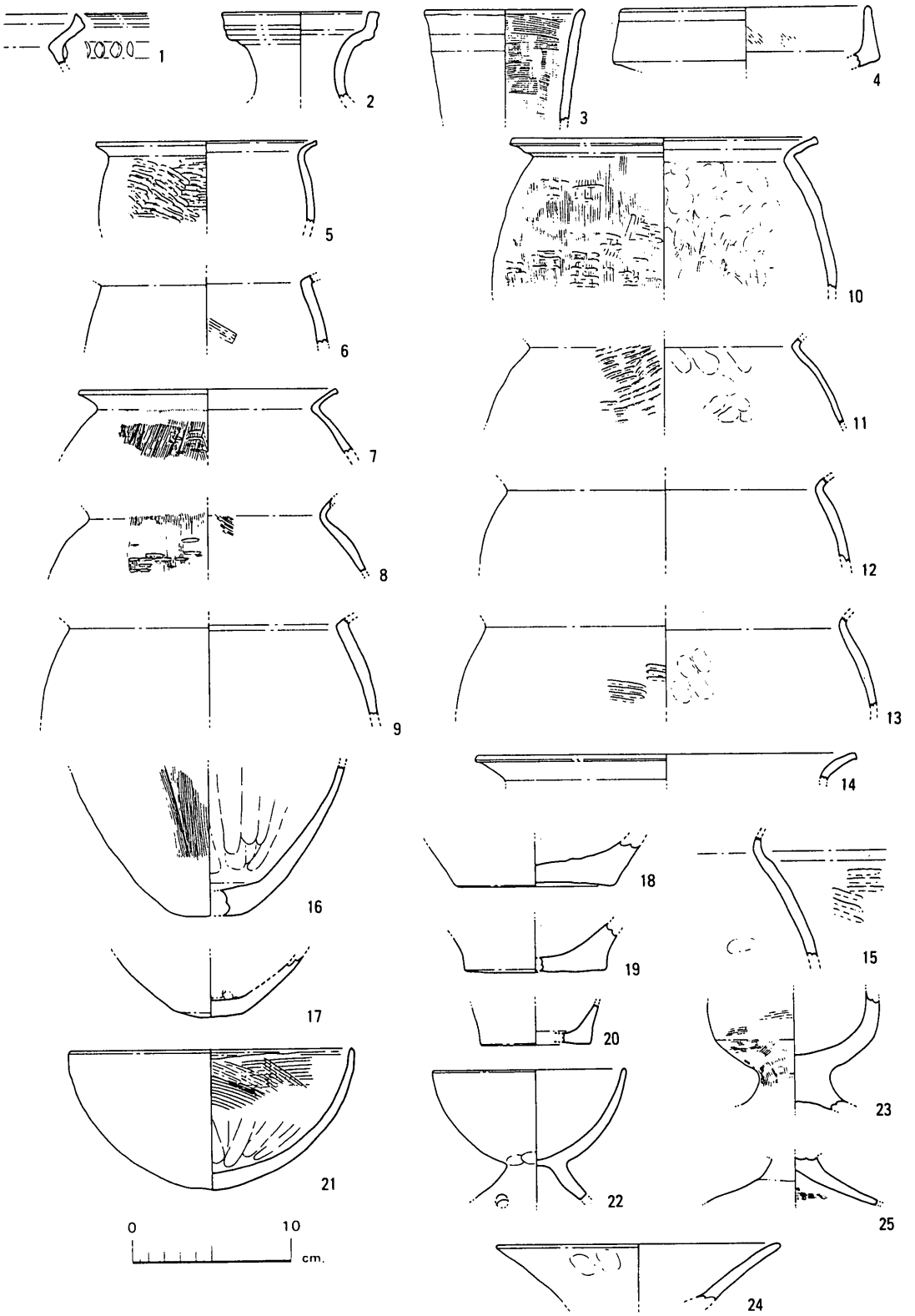
ＳＲ01－１（第Ｉ期流路出土の遺物）

弥生土器から中世の土器までを検出している。

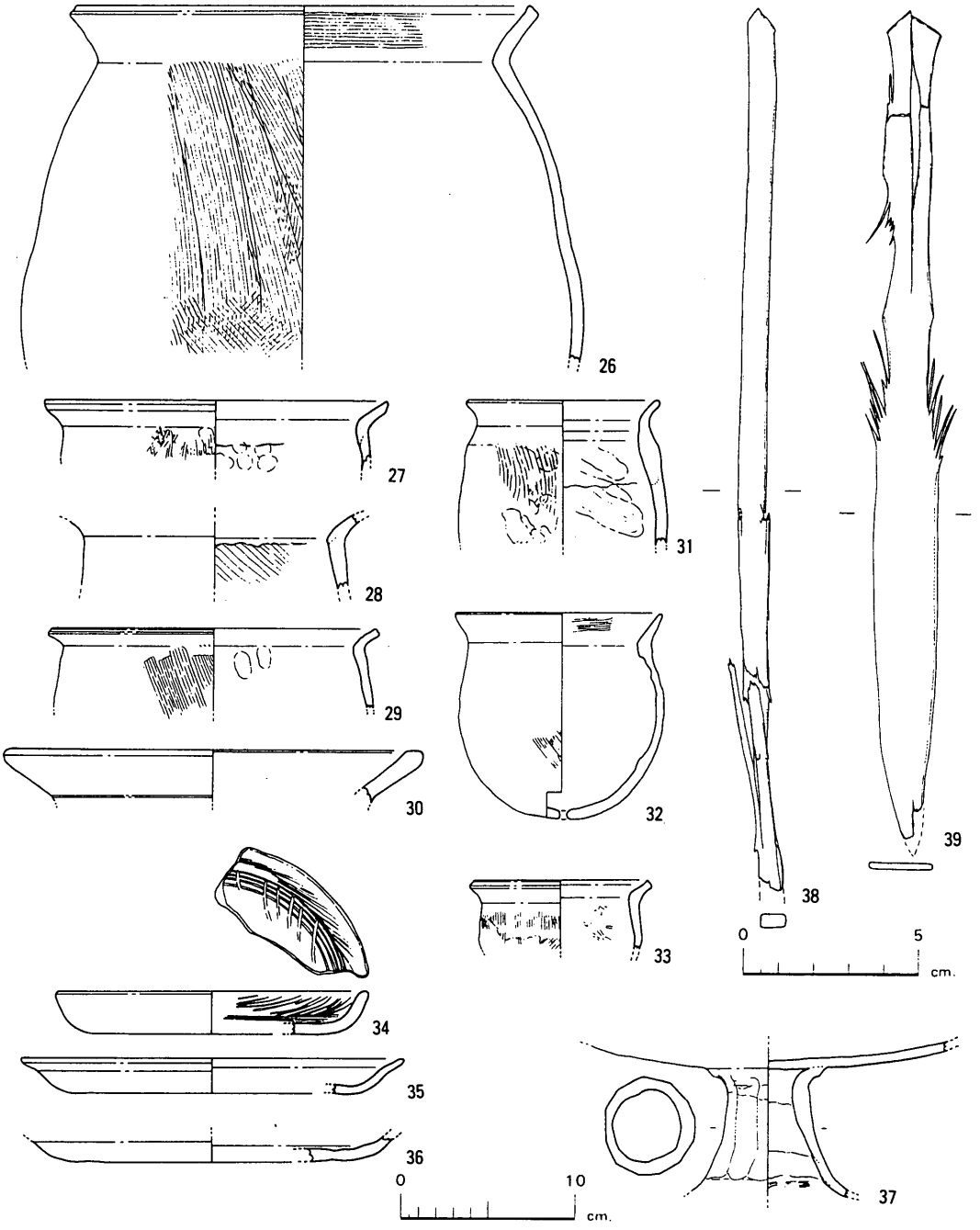
弥生土器は中期の土器を少量含んでいるが，大半は後期の土器である。壺，甕，高杯，鉢，支脚が出土している。40は，器壁全面に指によると考えられる調整痕を残す土製の支脚である。先端部が二股に分かれる。その他の土器は，いずれも小片であり，12・13などは摩滅が著しく，その摩滅状態や河川跡出土と言う検出条件からみれば，当該地以外の場所から流れてきた土器や，後世に混入した土器の可能性も考えられる。

奈良時代を中心とする時期の土師器，須恵器，木製品を検出している。土師器は，甕，壺，皿，高杯などである。34は内面に赤色顔料が遺存し，放射状のヘラ磨きが認められる。37は高杯である。脚部外面には，ヘラ状工具による丹念な面取りが認められ，内面には粘土紐を巻き上げた痕跡が残る。41・42は内面に粘土の接合痕を残し，外面には縦方向の粗い刷毛目を残す長胴の壺である。蛸壺として図化した。41の底部には，径２㎝程度の穿孔が認められる。類例は多くないが，この時期の遺物と判断した。32は小型の壺である。口縁部内面には横方向の，体部外面には縦方向の粗い刷毛目が残る。底部には，焼成後に穿たれた径１㎝程度の穿孔が認められる。須恵器は少量であるが，甕，杯身，杯蓋，高杯が出土している。45を除いては，いずれも小片である。この時期の遺物と考えられる斎串を２点検出している。38は，比較的厚い板材を素材としている。上端部を圭頭状に加工しているが，上端部及び縁辺部の切り欠きは認められない。下端部は欠失している。39は，薄い板材を素材としている。上端部を圭頭状に加工しており，その直下の縁辺部に上から下に向って切り欠きを施している。また，中央やや上方に，下から上，上から下の二対の切り欠きを施している。下端部は，剣先状に加工しているようであるが，先端部を欠失している。

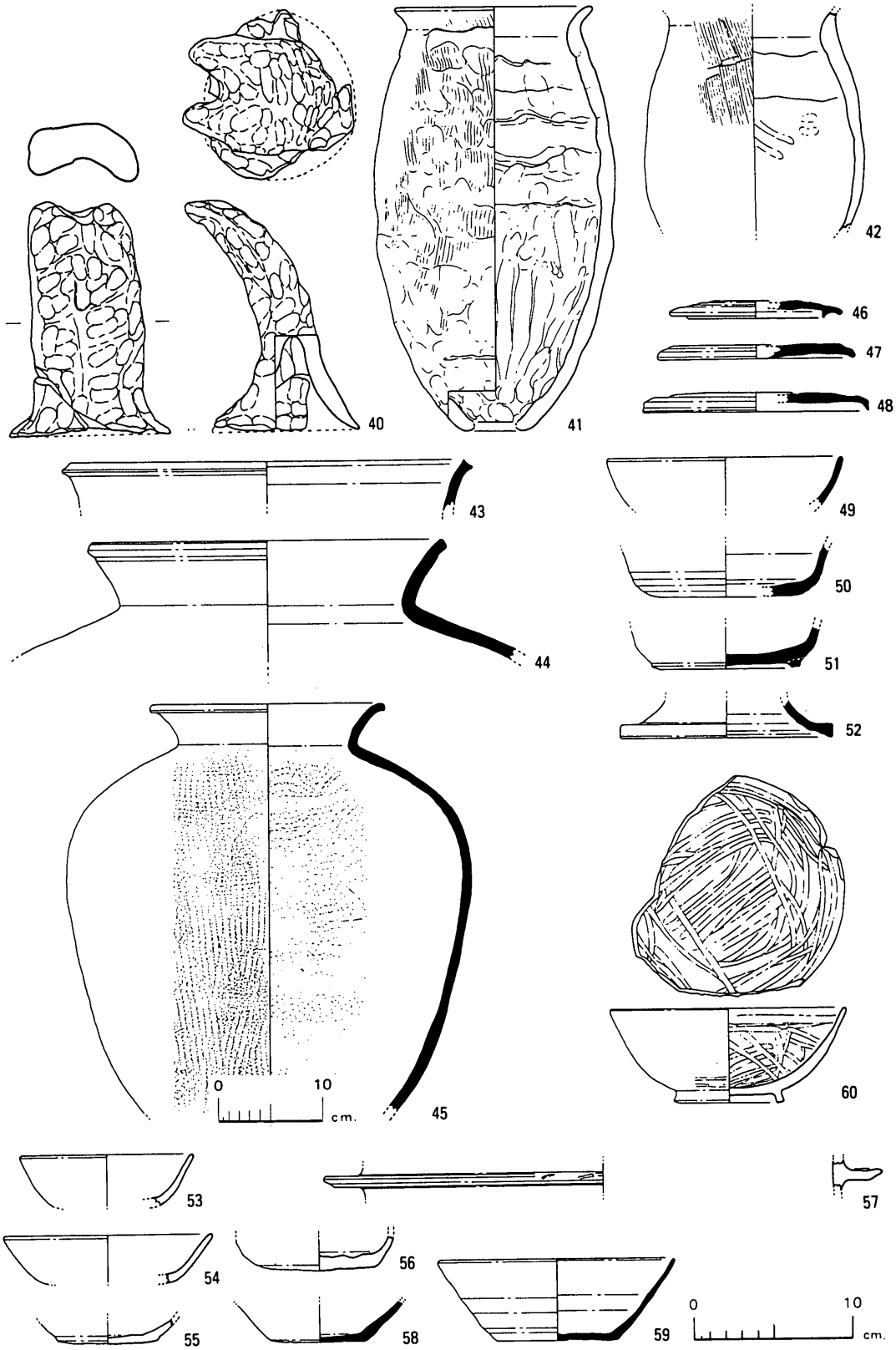
平安時代末から鎌倉時代を中心とする時期の遺物として土師器，黒色土器，須恵器が出土している。土師器は，杯，羽釜を図化した。杯は55が円盤状高台をもつものであるが，焼成が良くなく，摩滅が著しい。53・54・56は比較的良好な焼成を受けており，器壁内外面にはナデによる調整痕が残る。60は，高い器高をもつ黒色土器椀である。底部内面には一方向の丹念なヘラ磨きを施し，それより上部は井桁状にヘラ磨きを施している。体部の外面にも横方向のヘラ磨きが認められる。高台は，直径の比較的大きいもので，端部は角張って方形状を呈している。器壁の外面にも，黒色を呈する部分が認められるが，内面の状態と異なるため，黒色土器Ａ類の範疇で判断しておく。



第15図　ＳＲ01－１出土遺物実測図　（１）



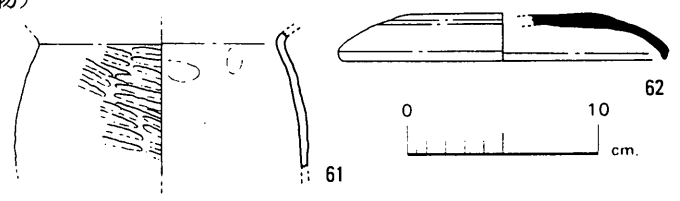
第16図　ＳＲ01－１出土遺物実測図　（２）



第17図　ＳＲ01－１出土遺物実測図　（３）

ＳＲ01－３（第Ⅲ期流路出土の遺物）

混入した遺物と考えられるが，弥生土器甕と須恵器杯蓋が出土している。



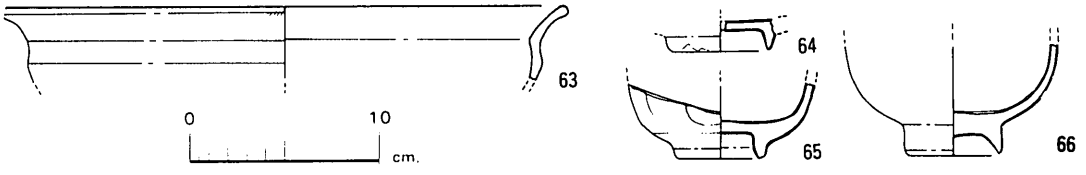
第18図　ＳＲ01－２出土遺物実測図

61は，小片であるが体部外面に叩き目が残る。62は，端部をわずかに折り曲げて口縁部を形づくっている。

この他には，良好な遺物は認められない。

（埋没後の遺物）

64・65は肥前陶胎染付椀である。66は京焼風陶器椀である。63は口縁部を外方に屈曲させた瓦質の土器であり，焙烙と考えられる。



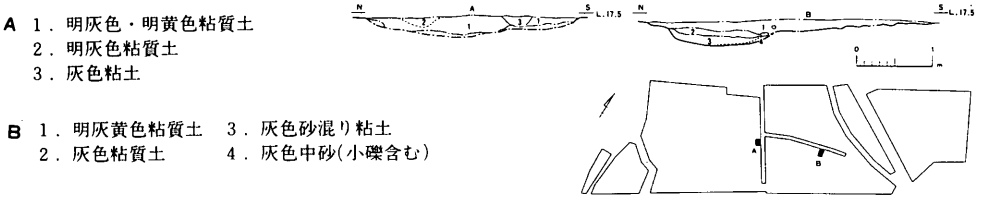
第19図　埋没後の遺物実測図

ＳＲ02　（図版第10，第13・20図）

今回の調査地の中央部，Ｄ・Ｅ・Ｆ－４，Ｅ・Ｆ－５にかけての範囲で検出している。幅２～６ｍ，深さは最大で0.4m程度の規模であり，Ｎ－65°－Ｅ前後の主軸方位をもっている。総延長約53mを確認しているが，西方部はＤ－４で後世の地下げのため消滅しており，東方部はＧ－５で浅くなって消滅している。落ち込み状を呈する自然地形とも判断できるが，今回は自然河川として報告しておく。

埋土は，灰色粘質土である。

良好な遺物は出土していない。



第20図　ＳＲ02土層実測図

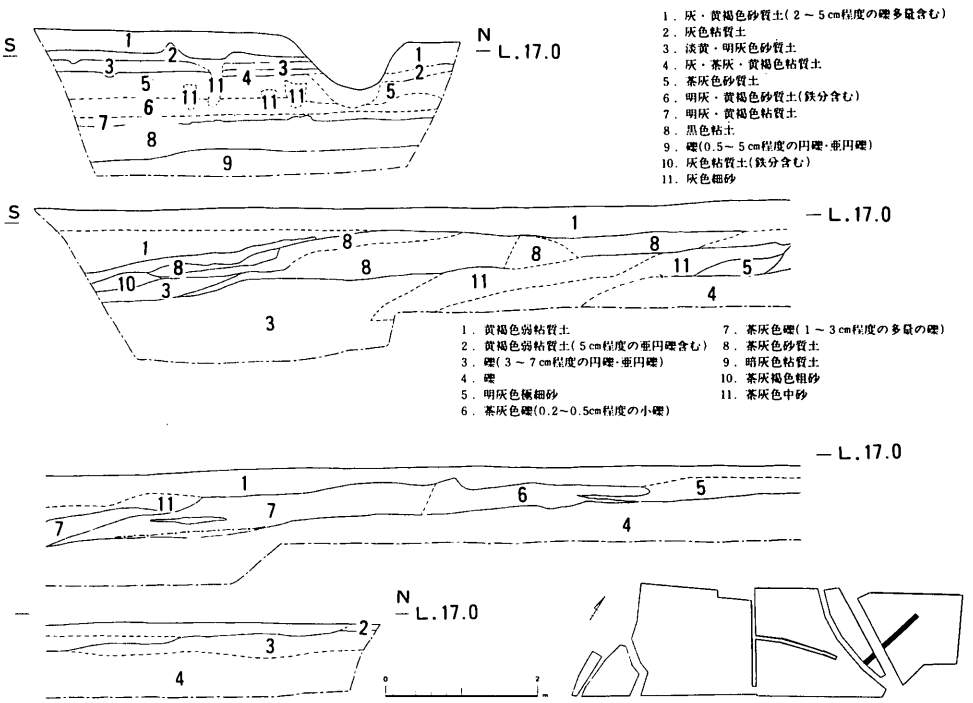
ＳＲ03　（図版第10，第21図）

今回の調査地の東端部，Ｈ・Ｉ－６，Ｇ・Ｈ・Ｉ－７に礫層の堆積が認められた。Ｇ－

7からＩ－７にかけての耕作土直下の範囲に，大きく弧状を呈しながら伸びる礫を，自然河川跡の北岸と判断した。この北岸に対応する南岸は確認していないが，北岸の南方約35mに現在認められる地形から，35m前後の川幅をもった自然河川と考えられる。深さは最大で１m程度と思われる。

埋土は，上から第１層は黄褐色弱粘質土，第２層は礫層，第３層は明灰色砂層，第４層は礫層となっている。

河川跡全域の発掘調査を実施したが，遺物は検出していない。最上層に堆積する黄褐色弱粘質土層は，この遺跡の大部分の遺構が設けられる層位である。このことから，この自然河川は，当該地において人が生活を開始する以前の自然流路と判断せざるを得ない。



第21図　ＳＲ03土層実測図

2.　掘立柱建物遺構

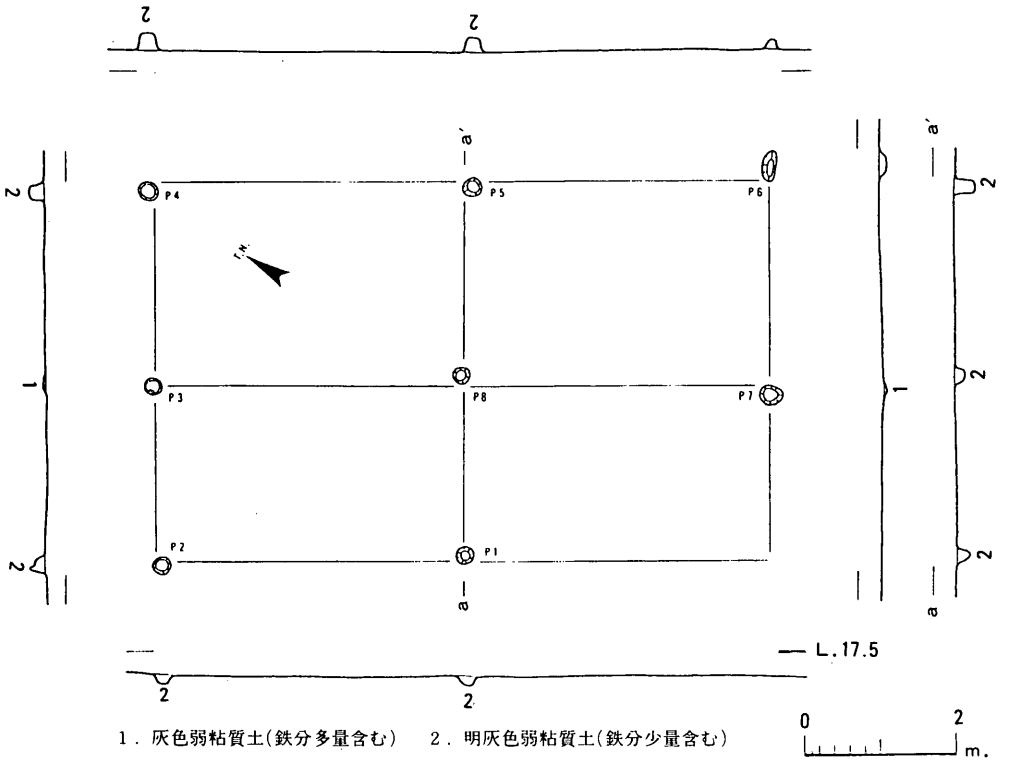
ＳＢ01　（第22図）

Ｃ－４・５にまたがって検出した南北棟である。建物主軸はＮ－31°－Ｗをさす。桁行２間（8.10m）×梁間２間（4.82m）の規模で，柱間寸法は桁行方向で約406cm，約404cm，梁行方向で約260cm，約222cmである。

検出した柱穴掘形は，平面形がいずれも小規模な円形を意図したものであり，深さは約

20cm程度である。

床下の柱穴掘形は，径20cm程度の小規模なものである。



第22図　ＳＢ01実測図

ＳＢ02　（図版第11，第23図）

Ｃ・Ｄ－５にまたがって検出した東西棟である。建物主軸はＮ－73°－Ｅをさす。桁行４間（8.28m）×梁間１間（3.98m）の規模で，柱間寸法は桁行方向で約184cm，約192m，約 224cm，約 228cmで梁行方向で約 398cmである。

検出した柱穴掘形は，不定形で統一性を欠くが，径約38cm程度，深さ約26cm程度であり，本来は円形を意図したものと考えられる。

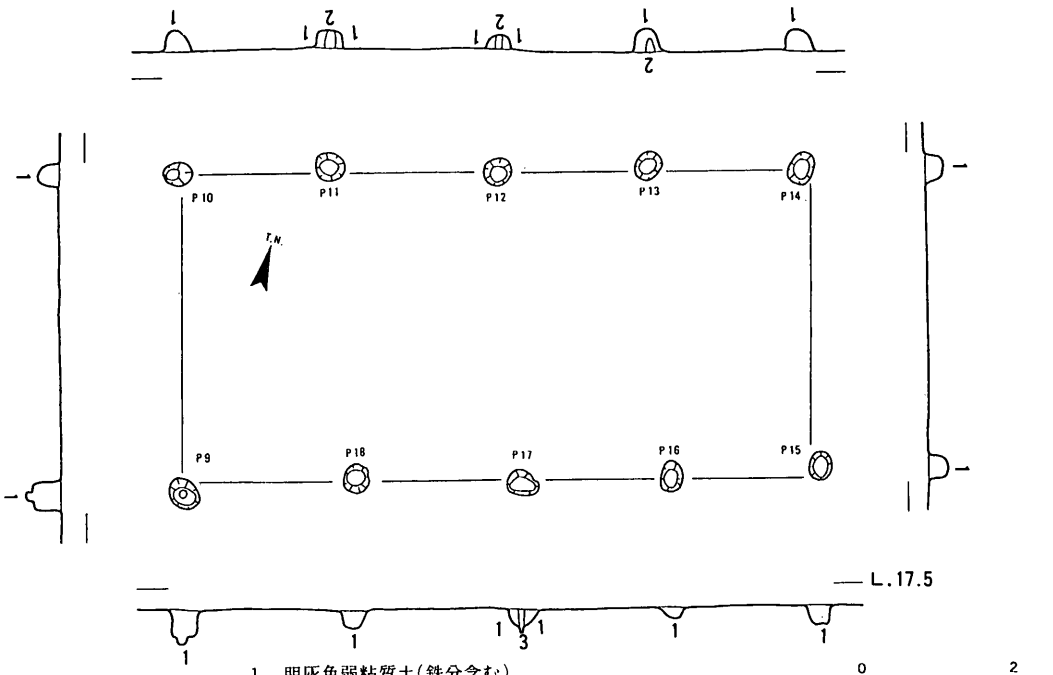
ＳＰ９のピットに柱材と考えられる木が遺存していた。

ＳＰ14のピットから須恵器小片が出土しているが，図化できなかった。

ＳＢ03　（図版第11，第24図）

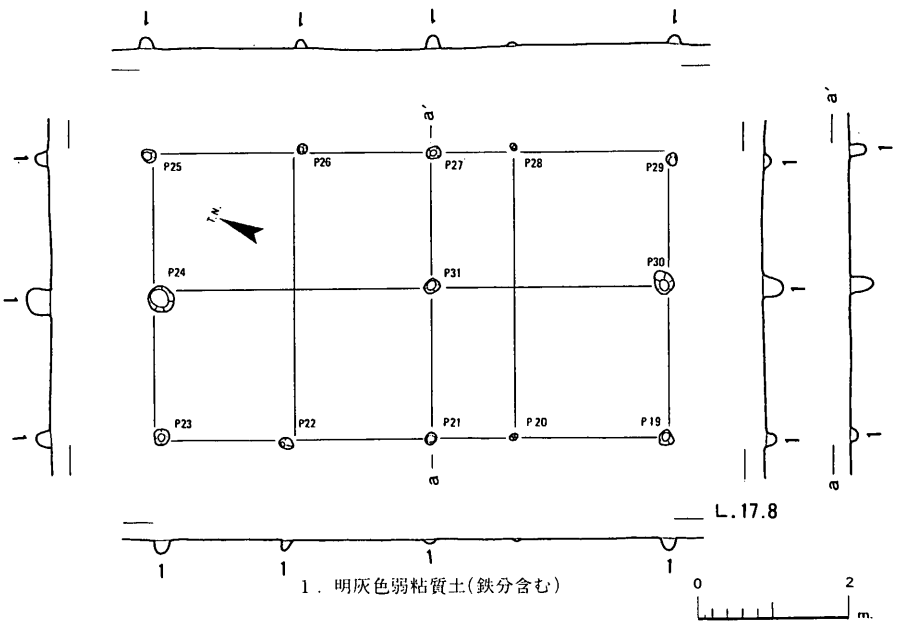
Ｄ・Ｅ－５にまたがって検出した南北棟である。建物主軸はＮ－25°－Ｗをさす。桁行４間（6.76m）×梁間２間（3.78m）の規模で，柱間寸法は桁行方向で約187cm，約178m，約107cm，約204cmで梁行方向で約198cm，約180cmである。

検出した柱穴掘形は，いずれも小規模な円形を意図したものであり，深さは約16cm程度



1．明灰色弱粘質土(鉄分含む)
2．明灰色弱粘質土
3．明灰色弱粘質土(鉄分含む,下部は粘質土で鉄分含まず)

第23図　ＳＢ02実測図



1．明灰色弱粘質土(鉄分含む)

第24図　ＳＢ03実測図

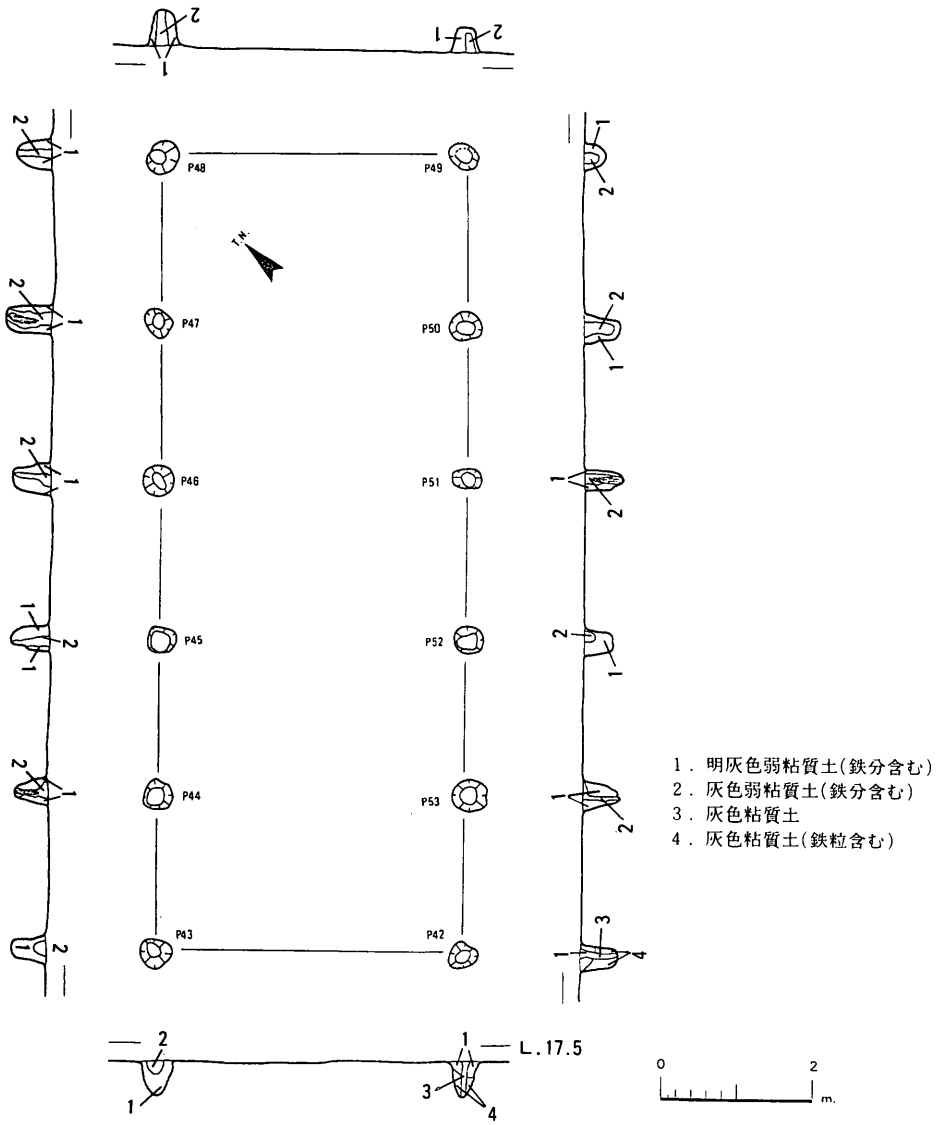
である。

建物床下の中央部で検出している柱穴掘形は，径20cm程度の小規模なものである。

東西両側の柱筋には，不統一な柱間距離をもって，小規模なピットが認められるため，桁行４間，梁間２間の規模の建物遺構として判断した。

ＳＢ04　（図版第12，第25図）

Ｅ－５・６にまたがって検出した東西棟である。建物主軸はＮ－49°－Ｅをさす。桁行５間（10.3m）×梁間１間（4.02m）の規模で，柱間寸法は桁行方向で約214cm，約200m，約210cm，約204cm，約201cmで梁行方向で約402cmである。



第25図　ＳＢ04実測図

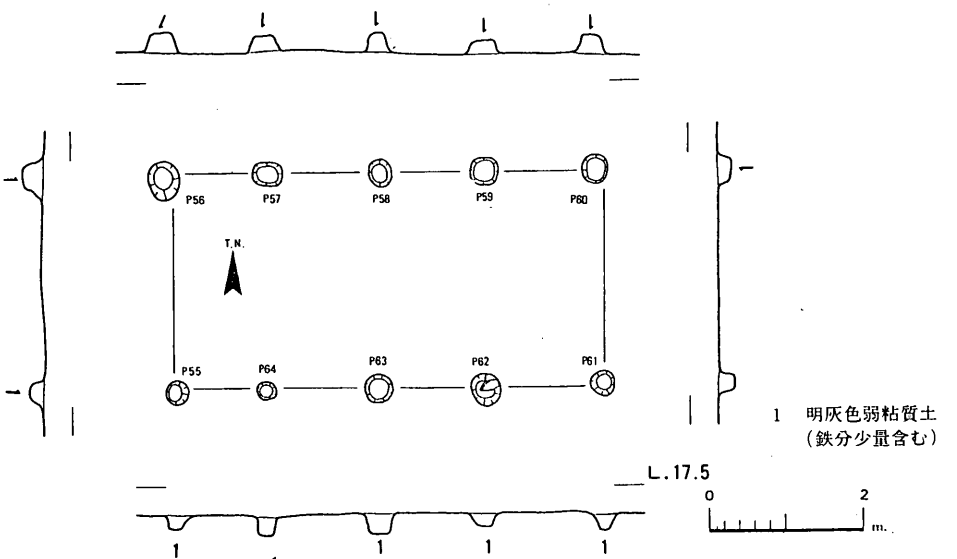
検出した12基の柱穴掘形は，不定形で統一を欠くが，比較的大きい円形を意図したものであり，深さは約46cm程度である。

ＳＰ42・44・47・49・51のピットから柱材と考えられる木を検出している。ＳＰ49には，塊石が包含されており，根石と考えられる。

ＳＰ52のピットから土器小片が出土しているが図化できなかった。また，二枚貝の貝殻片が出土している。

ＳＢ05　（図版第13，第26図）

Ｈ－８の表土下に堆積する礫層で検出した。建物主軸はＮ－90°－Ｅをさす東西棟である。桁行４間（5.63m）×梁間１間（2.84m）の規模で，柱間寸法は桁行方向で約158cm，約141cm，約144cm，約120cmで梁行方向で約284cmである。



第26図　ＳＢ05実測図

検出した八基の柱穴掘形は，不定形で統一を欠くが，今回検出している建物遺構に伴う柱穴のうちでは比較的大きなものであり，径38cm程度の規模である。深さは約29cm程度である。

ＳＰ62・63のピットには，柱の根石と考えられる塊石が包含されていた。

３．柵列状遺構

ＳＡ01　（図版第13，第27図）

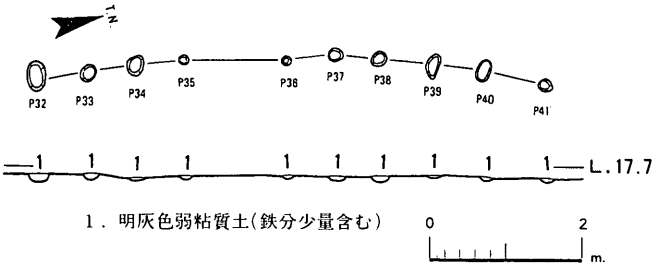
Ｄ－５で検出した南北方向の柵列遺構である。Ｎ－14°－Ｅ程度の主軸方位をもつ。

９間の規模で復原したが，柱間寸法は北から42cm，34cm，36cm，29cm，33cm，38cm，32

cm，32cm，34cm程度と不統一である。

検出した柱穴掘形は，平面形がいずれも小規模な円形を意図したものであり，深さは約3cm程度である。

良好な遺物は検出できなかった。

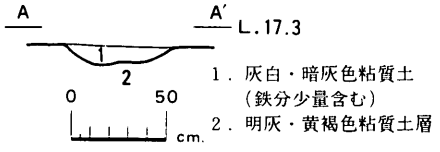


第27図　ＳＡ01実測図

4．溝状遺構

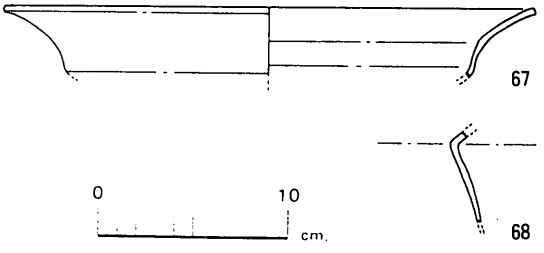
ＳＤ01　（図版第14，第28・29図）

Ｂ－１・２の各調査区にまたがって，総延長約6.1ｍを検出した。ＳＲ01自然河川の埋没後に設けられた溝状遺構であろう。



第28図　ＳＤ01土層実測図

幅0.5m，深さは0.1m程度の規模で，断面形が浅いＵ字形を呈する溝状遺構である。Ｎ－30°－Ｗの主軸方位をもって直線状に穿たれている。



第29図　ＳＤ01出土遺物実測図

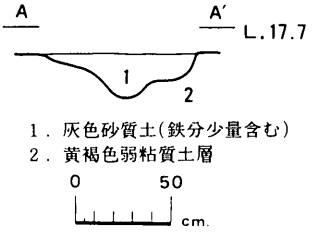
周辺が削平されたと思われ，南北両方向とも浅くなって消滅している。

67・68の土器が出土している。弥生土器高杯と甕として図化したが，後世に混入したものと考えられる。

ＳＤ02　（図版第14，第30・31図）

Ｃ・Ｄ・Ｅ－４，Ｅ－５の各調査区にまたがって，総延長約39.5mを検出した。

幅 0.6m，深さは0.24m程度の規模で，断面形が浅いＵ字形を呈する溝状遺構である。Ｎ－65°－Ｅの主軸方位をもって直線状に穿たれている。西方部は最近の地下げによって削平されたと思われ，Ｃ－４東部分で消滅している。

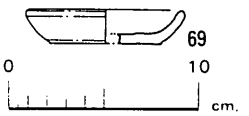


第30図　ＳＤ02土層実測図

Ｅ－５の中央やや南部寄りの場所で，ＳＤ03の不規則に幅が広がった部分に合流する状

態で検出しているが，この溝状遺構ＳＤ02とＳＤ03は，ほぼ直交する主軸方位をもって穿たれており，本来この場所で直角に屈曲するように配置された一条の溝状遺構であると判断したほうが良さそうである。

土師器小皿を図化した。69は体部の立ち上がりは緩やかで，器壁は比較的厚い。口縁端部は丸くおさめている。体部外面にナデによる調整痕が認められる。二次的な焼成を受けており，器壁内部まで黒ずんでいる。

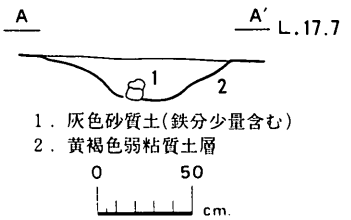


第31図　ＳＤ02出土遺物実測図

ＳＤ03　（図版第14，第32・33図）

Ｅ－５・６の各調査区にまたがって，総延長約23mを検出した。

幅0.9m，深さは0.22m程度の規模で，断面形が浅いＵ字形を呈する溝状遺構である。Ｎ－25°－Ｗの主軸方位をもって直線状に穿たれている。



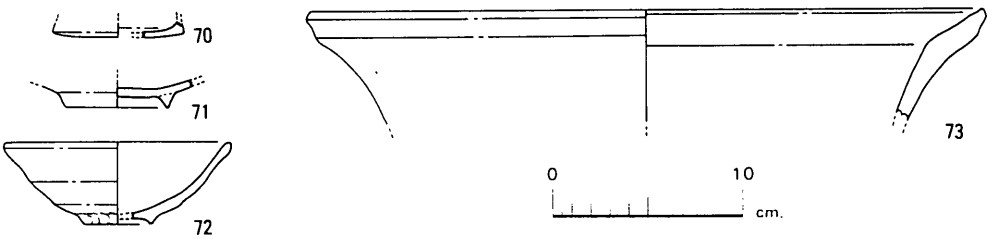
第32図　ＳＤ03土層実測図

Ｅ－５の中央やや南部寄りの場所で不規則に幅が広がり，浅い窪みのような状態を呈する。

Ｅ－５の北部でＳＫ06・08に破壊されており，その前後関係が判断できる。

70～73の土器が出土している。

70は底面が彎曲しており，安定性に欠けるが，円盤状高台をもつ土師器椀として図化した。摩滅した小片である。71は断面形が三角形の貼りつけ高台をもつ，土師器椀である。粗雑な貼りつけ方をしている。72は体部外面の上半部と内面の口縁部に煤が付着した土師器椀である。断面形が低い三角形を呈する高台を貼りつけている。外面には貼りつけ時の粗雑な指頭痕が残る。摩滅が著しいため，判断できないが黒色土器の可能性もある。73は粗雑な作りをした土師器鍋と考えられる。口縁部の内外面に，ナデによる調整痕が残る。煤が付着する。



第33図　ＳＤ03出土遺物実測図

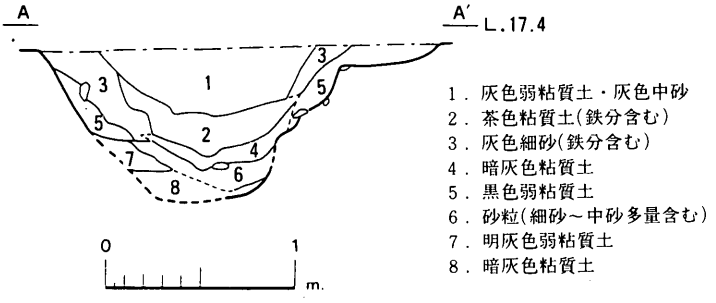
ＳＤ04　（第34・35図）

Ｆ－６・７，Ｇ・Ｈ・Ｉ－６の各調査区にまたがり，第３層で総延長約55ｍを検出した。

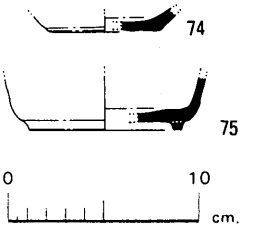
幅1.9ｍ，深さは0.8ｍ程度の規模で，断面形がＵ字形を呈する溝状遺構である。Ｈ・Ｉ－６では，Ｎ－88°－Ｅの主軸方位をもつが，Ｈ－６で屈曲してＮ－65°－Ｗの方位をもつようになる。また，Ｇ－６でさらに東方向に屈曲するようである。Ｇ・Ｈ－６では，ＳＤ05とほぼ同一の主軸方位をもって穿たれている。

Ｆ－６でＳＤ05を破壊していることから，その前後関係が判断できる。

良好な形の遺物は認められないが，須恵器の杯を２点を図化した。75は，断面形が方形に近い低い高台を貼り付けている。体部の立ち上がりは，底部から垂直に近い角度で急激に立ち上がる。74は摩滅した小片である。



第34図　ＳＤ04土層実測図

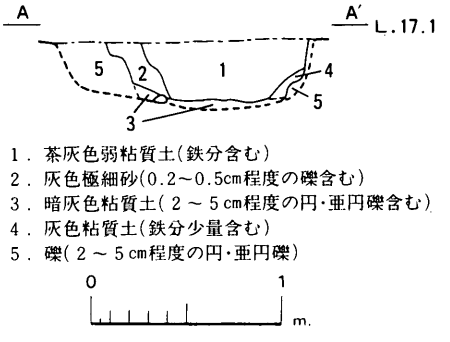


第35図　ＳＤ04出土遺物実測図

ＳＤ05　（第36図）

Ｆ－６・７，Ｇ・Ｈ・Ｉ－６の各調査区にまたがり，第４層直下で総延長約62ｍを検出した。

幅0.8ｍ，深さは0.38ｍ程度の規模で，断面形がＵ字形を呈する溝状遺構である。Ｈ・Ｉ－６では，Ｎ－88°－Ｅの主軸方位をもつが，Ｇ－６の東辺部で屈曲してＮ－65°－Ｗの主軸方位をもつようになる。また，Ｆ－７ではさらに東方向に屈曲するようである。



第36図　ＳＤ05土層実測図

Ｇ・Ｈ－６では，ＳＤ03とほぼ同一の主軸方位をもって穿たれている。Ｆ－６でＳＤ04に破壊されていることからその前後関係が判断できる。

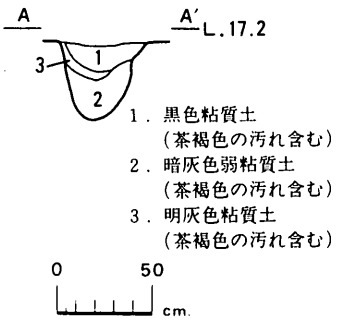
良好な遺物は出土していない。

ＳＤ06　（第37図）

Ｇ－４・５・６の各調査区にまたがって，総延長約35.5ｍを検出した。

幅 0.8ｍ，深さは0.38ｍ程度の規模で，断面形がＵ字形を呈する溝状遺構である。Ｇ－６でＳＤ04と合流する状況で検出している。

Ｇ－５でＳＺ02に破壊されており，その前後関係が判断できる。良好な遺物は出土していない。



第37図　ＳＤ06土層実測図

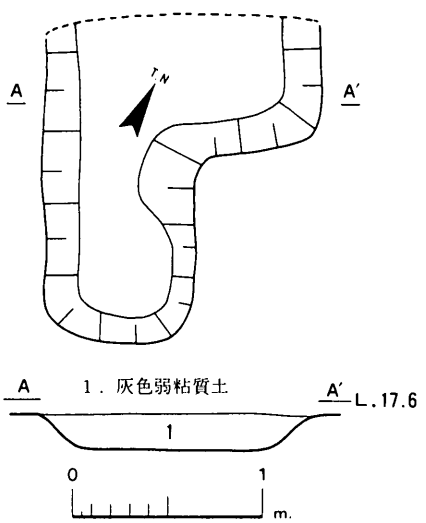
５．土　　坑

ＳＫ01　（第38・39図）

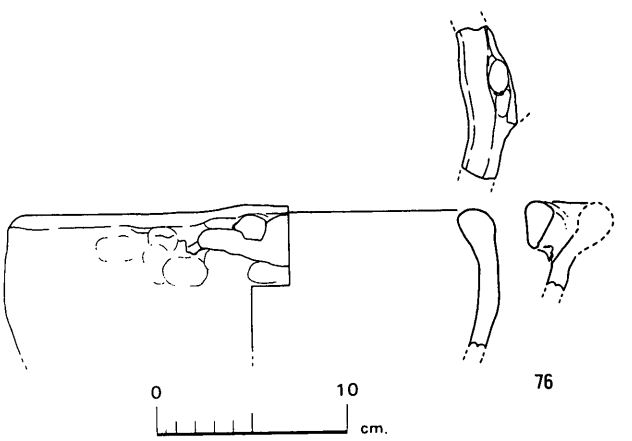
Ｄ－５の中央部で検出した。

Ｌ字形の不整形な平面形を呈している。長軸長約 164.0cm，短軸長約 146.0cmの規模で，深さは約20cmを検出した。主軸方位はＮ－89°－Ｅである。

76の土器が出土している。土師質を呈する素焼きの土器であり，鍋であろう。口縁部直下に 1.7× 1.5cm程度の穿孔がある。内面にはナデによる調整痕が認められる。外面は粗雑に調整されている。二次焼成を受けており，煤が附着する。



第38図　ＳＫ01実測図



第39図　ＳＫ01出土遺物実測図

ＳＫ02　（図版第15・16，第40・41図）

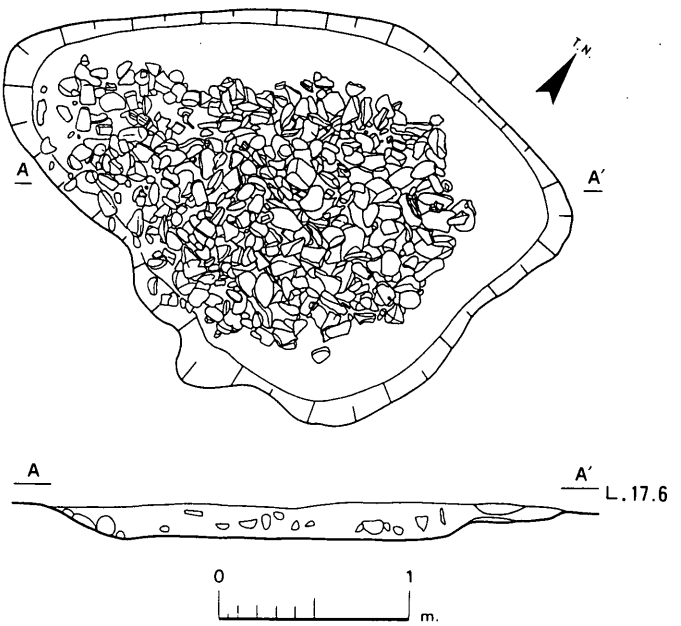
Ｄ－５の中央部で検出した。

長径約280.0cm，短径約216.0cmの規模でほぼ円形を呈している。深さは約20cmを検出した。主軸方位はN－84°－Wである。

土坑内部には，大量の塊石が含まれている。

77～102の土器・金属製品が出土している。

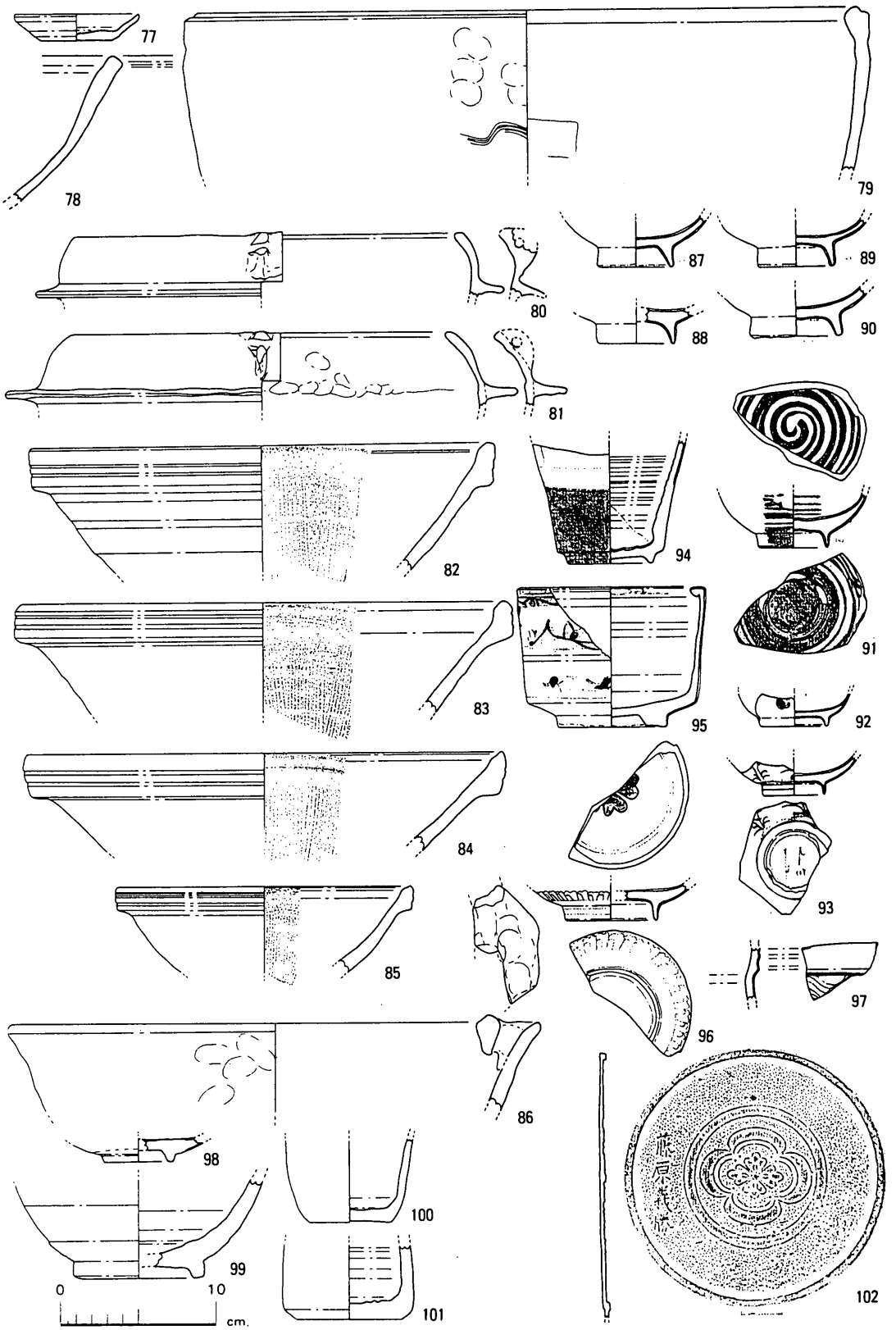
77は土師器小皿である。内外面にナデによる調整痕が残る。78は土師質を呈する素焼きの土器であり，鍋であろう。



第40図　ＳＫ02実測図

外面には，二次焼成を受けた煤が附着する。86は口縁内部に粘土を貼り付け，1.7×1.4cm程度の円孔を設けている。内面にはナデによる調整痕が認められる。外面は粗雑に調整されている。80・81は瓦質を呈する土器で，羽釜と思われる。鍔の上方の体部に粘土を貼り付け，吊り手を装着する円孔を形づくっている。80の鍔はやや下向きに，81の鍔は横方向になるよう貼り付けられている。内外両面ともナデによる調整が施されているが，内面の方が丁寧である。いずれも二次焼成を受けている。摺り鉢は82～85の４点を図化した。82・83は１cm程度の間隔をもって，一単位10条のおろし目を施している。84は一単位11条のおろし目を密に施している。85は小型品である。一単位12条のおろし目を１cm程度の間隔をもって施している。87～90は京焼風陶器の椀である。91は唐津刷毛目椀である。92・93は肥前系の染付椀，96は肥前系の染付皿である。94・95は肥前陶胎染付である。94は内面に不均一さが認められ，壺の類が考えられる。95は香炉であろう。97は瀬戸・美濃系のものであろうが，器種は判断できない。98は，産地が判断できないが，透明釉を施した磁器椀である。見込み部分の釉を環状に剝ぎ取っており，その部分に砂目が付着する。99・100・101は赤褐色を呈する陶器であるが，産地は明らかではない。

102は柄鏡である。直径8.4cm。鏡背面は，細く低い平縁をもつ。重圏を巡らし，内区には四葉の大きな連弁葉の中に，花菱を形取った「丸に木瓜」の紋を鋳出す。「藤原義勝」の銘がある。幅1.4cmの柄部は欠失している。

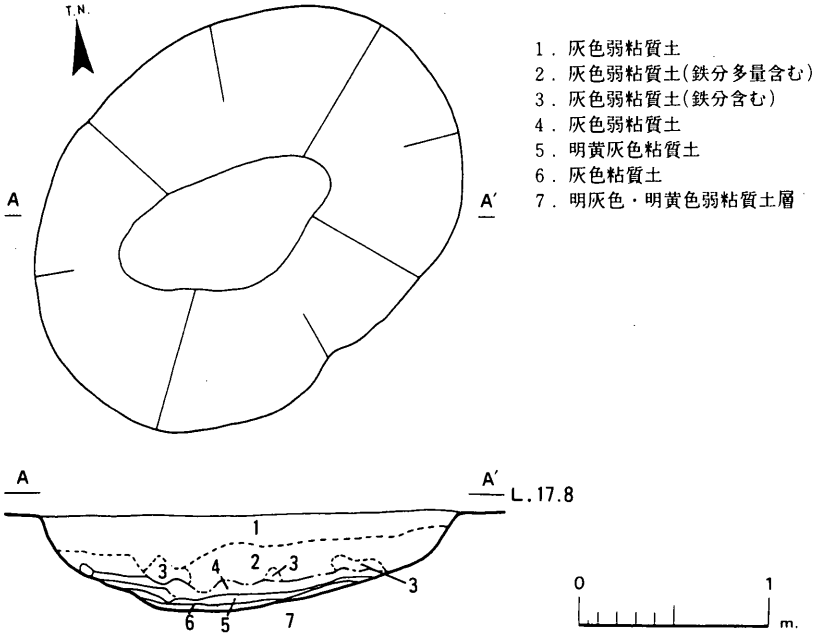


第41図　ＳＫ02出土遺物実測図

ＳＫ03　（図版第16，第42・43図）

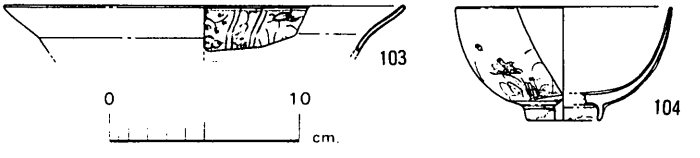
Ｅ－４の南西部で検出した。

長径約 244.0cm，短径約 182.0cmの規模で，ほぼ円形を呈している。断面形は緩やかなＵ字形を呈し，深さは約50cmを検出した。主軸方位はＮ－57°－Ｅである。



第42図　ＳＫ03実測図

103･104の肥前系染付が出土している。103は折縁の皿，104は椀である。



第43図　ＳＫ03出土遺物実測図

ＳＫ04　（図版第17，第44図）

Ｅ－５の南西部で検出した。障害物があったため，西半分は確認できなかったが，直径約158.0cmの規模で，ほぼ円形を呈していると考えられる。深さは約58cmを検出した。

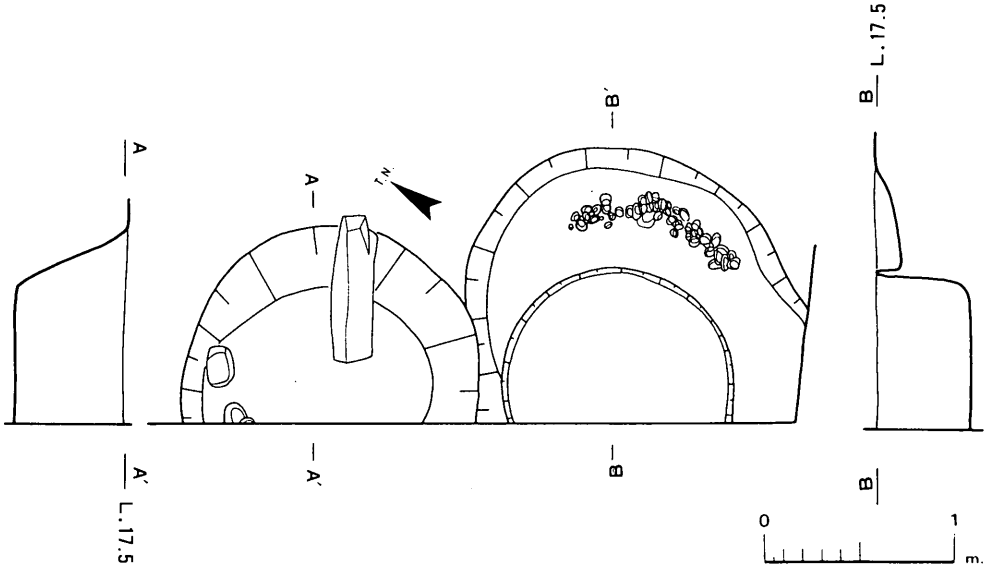
ＳＫ05を壊して設けられており，その前後関係が判断できる。

ＳＫ05　（図版第17，第44・45図）

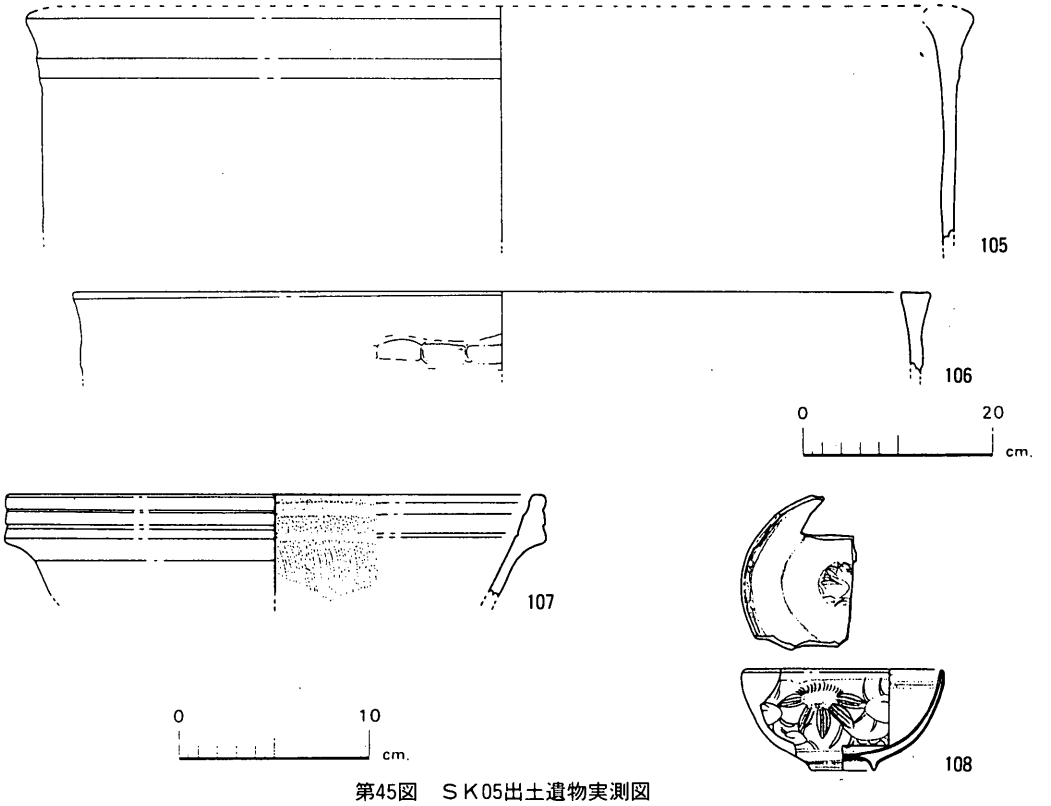
Ｅ－５の南西部で検出した。障害物があったため，西半分は確認できなかったが，直径約182.0cmの規模で，ほぼ円形を呈していると考えられる。深さは約49cmを検出した。

ＳＫ04にを壊された状態で検出しており，その前後関係が判断できる。

105～108の土器が出土している。105・106は土師質を呈する素焼きの大甕である。



第44図　ＳＫ04・５実測図



第45図　ＳＫ05出土遺物実測図

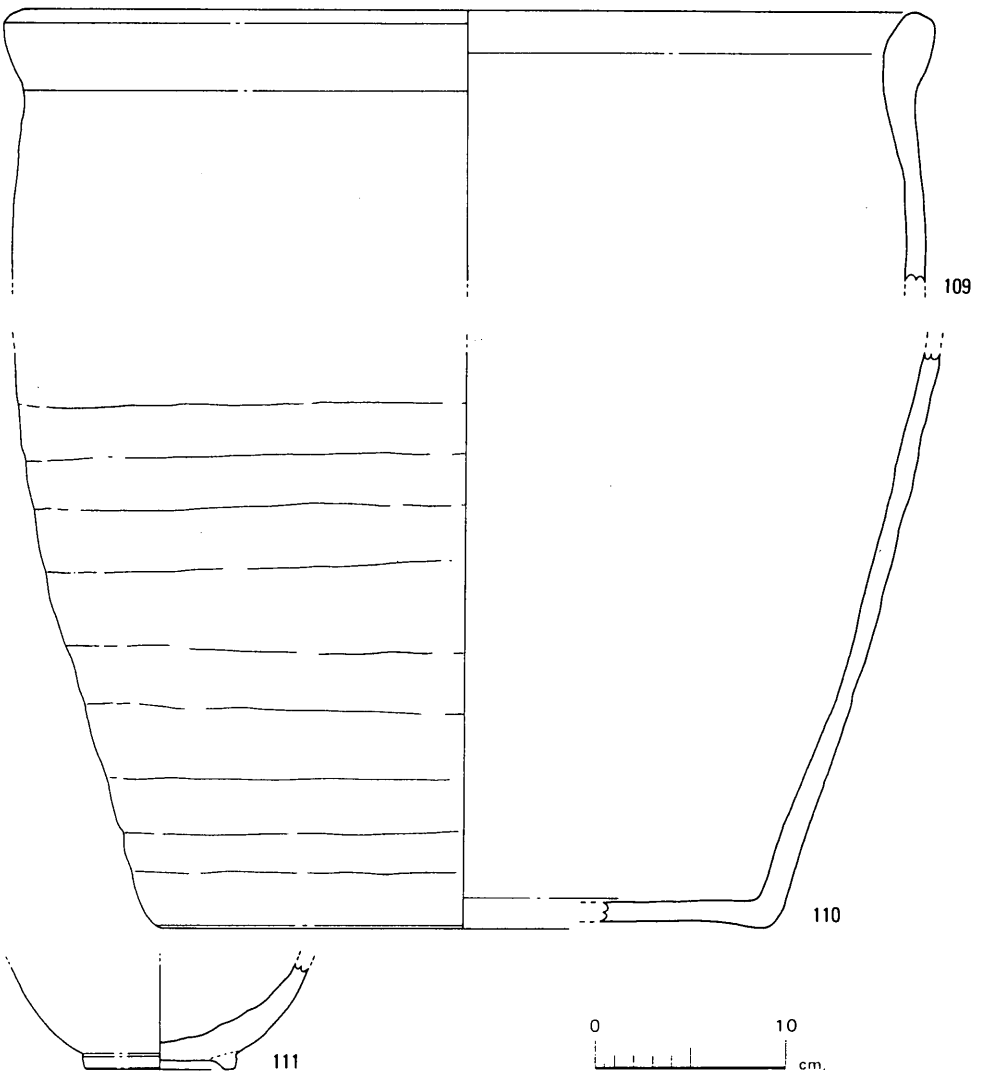
105は口縁端部を肥厚させながら丸く作っており，106は平坦に仕上げている。107の摺り鉢は，単位は判断できないが，密におろし目を施している。口縁部外面に２条の凹線を巡らす。108は肥前系染付椀である。

ＳＫ06　（図版第18，第46・47図）

Ｅ－５の北部で検出した。

長径約113.0cmの規模でほぼ円形を呈している。深さは約56cmを検出した。

土坑内部には，掘形に接するように，底部を打ち欠いた土師器質を呈する素焼き土器甕の下半部がおさめられている。また，甕の内部には，投棄された状態で，塊石が詰まって

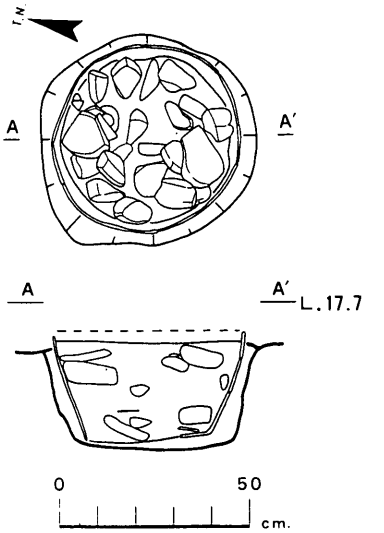


第46図　ＳＫ06出土遺物実測図

いる。この土坑には，井戸の可能性も残る。

この土坑は，ＳＤ03を壊して設けられており，その前後関係が判断できる。

109～111の土器が出土している。109･110は土師質を呈する素焼きの土器甕である。110は，土坑掘形に接するように埋納されていた土器である。109･110は別個体と考えられ，接合できない。111は，鉢状の陶器と考えられるが，産地は明らかにできない。



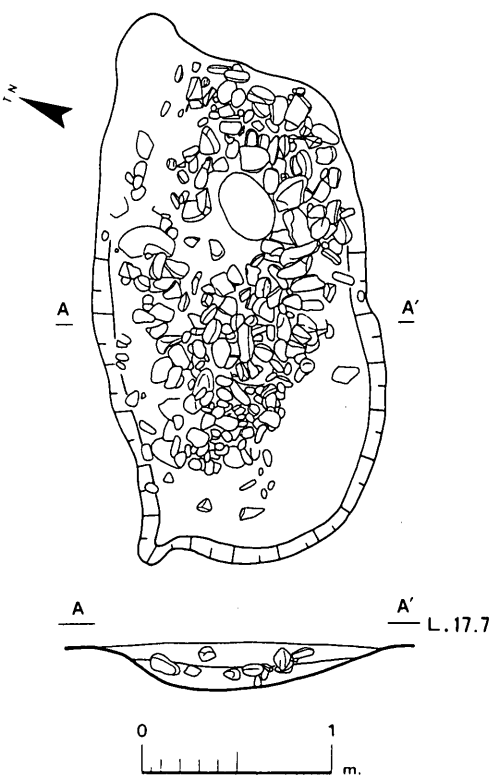
第47図　ＳＫ06実測図

ＳＫ07　（図版第18，第48～51図）

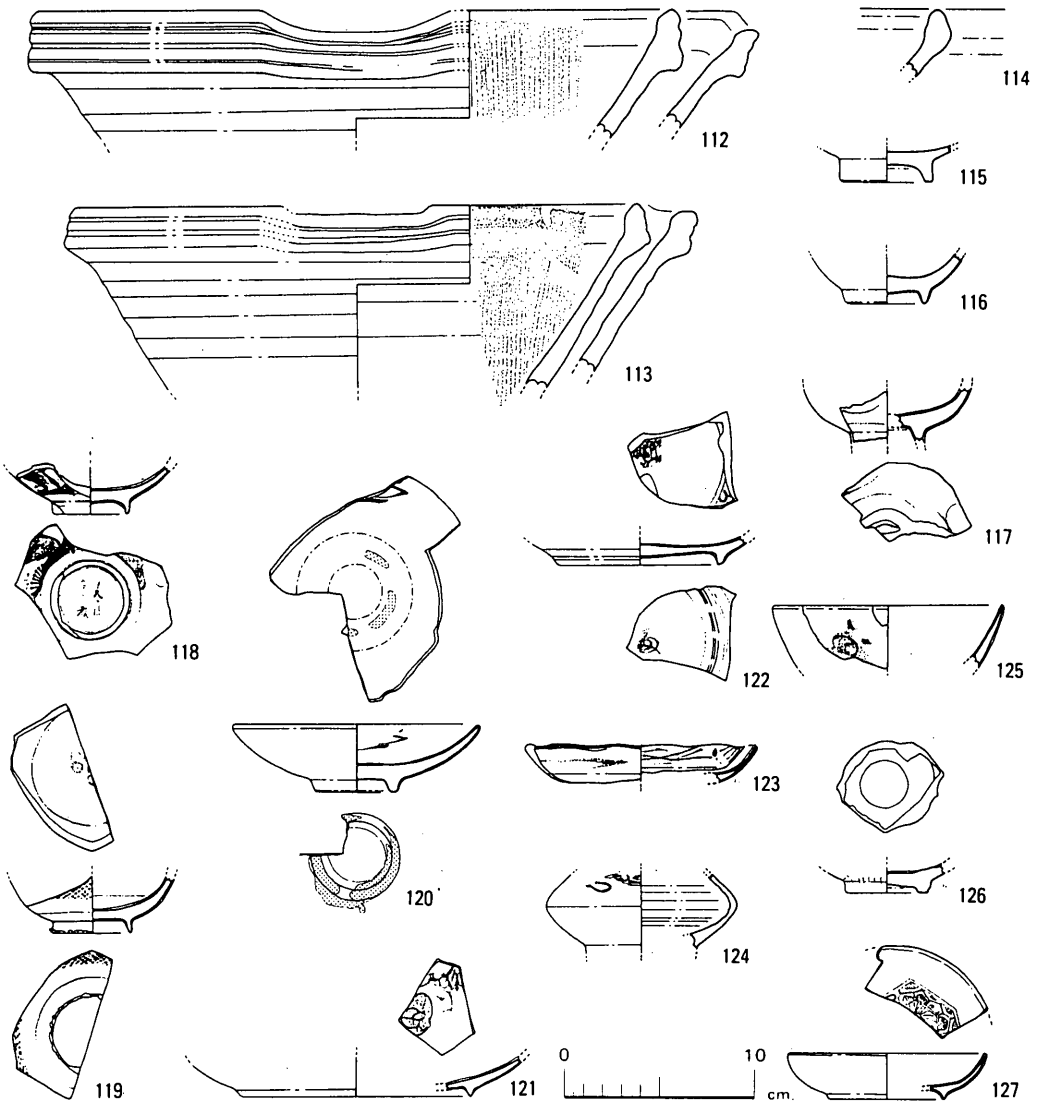
Ｅ－５の北部で検出した。

長径約294.0cm，短径約152.0cmの規模で隅丸の長方形を呈している。深さは浅く，約26cmを検出した。主軸方位はＮ－64°－Ｅである。

土坑内部には，多量の塊石・礫が認められる。112～127の土器と128～142の屋瓦が出土している。114は土師質を呈する素焼き土器甕の口縁部である。外面に煤が附着する。112・113の摺り鉢は，いずれも10条一単位のおろし目をもつ。115は京焼風陶器椀である。116・117は肥前陶胎染付である。118・119・120・121・122・123・124は肥前系染付である。124は瓶であろう。122は皿で高台裏側に「福」の銘がある。見込み部分に五弁花をあらわす。120は皿である。123は輪花状の口縁部をもつ皿である。118は椀である。119は型紙摺の文様をあしらった椀である。125は染付椀であるが，産地は明らかでない。126は産地が明らかにできないが，見込み部分の釉を環状に剝ぎ取った磁器椀である。127は産地は明らかにできないが，見込み部分に亀甲文で囲った印刷文様をもつ。



第48図　ＳＫ07実測図



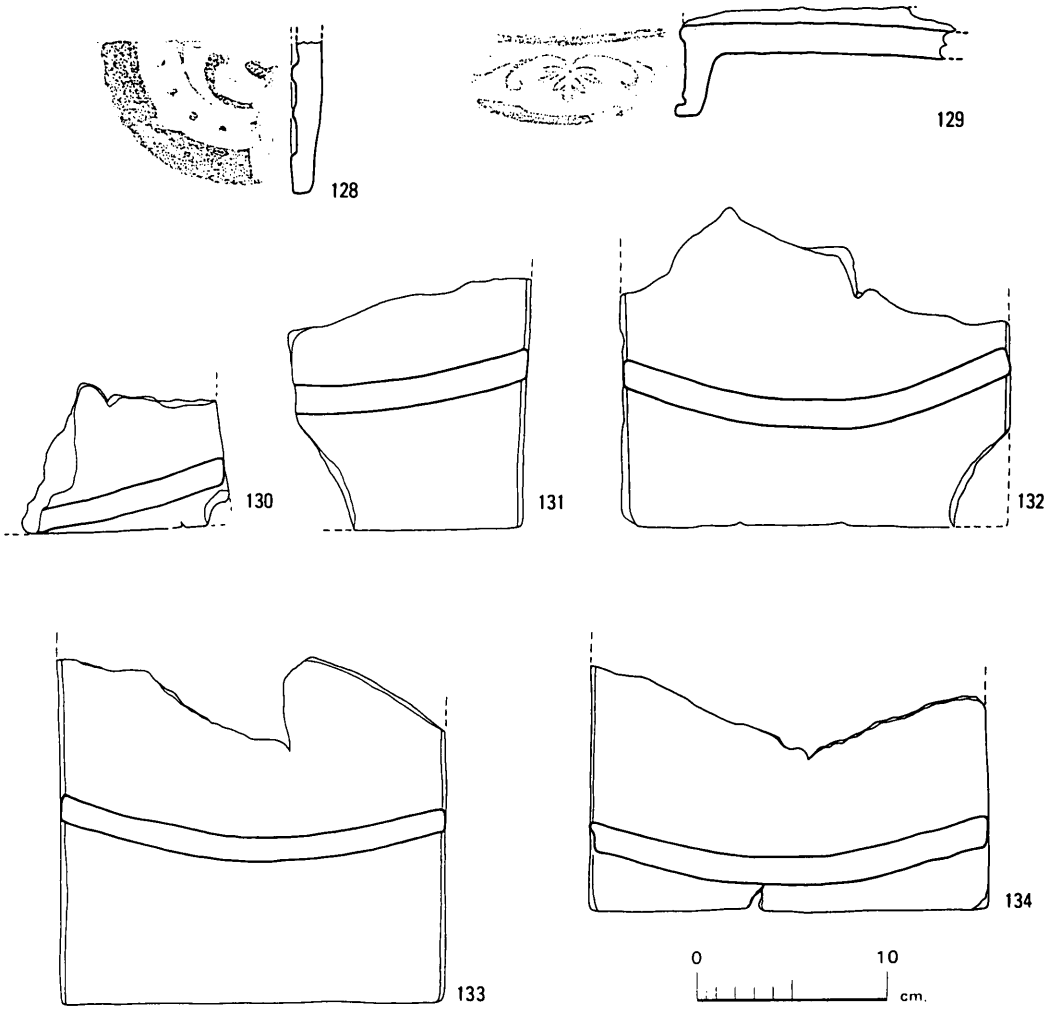
第49図　ＳＫ07出土遺物実測図　（１）

屋瓦は15点を図化した。

128は，三ツ巴文をもつ軒丸瓦の瓦当面として復原した。右巻きの巴文は，比較的長い尾をもつ。周縁は浅くて太い。16個の珠文が復原できる。全体が磨耗しており，調整痕は判断できない。

129は軒平瓦である。瓦当面の中央飾から両方に唐草文が展開するようである。周縁は深くて細い。平瓦部の凹面には，ヘラ状工具による横方向の調整痕が，凸面は粗雑なナデによる調整痕が認められる。

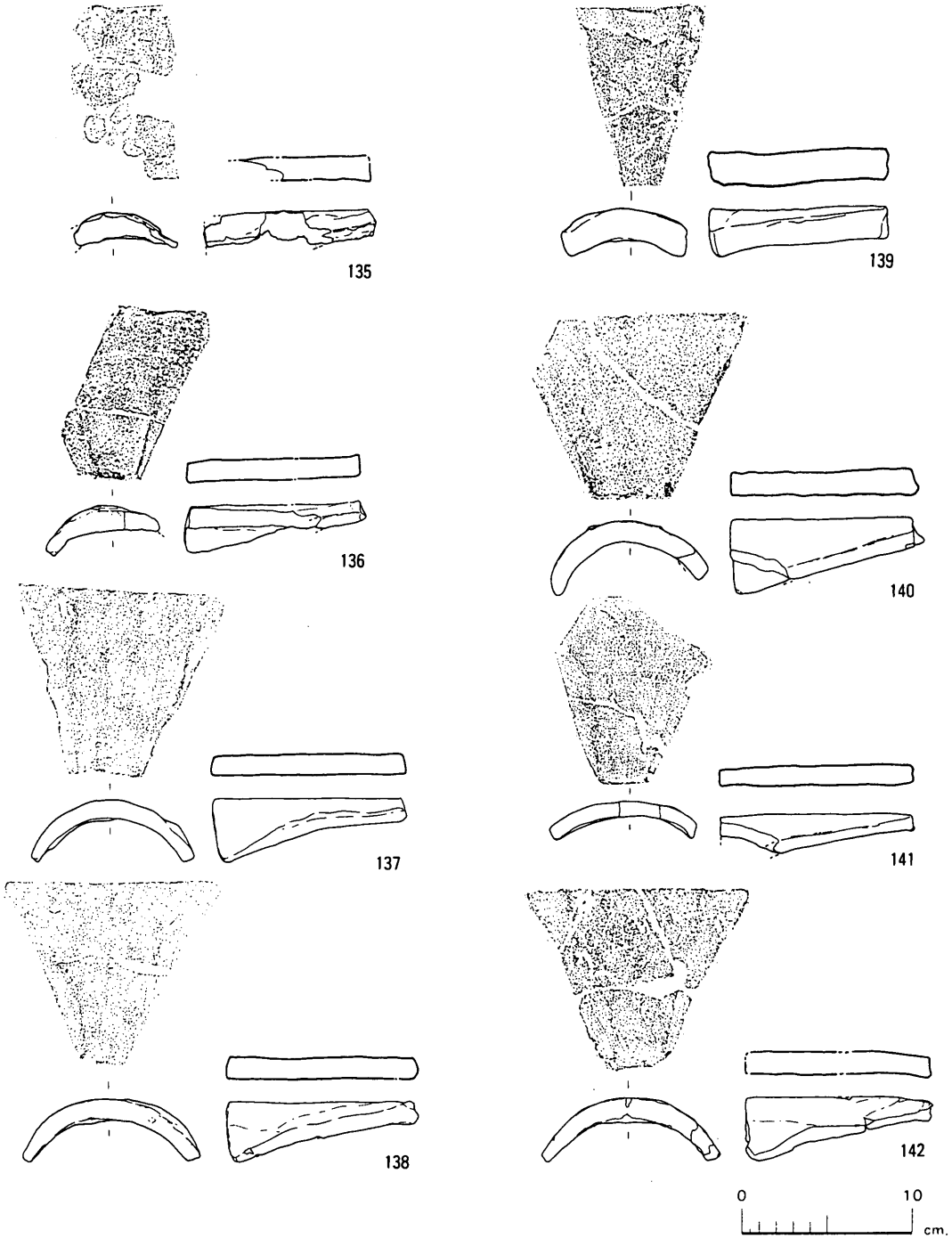
130～134は平瓦である。133は18cm×20cm程度の破片である。凹面には，ヘラ状工具による横方向の調整痕が，凸面には，粗雑なナデによる調整痕が認められる。



第50図　ＳＫ07出土遺物実測図　（２）

135～142は熨斗瓦の範疇で判断した。平面形が台形状に作られた小型品である。ほぼ同程度の大きさであり，137は前面にあたる広端幅9.6cm，奥行き11cm程度の規模である。凸面にはヘラによる調整痕が，凹面には粗雑なナデによる調整痕が認められる。形状から判断して，輪違いに分類される瓦であろう。

ＳＫ07から出土したこれらの遺物は，郡家大林上遺跡の中でも最も新しい時期の遺物であろう。



第51図　ＳＫ07出土遺物実測図　（３）

ＳＫ08　（図版第19，第52・53図）

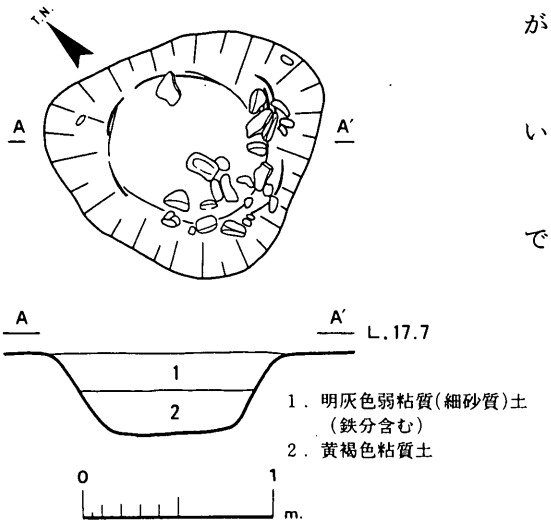
Ｅ－５の北部で検出した。

長径約 138.0cm，短径約 132.0cmの規模でほぼ円形を呈している。深さは約42cmを検出した。主軸方位はＮ－44°－Ｗである。

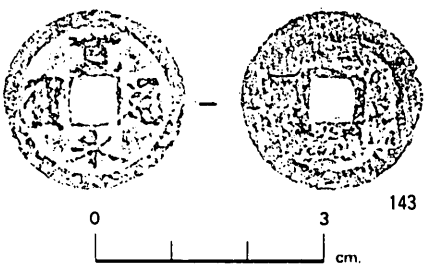
土坑内部には，人頭大の円礫に混じって，直径95cm前後の規模が復原できる曲物片が遺存していた。この土坑には，井戸の可能性がある。

この土坑は，ＳＤ03を壊して設けられている。

143の銭貨が出土している。「寛永通寶」である。



第52図　ＳＫ08実測図



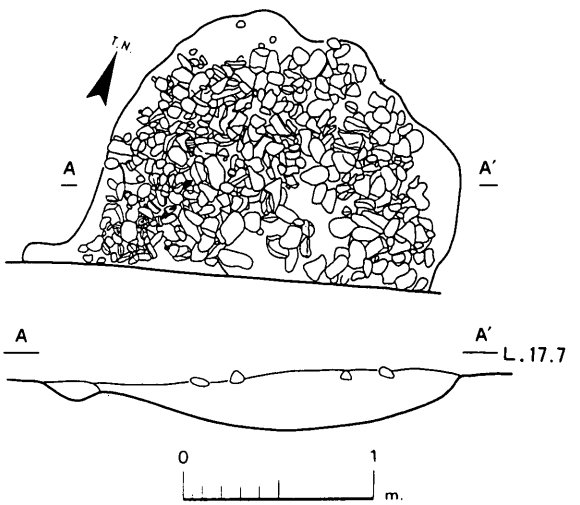
第53図　ＳＫ08出土銭貨拓影

ＳＫ09　（図版第20，第54・55図）

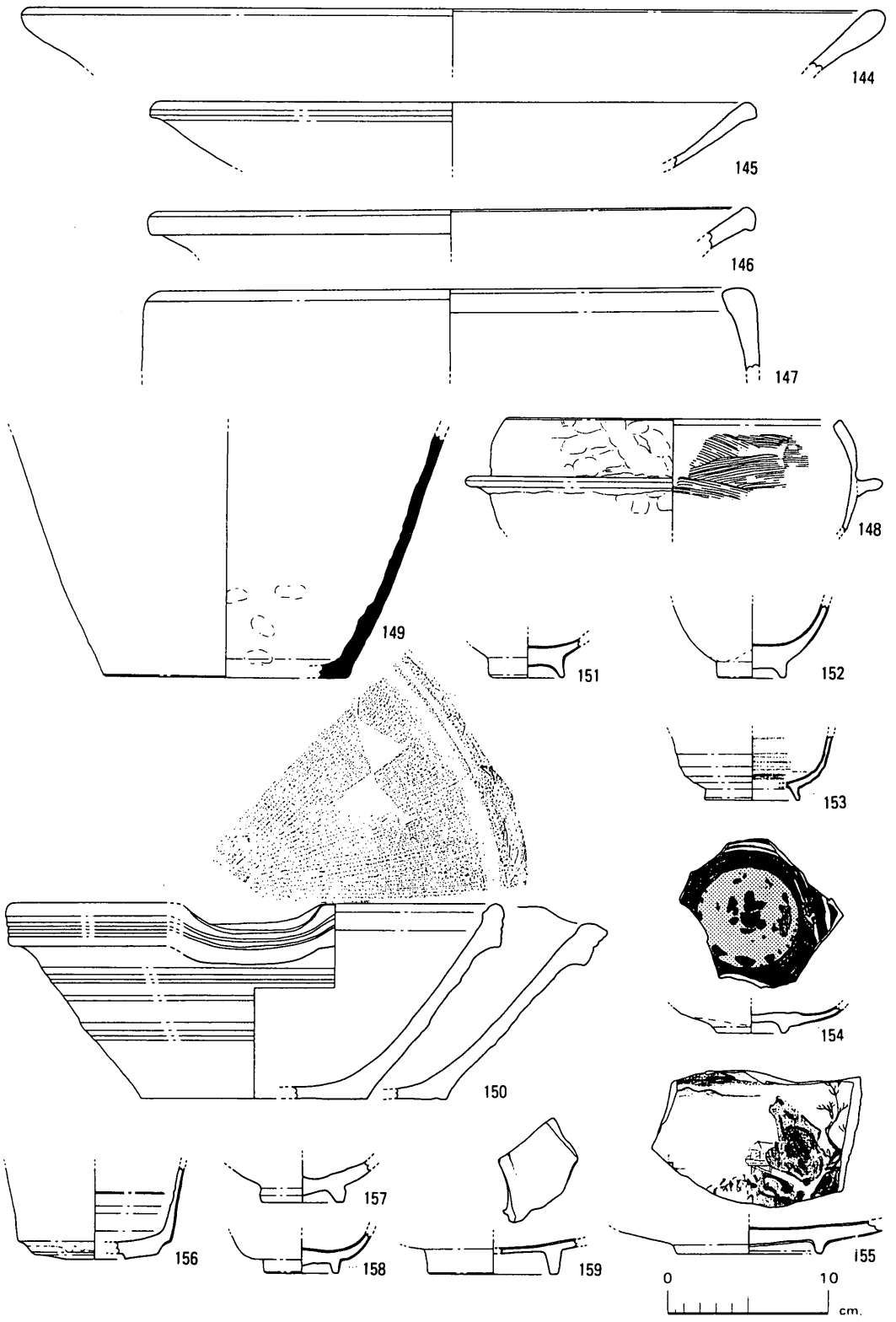
Ｅ・Ｆ－５にまたがって検出した。南に障害物があったため，南半分の調査が実施できなかったが，東西約 186.0 cmの規模で隅丸の長方形を呈している。深さは約31cmを検出している。

土坑内部には，多量の塊石・礫が認められ，144～159の土器が出土している。

144･145･146･147は，土師質を呈する素焼きの土器片である。144･145･146は，二次的な焼成を受けている。144･145は，甕あるいは鍋の口縁部と思われ，145は口縁端部を肥厚させて玉縁状に作っている。146はわずかに口縁端部を肥厚させ



第54図　ＳＫ09実測図



第55図　ＳＫ09出土遺物実測図

ている。147は灰乳色を呈する大型の甕の口縁部であろう。口縁部内面を肥厚させている。149は須恵質を呈する壺の胴部下半である。体部外面の一部に格子状の叩き目が認められるが，基本的には磨り消している。内面には粗雑な格子状の叩き目が残る。150は摺り鉢である。口縁部に２条の凹線文を施す。148は瓦質の土器である。羽釜に分類されるもので，やや上方に向く鍔が貼り附けられている。外面には指による調整痕，内面には粗い刷毛状工具による調整痕が残っている。151･152は京焼風陶器椀である。153は唐津灰釉椀，154は見込み部分に砂目が付着した唐津刷毛目椀である。155は肥前系染付皿である。156は底部外面に鉄釉が付着した青磁香炉である。

157･158･159の陶器は産地が明らかにできない。

ＳＫ10　（図版第21，第56・57図）

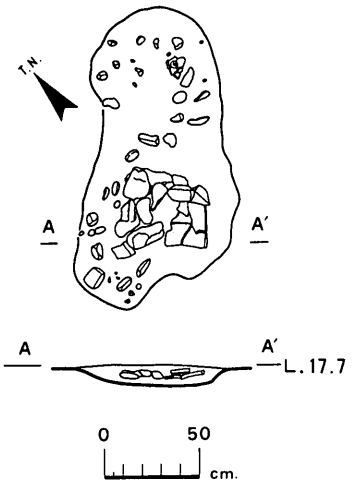
Ｅ－６の南東部で，ＳＢ04と重複して検出した。長径約162.0cm，短径約83.0cmの規模で隅丸の長方形を呈している。深さは約12cmを検出した。主軸方位はＮ－41°－Ｅである。

土坑内部には，多量の塊石・礫が認められ，160～162の屋瓦・土器が出土している。

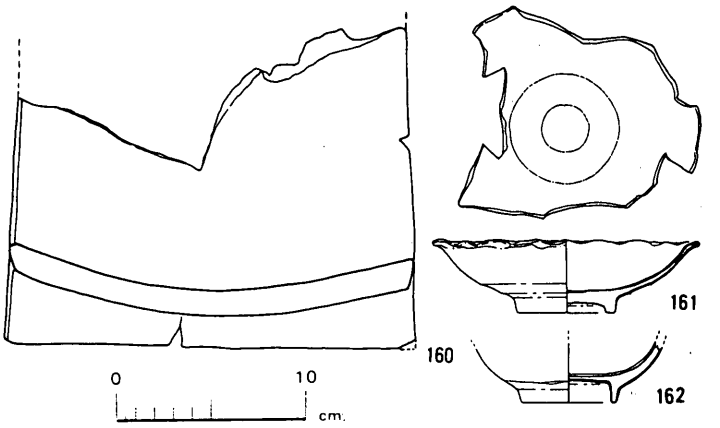
161は褐色釉を施した唐津系の皿であろう。波状を呈する輪花状の口縁部をもつ。底部内面，見込み部分の釉を環状に剝ぎ取っている。体部下半と高台部には，施釉は認められない。

162は瀬戸・美濃系の椀であろう。体部下半と高台部分に鉄釉，体部内外面に黄色釉を施した掛分椀である。

平瓦が１点出土している。160の凹面にはヘラ状工具による横方向の調整痕，凸面には粗雑な調整痕が残る。



第56図　ＳＫ10実測図



第57図　ＳＫ10出土遺物実測図

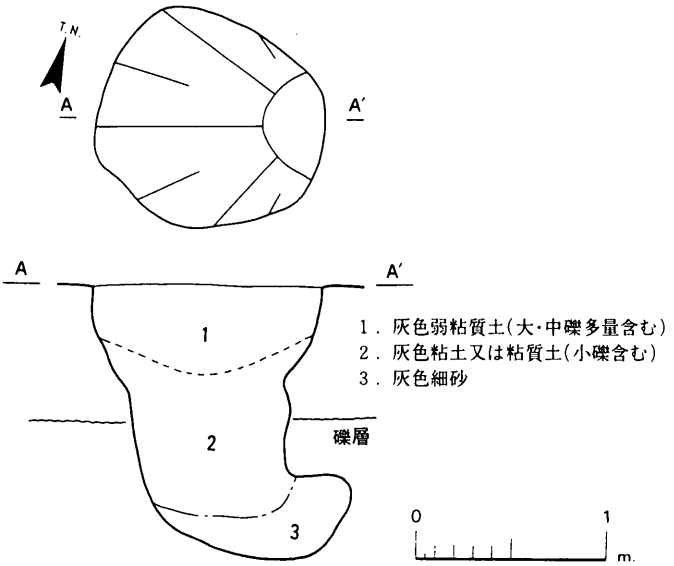
ＳＫ11　（第58図）

Ｇ－５のほぼ中央部で検出している。

長径約 122.0cmの規模で，ほぼ円形を呈している。深さは約135cmを検出した。

この遺構は，遺構面のさらに下層に堆積する礫層を掘り抜いて穿たれ，また土坑底が東方向に向って浸食する形状で検出しており，井戸遺構の可能性がある。

遺物は確認できなかった。



第58図　ＳＫ11実測図

ＳＫ12　（図版第21，第60図）

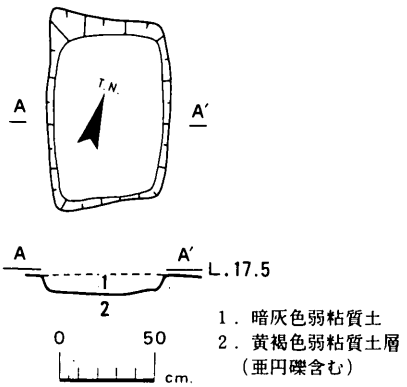
Ｈ－７・８にまたがって検出した。ＳＢ05の南方約２ｍに近接して位置する。

長径約216.0cm，短径約68.0cmの規模で，隅丸の長方形を呈している。深さは約18cmを検出した。主軸方位はＮ－36°－Ｗである。

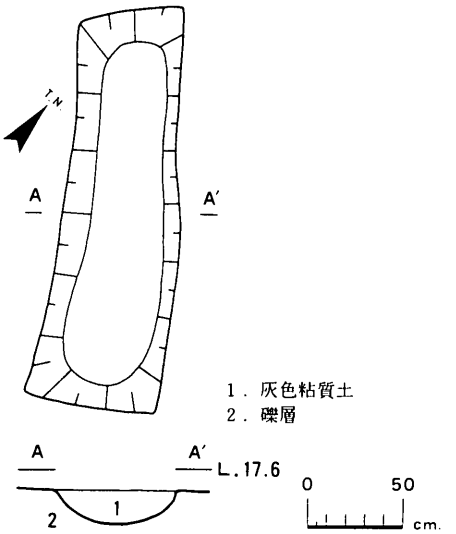
良好な遺物は出土していない。

ＳＫ13　（図版第22，第59図）

Ｉ－７の北西部で検出した。ＳＲ03の北岸上に堆積する土層から穿たれている。



第59図　ＳＫ13実測図



第60図　ＳＫ12実測図

長径約 104.0cm，短径約64.0cmの規模で隅丸の長方形を呈している。深さは約10cmを検出した。主軸方位はN－17°－Wである。

良好な遺物は出土していない。

6．その他の遺構

ＳＺ01　（図版第22）

Ｅ・Ｆ－３・４，Ｆ－５にまたがって，東西35ｍ，南北25ｍの範囲に多数の小規模な溝状遺構やピット状を呈する小さな落ち込みを検出している。主軸方位に多少のばらつきは認められるが，東西方向に穿つことを意図しているようである。

検出した形状や北東方約35ｍで検出しているＳＺ03から畝状遺構に伴う素堀り溝の残存部分と考えられる。

各溝間の間隔は50cm程度であり，溝幅は20cm，深さ５cm程度である。

良好な遺物は認められない。

ＳＺ02　（図版第23）

Ｈ・Ｉ－６の第４層直下で検出している。東西11ｍ，南北10ｍの範囲に，最大13条の小規模な溝状遺構が東西方向に穿たれていた。各溝間の間隔は40cm程度であり，溝幅は30cm，深さ８cm程度である。

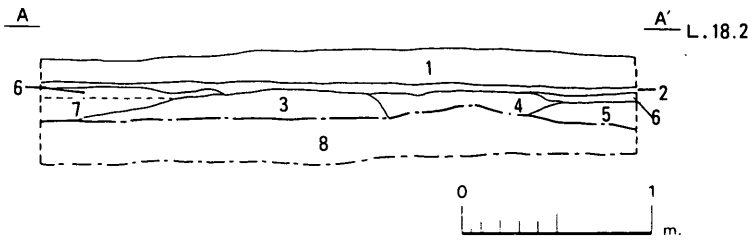
検出した形状から畝状遺構に伴う素堀り溝の残存部分と考えられる。遺物は検出できなかった。

ＳＺ03　（図版第23，第61図）

Ｇ・Ｈ－５にまたがって，延長15ｍを検出した。幅120cm，高さ15cm程度の規模をもち，N－24°－Wの主軸方位をもって直線状に伸びる高まりである。堆積状況は，断面形が蒲鉾状を呈し，良く締まっている。

この遺構については，畝状遺構や通路としての機能の可能性がある。

良好な遺物は認められない。



1．暗灰褐・明灰褐色弱粘質土（耕作土）
2．黄茶色粘質土（床土）
3．暗灰色弱粘質土
4．灰色弱粘質土
5．灰色粘土
6．白灰色弱粘質土
7．灰黄色弱粘質土
8．灰黄色粘質土（礫含む）

第61図　ＳＺ03土層実測図

7．その他の遺物

今回の調査では，遺構から遊離した状態で旧石器が出土している。また，それ以外の石器も少数の遺構から出土したものを除いては，包含層から出土している。遺構から出土した石器も，二次的に混入した遺物と判断した方が良さそうである。

また，近世を中心とした時期の石臼・砥石などの石製品が数点出土している。以下，一括して説明する。

旧石器　（図版第43，第62図）

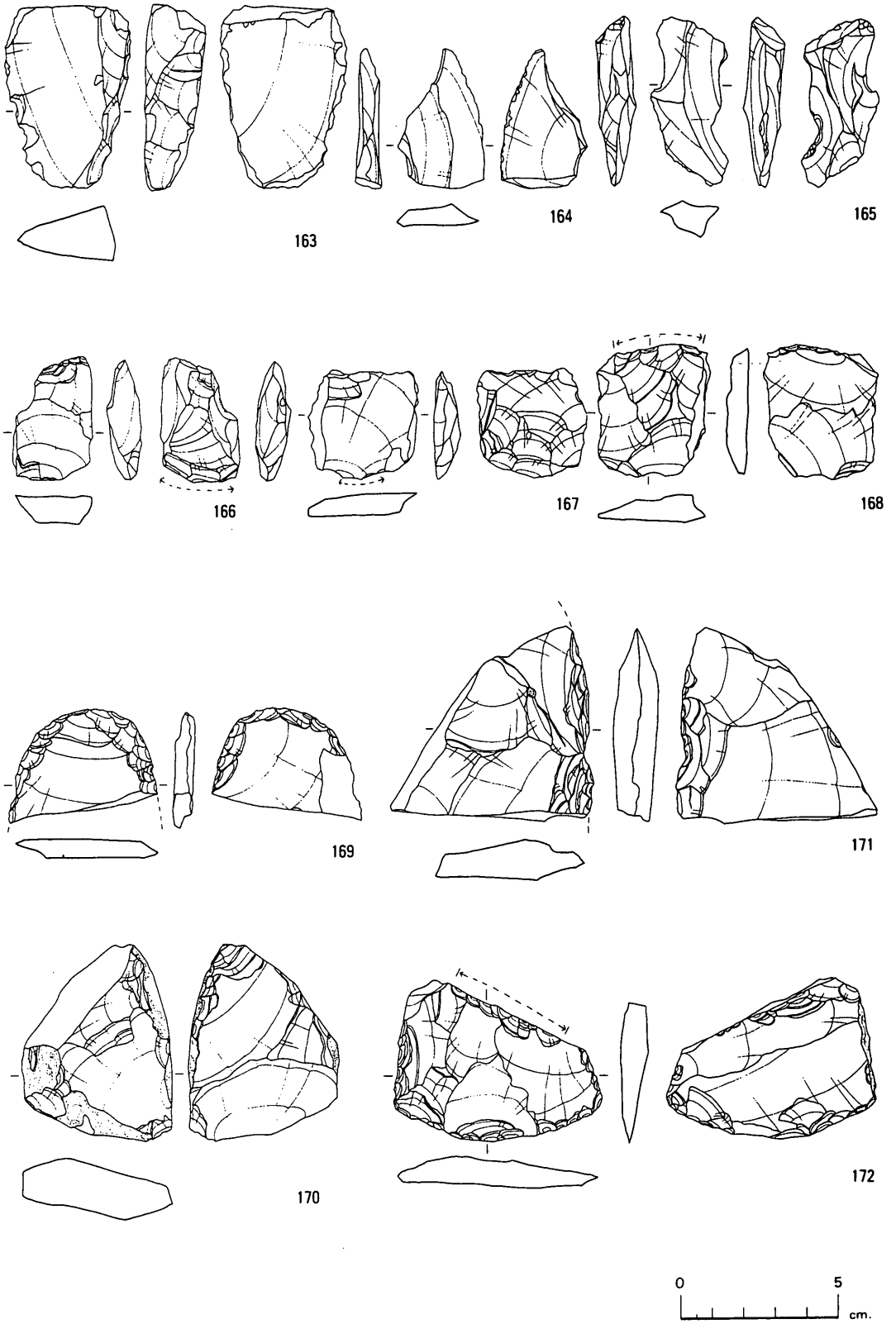
旧石器と考えられるものを3点図化した。いずれもサヌカイトを素材としており，器面の風化は著しい。163は比較的大型のナイフ型石器の基部として図化した。164は翼状剝片，165は石核である。これら3点は，Ⅱ・Ⅲ区でいずれも遺構から遊離した状態で検出している。

その他の石器　（図版第43～46，第62・63図）

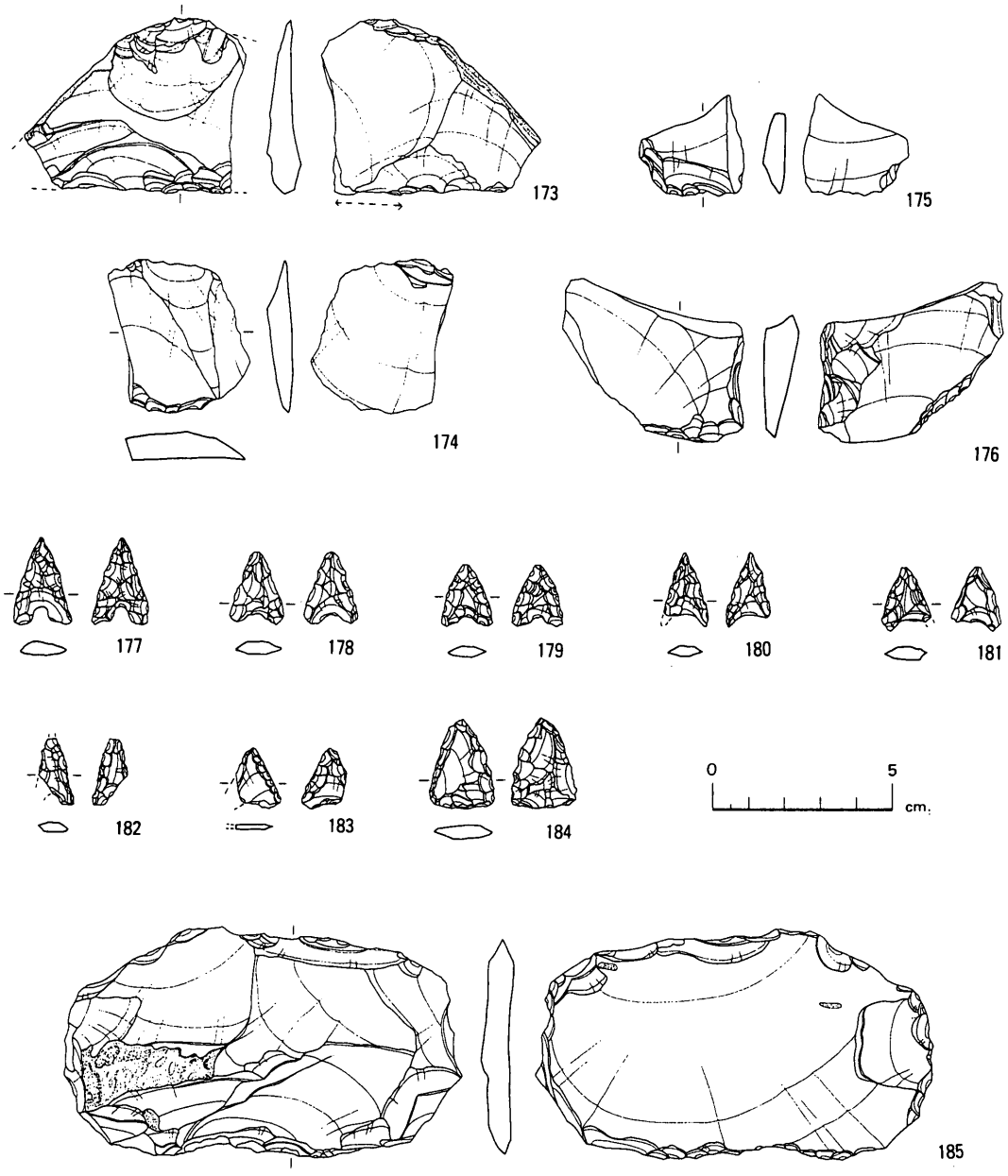
166･167は楔形石器，168は楔型石器の素材として図化した。いずれもサヌカイトを素材としている。3点ともⅣ区の2・3層から出土している。169～171は打製石斧，172～176は削器として図化した。いずれもサヌカイトを素材としている。170･172･176などは風化が著しい。185は抉りが不明瞭であるが，サヌカイトを素材とした石器であり，石庖丁として図化した。一部に礫面を残す。ＳＲ01から出土している。石鏃を8点図化した。177～183は7点が凹基式のものであり，平基式の石鏃は184の1点のみである。177･178･180～184はサヌカイトを素材とし，179は黒曜石を素材としている。184はＰ54から出土している。

石製品　（図版第47・48，第64～66図）

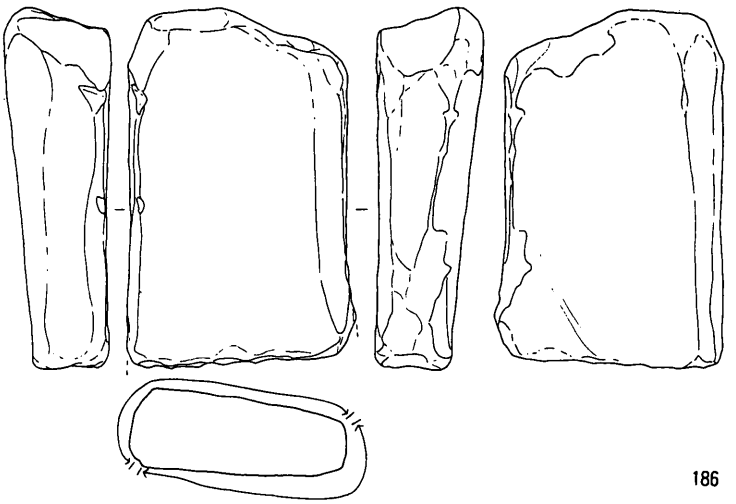
砥石は6点を図化した。186はＳＫ09から出土した。砂岩を素材としている。両端部は，折れて欠失しているが，4面ともに研磨した面がある。187はＳＫ07から出土した。砂岩を素材としている。一方の端部は，折れて欠失しているが，4面ともに研磨した面がある。188は流紋岩を素材としている。両端部は，折れて欠失しているが，4面ともに研磨した面がある。189は流紋岩を素材としている。いずれの面ともに研磨した面があり，細かい条痕が残る。190は流紋岩を素材としている。一方の端部を除き，研磨した面がある。191安山岩を素材としている。両端部は，折れて欠失している。片側の側面を除き，研磨した面がある。

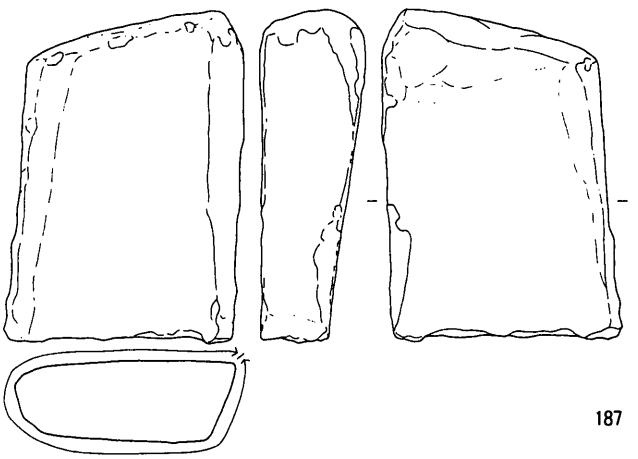


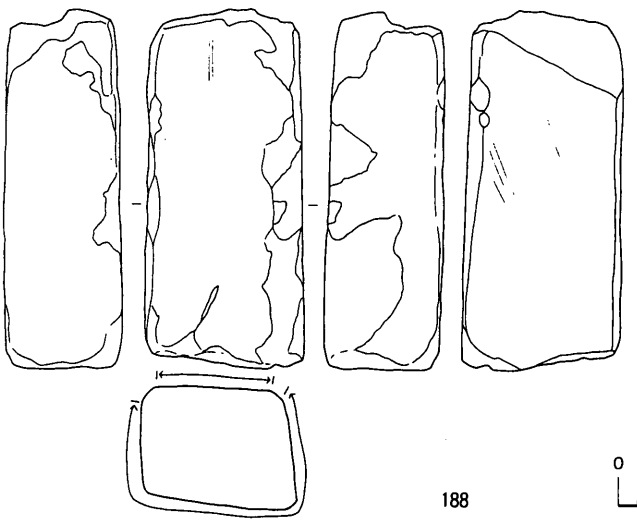
第62図　石器実測図　（1）

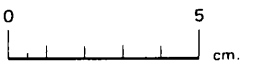


第63図　石器実測図　（2）

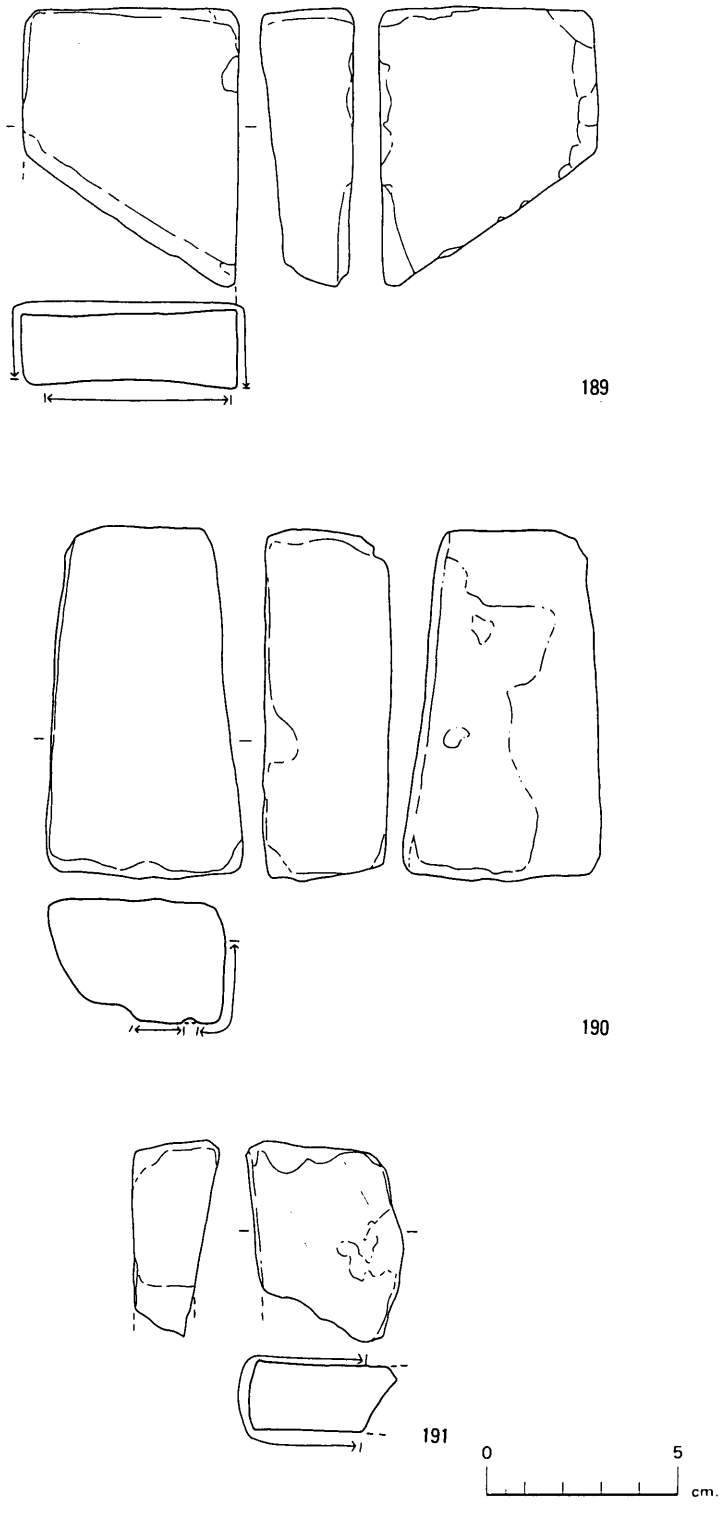




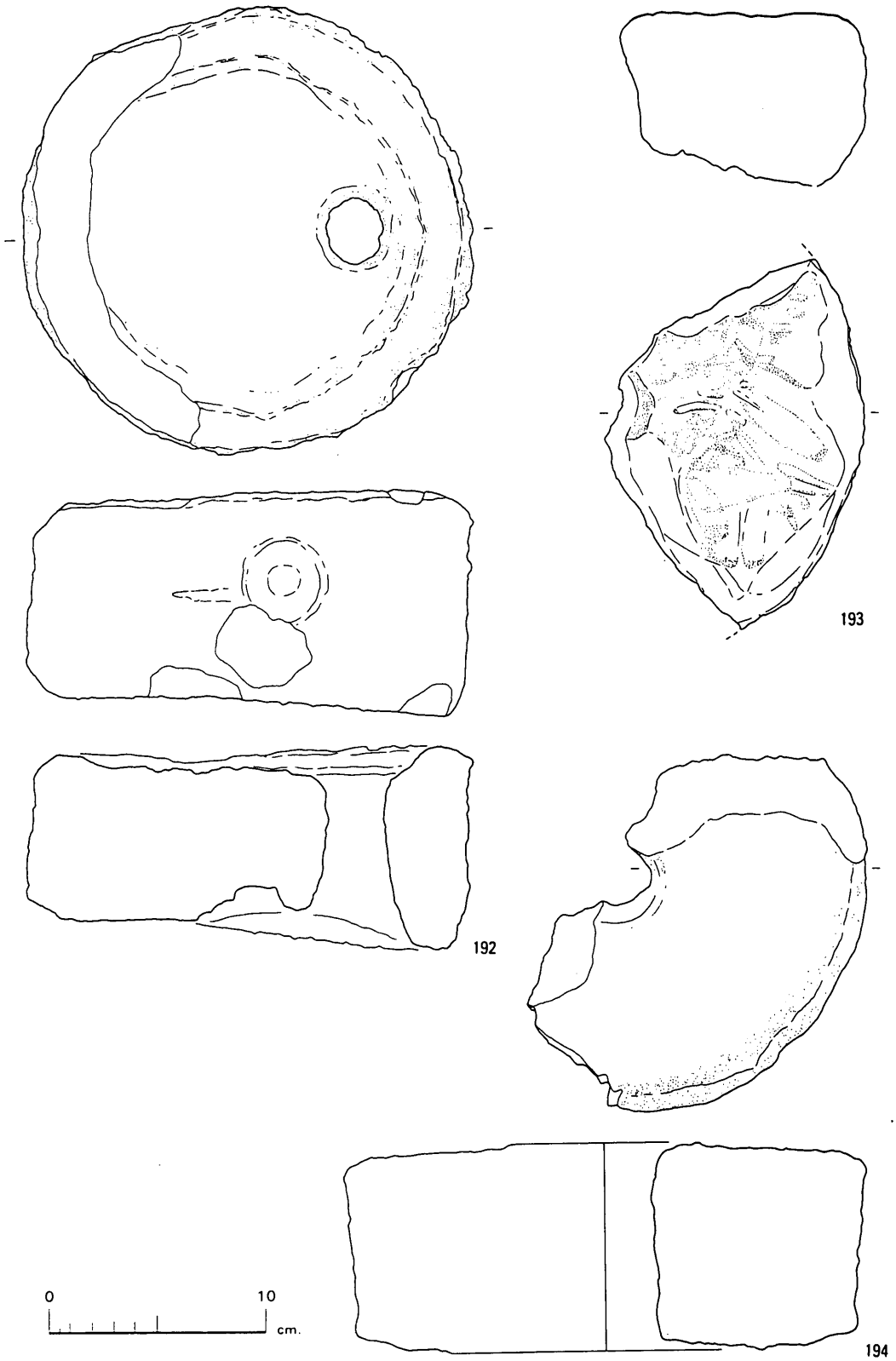




第64図　石製品実測図　（1）



第65図　石製品実測図　（2）



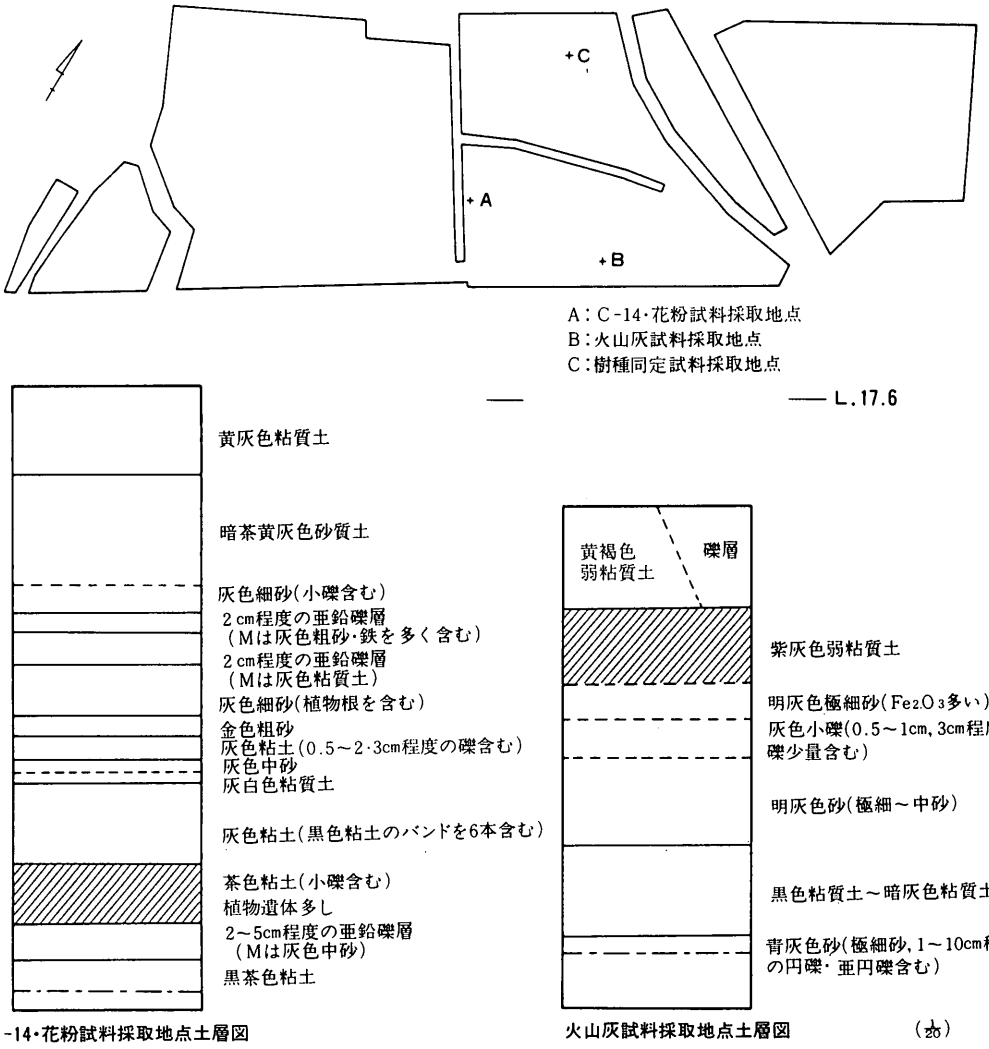
第66図　石製品実測図　（3）

石臼は3点を図化した。いずれも礫岩を素材とした挽き臼である。 192は上臼である。上面の周縁には，一段高く凸帯を巡らしている。直径4㎝程度の貫通する供給口を下方から上方に向って穿っている。挽き手を装着するため，径約2㎝の窪みを側縁部の中央やや上方に設けている。下面には，かすかにへこみが見られ，中心部に軸芯受けの窪みが掘り込まれている。溝は判読できない。193は1/4程度を残す。上臼として図化した。上面は，平坦である。下面には，かすかに溝が認められるが，刻み方の法則性は認められず，不規則なものである。194は1/4程度を残す。上臼，下臼の判断ができない。溝は判読できない。

第４章　自然科学分析

本章では，外部機関に委託して実施した郡家大林上遺跡出土の火山灰と花粉の分析，樹種同定およびＣ－14による年代測定の結果報告を掲載する。

試料の採取地点は，下図に示す。



第67図　試料採取地点

郡家大林上遺跡のテフラ層

1．はじめに

香川県丸亀平野は，土器川によって形成された沖積地である。丸亀平野中央部に位置する郡家大林上遺跡において，地質断面からテフラ試料を採取した。ここでは，この試料の記載を中心に報告する。

2．試　　料

採取した試料は表に示す。

第3表　採取試料表

試料番号	地点	
No.1	Ⅲ区たちわりNo.2	ガラス質火山灰試料
No.2	Ⅳ区試掘トレンチNo.2	ガラス質火山灰試料

3．分　析　法

試料は，湿ったまま約20ｇを秤量したのち水を加え，超音波装置を用いて分散をはかり，分析篩（#250）で受けながら泥分を除去した。乾燥後，分析篩（#60，#250）を用いて＞1/4㎜および1/4～1/16㎜の粒径に篩別・秤量し，粒径組成を算出した。なお，分析に用いた試料の乾燥重量は，別に同一試料約５～10ｇを秤量ビンにとり，秤量後乾燥器で105℃，５時間放置して得られた乾燥重量から算出した。鉱物粒子の観察は，1/4～1/16㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行った。１試料ごとに火山ガラス・軽鉱物・重鉱物の合計300粒以上，また風化物その他の粒子を含めた合計が500粒以上になるよう計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木[2]の方法に，また屈折率の測定は新井[3]の方法にしたがった。

4．分析結果

偏光顕微鏡下での計数結果を第４表に示す。これをもとに粒径組成，火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成，形態別の火山ガラス含有量を第68図に示す。なお，火山ガラス含有率は，試料単位重量当りの1/4～1/16㎜の粒径の火山ガラスの割合で表示した[1]。屈折率の測定結果を次表に示す。

第４表　屈折率測定値

試料番号	火山ガラスの特徴	屈折率（モード）	対比
No.１	バブルウォール型》軽石型	1.497～1.501(1,499～1.500)	ＡＴ
No.２	バブルウォール型》軽石型	1.498～1.501(1.499～1.500)	ＡＴ
No.３	バブルウォール型》軽石型	1.499～1.501(1.500)	ＡＴ
No.４	バブルウォール型》軽石型	1.499～1.501(1.500)	ＡＴ
No.５	バブルウォール型》軽石型	1.498～1.501(1.499～1.500)	ＡＴ
No.６	バブルウォール型》軽石型	1.497～1.501(1.499～1.500)	ＡＴ

５．郡家大林上遺跡のテフラ試料

No.１の試料は，Ⅲ区たちわりNo.２の断面において採取した。約１ｍの厚さをもつ砂層の最上部に約10cmの灰色ガラス質火山灰が堆積し，その上位は有機質粘土がおおう。さらに上位には中礫～大礫からなる礫層が50cm以上の厚さで堆積している。テフラは，1/16mm以上の砂は全体の30％を占める。火山ガラス・軽鉱物・重鉱物組成において90％の無色ガラスから構成され，その形態はバブルウォール型であるＡ・Ａ′型が多くを占めＣ・Ｄ・Ｅ・Ｆ型などの軽鉱物型火山ガラスはわずかである。ガラス以外の鉱物としては，斜長石・石英・角閃石などが検出された。火山ガラスの屈折率は1.497～1.501（1.499～1.500）の値を示す。以上の諸特性から，本テフラは姶良Tn火山灰（ＡＴ；町田・新井[4]）に対比される。

No.２の試料は，Ⅳ区試掘トレンチNo.２の断面において採取された11cmの厚さをもつ灰白色砂粒ガラス質テフラである。テフラの層位は，No.１と同様に厚さ105cmのよくしまった塊状の細～中粒砂層の上位に堆積し，灰色粘土におおわれる。試料全体の45％を1/16mm以上の粒径粒子が占める。テフラは，90％をこえる無色火山ガラスからなり，その形態はバブルウォール型＞軽石型である。ガラス以外の鉱物は斜長石・石英・斜方輝石・単斜輝石が検出された。火山ガラスの屈折率は，1.498～1.501（1.449～1.500）である。No.１と同様にＡＴに対比される。　　（財団法人　山梨文化財研究所　河西　学）

注）１　形態ｘ型の火山ガラスの含有率Ａｘは，

$$Ax\ (\%) = (C/B) \times (Ex/D) \times 100$$

で算出される。ただし，

Ｂ　：試料の乾燥重量（ｇ）

Ｃ　：1/4～1/16mm粒径砂分の重量（ｇ）

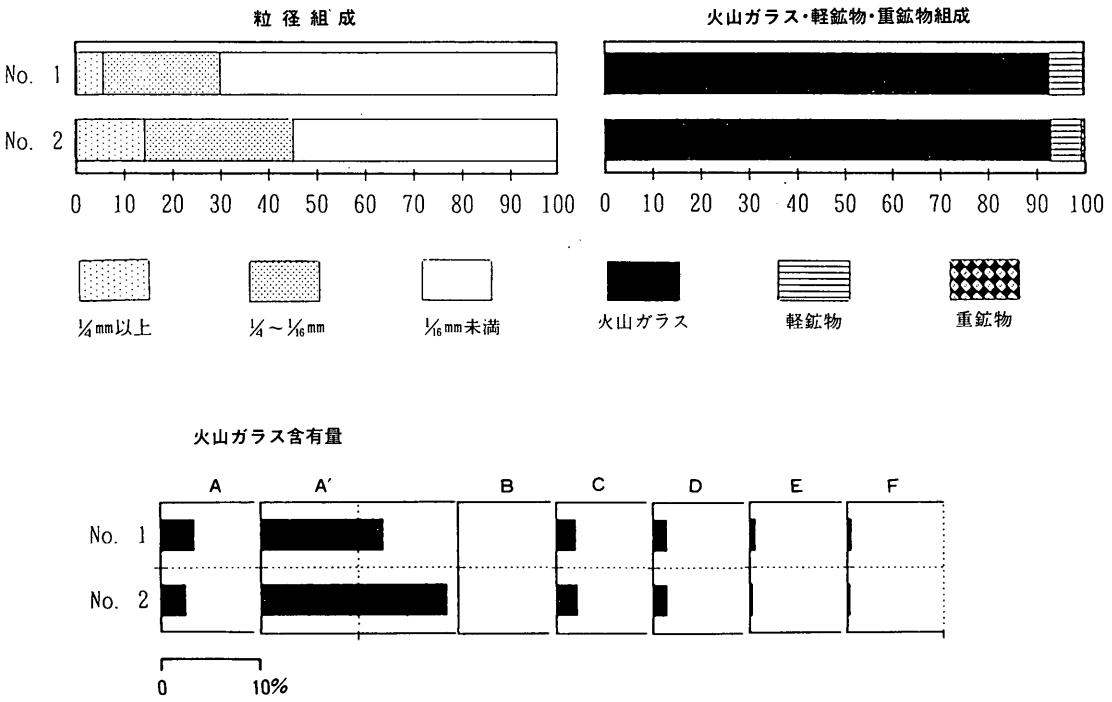
D　：計数した1/4～1/16㎜粒径粒子の総数

Ｅｘ：径数したｘ型火山ガラスの粒数

2　遠藤邦彦・鈴木正章　「武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学13』　19-30　(1980)

3　新井房夫　「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定　―テフロクロノロジーの基礎研究　―」『第四紀研究11』　254-260 (1972)

4　町田　洋・新井房雄　「広域に分布する火山灰　－姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義」『科学46』　339-347　(1976)



第68図　テフラ層分析結果

郡家大林上遺跡採取試料の花粉分析

1．はじめに

郡家大林上遺跡（香川県丸亀市郡家町所在）が位置する丸亀平野の地形・地質の概略は以下のとおりである。丸亀平野は，瀬戸内海の海岸線に沿った幅1.5～2.5km程度で帯状に沖積平野が形成され，それより南部が段丘や扇状地的な地形となる。これらの段丘や扇状地的な地形を縫って弘田川・金倉川・土器川・大束川などの各河川の旧河道が網目状に広がるとされている[1]。

今回の分析調査地点は，土器川扇状地の旧中洲と考えられる礫層に存在する凹地（現時点では遺構かどうか不明なため，凹地という用語をもちいる）である。この凹地には，木質泥炭層が堆積しており，堆積物の上部にはTn火山灰が認められるとされている。

今回，財団法人　香川県埋蔵文化財調査センターにより，ＡＴより下位の堆積物中に含まれる花粉化石群集を明らかにし，古植生復原に関する分析調査の委託が当社にあった。

2．試　　料

試料は，ＡＴより下位に堆積した木質泥炭層とされる層準より採取した。当社において観察したところ，試料は腐植を含めた黒褐色砂質シルトで非常に丸い中礫が入る。分析試料は，試料採取後に大気中に保管されていたため非常に乾燥し，現生花粉が付着する可能性があるとされていたが，堆積物の表面を削って現生花粉が混入していない場所を選択した。

3．分析方法

花粉・胞子化石は，湿重約10ｇの試料についてKOH処理，重液分離（$ZnBr_2$：比重2.2）HF処理，アセトリシス処理の順に物理・科学的な処理を施して，試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後，光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら，出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の分布図として表示する。図中の出現率は，木本花粉が木本花粉総数を，草本花粉・胞子が総数より不明花粉を除いた数を，それぞれ基数として百分率で算出している。図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは，種類間の区別が困難なものである。

4．花粉化石の産状

結果は，第５表，第69図～第71図に示す。花粉化石は保存状態が悪く，外膜が溶けて薄くなっていたり，また壊れていたりする。木本花粉では，カバノキ属・ハンノキ属が多産し，ツガ属・トウヒ属・マツ属単維管束亜属・クマシデ属－アサダ属・コナラ属コナラ亜属などを伴う。草木花粉では，イネ科・カヤツリグサ科が多産し，ヨモギ科・他のキク亜科を伴う。この他，水生植物のサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属などが検出される。

5．古植生の検討

試料が採取された層位は，土器川扇状地の礫地にみられる凹地の堆積層であり，上流域の堆積物を削りながら堆積したと予想される。それ故に，今回の花粉化石群集は，上流域より搬入された花粉化石も含まれると考えられるため，比較的広範囲の植生を反映していると推定される。このことを考慮して以下考察をすすめる。

調査地点の周辺は，カバノキ属・ハンノキ属が多産し，ツガ属・トウヒ属・マツ属単維管束亜属・クマシダ属－アサダ属・コナラ属コナラ亜属を伴うことから，これらの種類から構成される森林が存在していたと推定される。この中で，ハンノキ属は湿地に生育する仲間を含むことから，当時も河川周辺の湿った場所に生育していた可能性がある。周辺の低地には，イネ科・カヤツリグサ科を中心に，ヨモギ属を含めたキク亜科の草本類が生育していたと推定される。また，水生植物のサジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属が検出されることから，調査地点の周辺には，これらの植物が生育する水湿地が存在していたと推定される。

これまでの調査例によると，最終氷期最盛期以前の時期には，４万年前後のInterstadial flora（亜氷期植物相）が優勢な時期が存在したと推定されている[(3)]。

四国の瀬戸内海沿岸部においては，高松市多肥上町・高松市松縄町・丸亀市郡家町のボーリング・コアで花粉分析により植生史の検討がなされている[(2)]。この中で高松市松縄町におけるボーリング・コアでは，23,990±2,060y.B.P.の放射性炭素年代測定値が得られた深度49.6～52.4mの試料でトネリコ属とスギ属が多産する群集が得られており，これが最終氷期最盛期以前の温暖期に相当する可能性があるとされている。今回の花粉化石群集は，冷温帯に分布すの中心があるカバノキ属が多産し，亜寒帯林に分布の中心があるトウヒ属・マツ属単維管束亜属などが低率である。このことから，ここでの花粉化石群集は，最終氷期最盛期以前の温暖期を示しているのかもしれない。しかしながら，時間的な

変遷が明らかにされていないこと，香川県内で最終氷期前後の調査例が少ないことから，今回の分析結果のみでは詳細な検討は不可能である。

今回の分析調査ではＡＴより下位における花粉化石群集が明らかになった意義は大きい。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

注）1　長谷川修一・斎藤　実　「讃岐平野の生い立ち　―第一瀬戸内累層群遺構を中心に―」『アーバンクボタ28』　52-59（1989）

2　古市光信　「香川県高松・丸亀平野ボーリング・コアの花粉分析（予報）　―特に三豊層の再確認とその地質時代について―」『香川県自然科学館研究報告２』　25-32　（1980）

3　鈴木敬治　「最終氷期の植物相と植生」『月刊地球５』（1983）

種類(Taxa)	試料名	泥炭層
木本花粉		
モミ属		4
ツガ属		25
トウヒ属		13
マツ属単維管束亜属		7
マツ属（不明）		16
スギ属		2
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科		5
ヤマモモ属		1
クルミ属		4
クマシデ属－アサダ属		9
ハシバミ属		1
カバノキ属		74
ハンノキ属		70
ブナ属		4
コナラ属コナラ亜属		16
クリ属		2
ニレ属－ケヤキ属		6
トチノキ属		1
イボタノキ属		2
トネリコ属		4
スイカズラ属		1
草本花粉		
サジオモダカ属		2
オモダカ属		7
イネ科		81
カヤツリグサ科		145
ミズアオイ属		2
ユリ科		1
サナエタデ節－ウナギツカミ節		3
ナデシコ科		1
ワレモコウ属		3
バラ科		3
ツリフネソウ属		1
ミソハギ属		1
ヤエムグラ属－アカネ属		2
オミナエシ属		1
ヨモギ属		8
他のキク亜科		23
タンポポ亜科		2
不明花粉		18
シダ類胞子		
シダ類胞子		59
合計		
木本花粉		267
草本花粉		286
不明花粉		18
シダ類胞子		59
総花粉・胞子		630

第５表　花粉分析結果

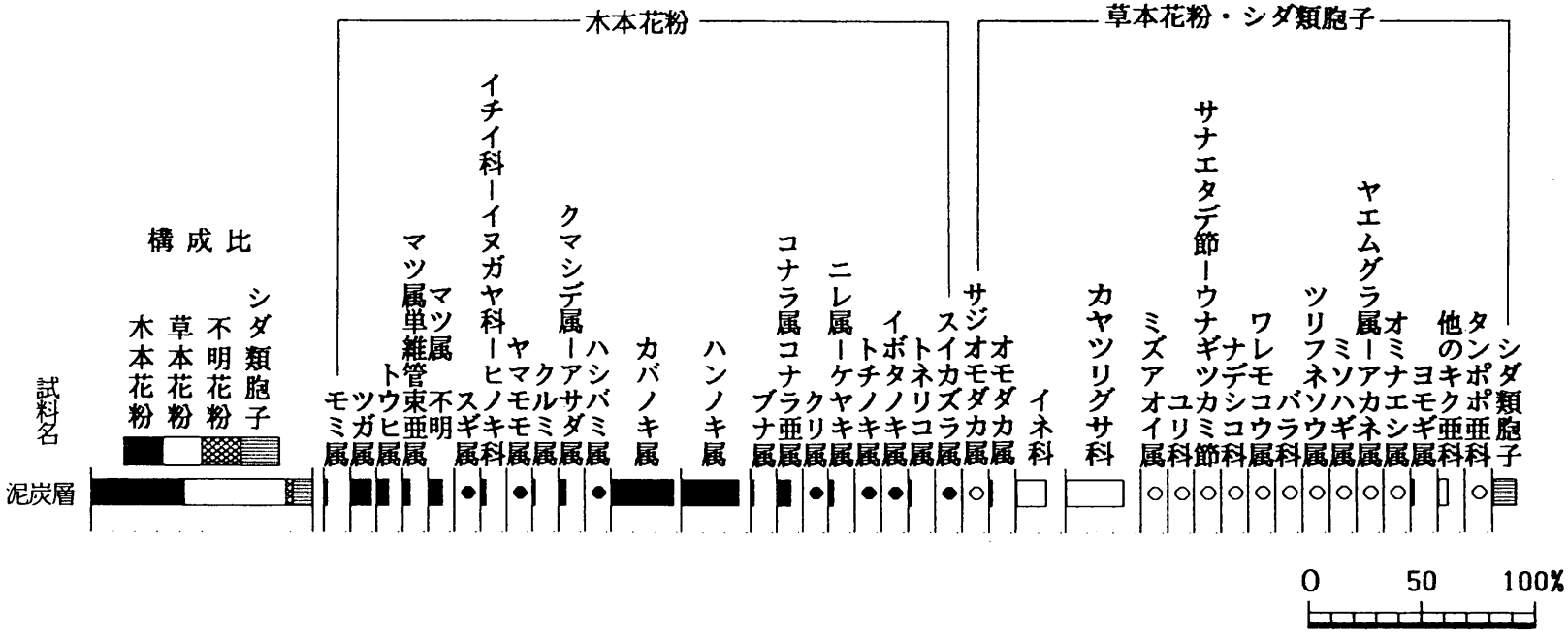
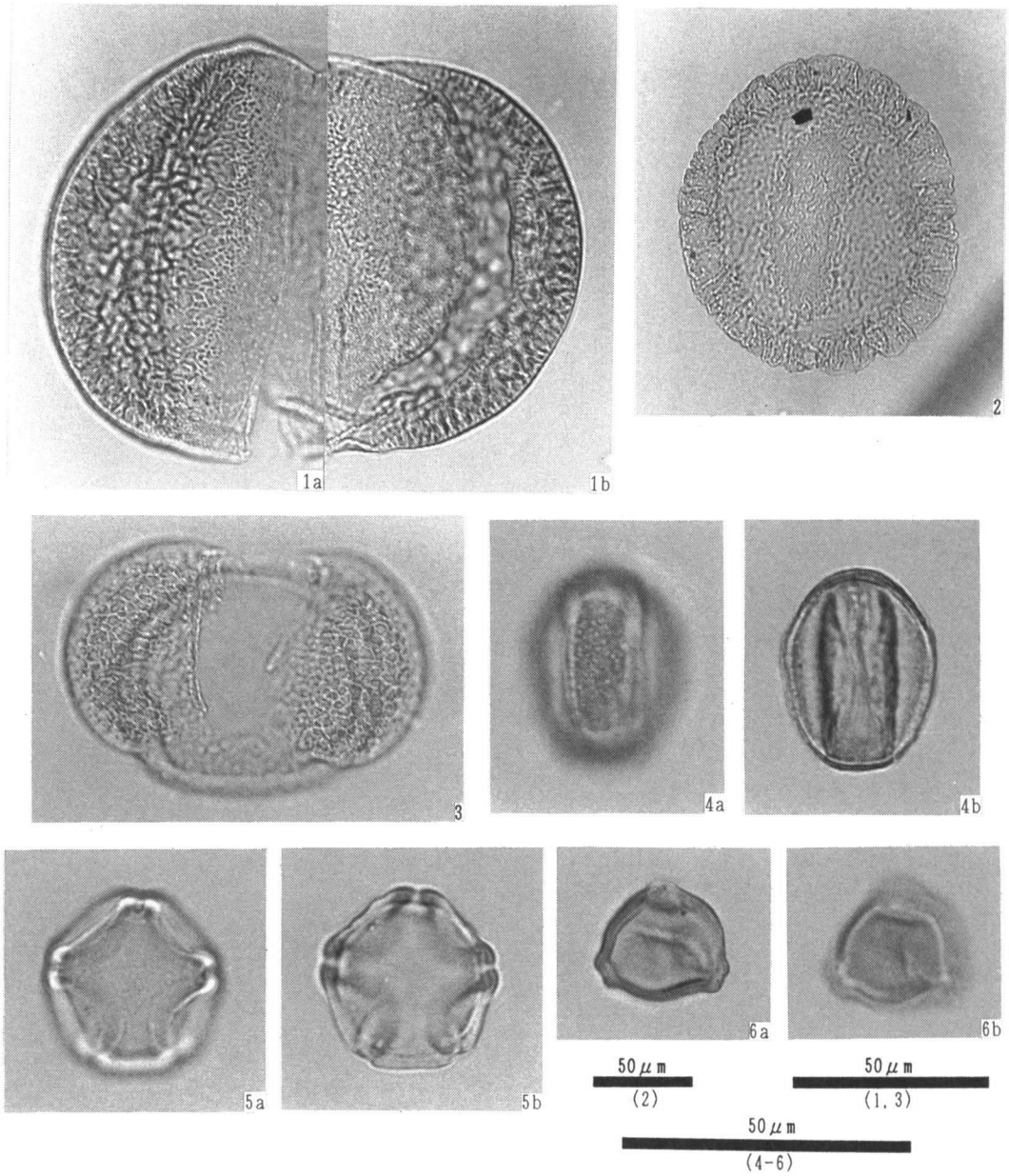


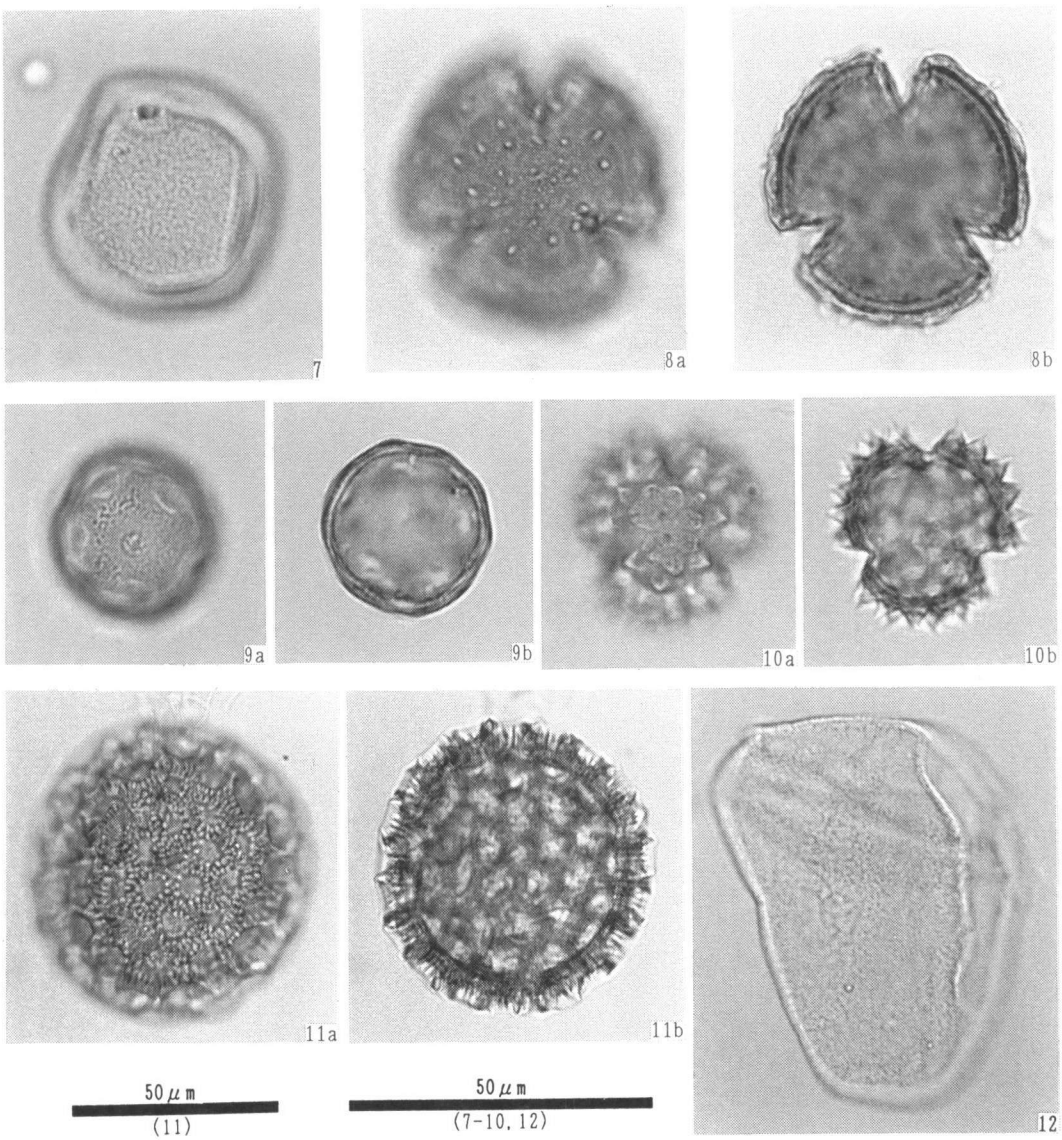
図1．花粉化石群集
　出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1％未満を示す。

第69図　花粉化石群集



1. トウヒ属　　2. ツガ属
3. マツ属　　4. コナラ属コナラ亜属
5. ハンノキ属　　6. カバノキ属

第70図　花粉化石　（1）



7. イネ科
8. オミナエシ属
9. サジオモダカ属
10. キク亜科
11. サナエタデ節－ウナギツカミ節
12. カヤツリグサ科

第71図　花粉化石　（2）

郡家大林上遺跡出土木製品の樹種

1．はじめに

香川県では，これまで下川津遺跡などで出土した木製品について樹種同定が行われてきた。また，林・坊城遺跡では，自然木の樹種同定や花粉分析などによる古植生の検討が行われている。その結果，県内における過去の用材選択の実態や古植生が明らかになりつつある。

樹種同定の結果をみると，柱材や井戸材などの建築材には，時代を問わずマツ属複維束亜属（二葉松類），モミ属，コウヤマキなどの針葉樹が多く用いられ，広葉樹材ではサクラ属，コナラ属コナラ節などがわずかに同定されているのみである。また，板状の加工を行う木製品にも針葉樹が多く，スギ，モミ属，ヒノキ属などが同定されている。林・坊城遺跡では，板材に多数の広葉樹材が同定されているが，全てコナラ属コナラ亜属の樹皮であった。コナラ亜属の樹皮をどのような用途の板材として利用したのかは定かではないが，他地域でこれまでに当社が行った調査の中にも同様の例がいくつかみられることから，過去になんらかの板材として広く利用されていたことが推定される。

全体を通してみると，用途によって使用される樹種に違いがあり，その傾向は時代や遺跡の立地に関わらず共通している。このことから，用途に応じた「適材適所の木材選択」が行われていたことが推定される。

今回の調査では，丸亀市郡家大林上遺跡から出土した板材について樹種同定を行い，過去の用材選択に関する検討と資料蓄財を行う。

2．試　料

試料は近世（18世紀後半）と推定される掘立柱建物（ＳＢ04）の柱穴に遺存していた柱材である。

3．方　法

剃刀の刃を用いて，試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製した。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で観察・同定した。

4．結　果

同定の結果，試料はカヤに同定された。樹種の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性

質を以下に記す。なお，学名・和名は，主として「原色日本植物図鑑　本編〈Ⅱ〉」にしたがい，一般的な性質については「木の事典　第２巻，第７巻」も参考にした。

・カヤ（*Torreya nucifera Sieb.et Zucc.*）　　イチイ科

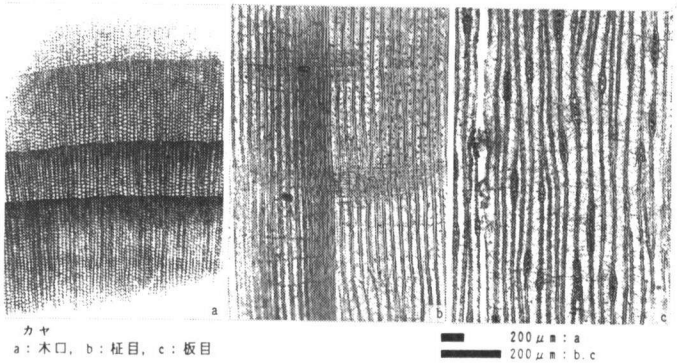
試料名　ＳＢ04出土　柱材

早材部から晩材部への移行はやや急で，晩材部の幅は薄く，年輪界は明瞭。樹脂細胞，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞に壁は滑らか，分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で１～４個。放射組織は単列，１～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

カヤは，本州（岩手県・山形県以南）・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で，樹高25～30mにもなるが生長は極めて遅い。庭木として植栽されることも多く，いくつかの変・品種がある。その材は針葉樹としては重い方で，強度は中程度，割裂性は大きく，加工は容易，保存性特に耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具材など各種の用途が知られる。種子は食用となるほか，搾油（食用・燈用・頭髪用）されたり駆虫薬としても使われた。

５．まとめ

香川県内から出土した柱材の樹種同定では，時期を問わずマツ属複維管亜属が多い。また，そのほかの樹種もコウヤマキなどの針葉樹材が多く，針葉樹材が広く柱材などの建築材に利用されていたことを示唆する。今回の結果は針葉樹という点からみれば，これまで得られている結果と調和的である。しかし，県内のほかの樹種同定結果では，広葉樹材もいくつか認められる。このような樹種の違いは，構築された時期や建物の使用目的の違い，使用者の違いなどにも影響されたと考えられるが，現時点では不明である。



カヤ
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b.c

第72図　顕微鏡写真

注　1　北村四郎・村田　源　『原色日本植物図鑑　木本編〈Ⅱ〉』(1979)
2　平井信二　『木の事典』(1979～1989)
3　伊東隆夫・島地　謙　「古代における建築物柱材の使用樹種」『木材研究・資料』
№14　49-76　(1979)
西岡常一・小原二郎　『法隆寺を支えた木』(1978)
4　伊東隆夫　「日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途　Ⅱ」『木材研究・資料』
№26　91-189 (1990)
5　島地　謙・伊東隆夫編『日本の遺跡出土木製品総覧』(1988)

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

C－14年代測定

試　　料；郡家大林上遺跡　　Ⅲ区E－5出土泥炭

C－14年代；30500±1040yB.P.（29600±1010yB.P.）

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され，西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsB.P.）として示されています。付記された年代誤差は，放射線計数の統計誤差と，計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので，^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95％となります。

（社団法人　日本アイソトープ協会）

第5章　おわりに

今回の調査で，現地表下30～100cm程度から検出した遺構は，自然河川跡や土坑，ピット，それに掘立柱建物遺構などである。また，遺物は遺構から遊離した状態で検出した旧石器時代のものを別にすれば，弥生時代からのものである。

弥生時代の遺物は，ＳＲ01自然河川跡やＳＤ01溝状遺構で，壺・甕・高杯・鉢などの土器を検出した。ＳＲ01の第Ⅰ期・第Ⅱ期流路からは，少量の中期の土器を含むが，後期の土器を中心として出土している。いずれも，小片であり，また摩滅が著しいことから，当該地以外の場所からの流入や後世に混入したものと判断しておく。

奈良時代の遺物も，ＳＲ01自然河川跡の第Ⅰ期の流路で検出した。これらも，小片であり，また摩滅が著しいことから，当該地以外の場所からの流入や後世に混入したものと考えた方がいいだろう。土師器・須恵器のほかに，斎串が２点出土している。県内では，善通寺市の金蔵寺下所遺跡，坂出市の下川津遺跡，丸亀市の郡家原遺跡などで出土が報告されており，また最近の調査によって，高松市の前田東・中村遺跡，太田下・須川遺跡，多肥松林遺跡，中間西井坪遺跡，志度町の鴨部・川田遺跡などからも出土しており，近年出土例が増加している。

これらの時期につづく平安時代から鎌倉時代の遺物も，ＳＲ01自然河川跡から少量が出土しており，この自然河川が長時間にわたって存続していたことがわかる。

その後，顕著な遺構が認められないことから，この遺跡での人々の生活は，一時期途絶えるようである。

Ⅱ・Ⅲ区で，ＳＢ01・02・03・04の４棟の掘立柱建物遺構と，Ⅳ区でＳＢ05の計５棟の掘立柱建物遺構を検出している。良好な遺物が検出できなかったため，建設時期の判断には困難を伴うが，柱穴跡の埋土である灰色粘質土が，近接して位置する土坑の埋土と類似することから，江戸時代の建物遺構と考えられる。この時期に，人々の生活が再び始まったようである。Ｄ・Ｅ－５で検出したＳＫ02やＳＫ07の出土遺物が示す近世末前後の時期が，この遺跡の最終的に設けられた遺構と考えられる。

郡家大林上遺跡の調査では，良好な遺構・遺物が確認できなかった。また，この遺跡の東西に隣接して位置する，郡家田代遺跡や郡家原遺跡でも同じような傾向を示す部分が認められる。このことは，当該地が後世の開墾や地下げを受け，遺構面が削平された結果であろう。

付　　表

第1表　土器観察表

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土	備考
1	24	弥生土器 甕	SR01-1	口縁部破片	外：ナデ．凹線2条．刻目 内：ナデ	外：明赤褐(2.5Y6/8) 内：黄灰(2.5Y6/1) 断：灰黄(2.5Y6/2)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	
2	24	弥生土器 壺	SR01-1	口縁部1/7存 口径10.0cm	外内：回転ナデ	外：にぶい黄(2.5Y6/3) 内：灰黄(2.5Y6/2) 断：黄灰(2.5Y5/1)	2mm 以下の白・黒色砂粒を少量含む	
3	24	弥生土器 長頸壺	SR01-1	口縁部1/5存 口径10.2cm	外：ナデ 内：ハケ目	にぶい黄(2.5Y6/3)	2mm 以下の白色砂粒・雲母をやや多量含む	
4	24	弥生土器 壺	SR01-1	口縁部1/6存 口径16.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ．ハケ目	にぶい黄褐(10YR5/3)	5mm 以下の白色小石を少量含む	
5	24	弥生土器 甕	SR01-1	口縁部1/9存 口径14.0cm	外：横ナデ．タタキ目 内：横ナデ	外：灰黄(2.5Y6/2) 内断：暗灰黄(2.5Y5/2)	5mm 以下の白・茶・黒色小石を多量含む	
6	24	弥生土器 甕	SR01-1	頸部1/10存	外：ナデ 内：ナデ．ハケ目	外：黒(5Y2/1) 内断：明赤褐(5YR5/6)	2mm 以下の白色砂粒・雲母を少量含む	
7	24	弥生土器 甕	SR01-1	口縁部1/6存 口径16.4cm	外：横ナデ．タタキ目．ハケ目 内：横ナデ．ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	2mm 以下の白色砂粒・雲母を少量含む	煤付着
8	24	弥生土器 甕	SR01-1	頸部1/8存	外：タタキ目．ハケ目 内：ハケ目	外：暗灰黄(2.5Y5/2) 内：暗灰黄(2.5Y5/2) 暗灰(N3/) 断：暗灰(N3/)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	
9	24	弥生土器 甕	SR01-1	頸部1/5存	外内：摩滅のため調整不明	外断：褐(7.5YR4/3) 内：にぶい黄褐(10YR4/3)	3mm 以下の白・茶・灰色小石を多量含む	
10	24	弥生土器 甕	SR01-1	口縁部1/8存 口径19.2cm	外：横ナデ．タタキ目後ハケ目 内：横ナデ．指押さえ後ハケ目	外断：灰黄(2.5Y6/2) 内：暗灰黄(2.5Y5/2)	2mm 以下の白色砂粒・雲母を少量含む	
11	25	弥生土器 甕	SR01-1	口縁部付近 1/12存	外：タタキ目 内：指押さえ	外断：にぶい黄褐(10YR5/4) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	1mm 以下の黒色砂粒を少量含む	
12	25	弥生土器 甕	SR01-1	頸部1/7存	外内：摩滅のため調整不明	明褐(7.5YR5/8)	2mm 以下の白色砂粒を多量，雲母を少量含む	
13	25	弥生土器 甕	SR01-1	頸部1/16存	外：タタキ目 内：指頭痕	外：灰オリーブ(5Y5/2) 内：灰オリーブ(5Y5/3) 断：灰(5Y4/1)	2mm 以下の白色砂粒を多量，雲母を少量含む	
14	25	弥生土器 甕	SR01-1	口縁部1/16存 口径24.0cm	外内：ナデ	灰(7.5Y4/1)	2mm 以下の白・黒色砂粒を少量含む	
15	25	弥生土器 甕	SR01-1	頸部破片	外：タタキ目 内：指頭痕	外：にぶい黄(2.5Y6/3) 内：にぶい黄褐(10YR5/4) 断：褐灰(10YR4/1)	2mm 以下の白色砂粒を多量，雲母を少量含む	
16	25	弥生土器 甕	SR01-1	底部1/4存 底径4.6cm	外：ハケ目．ナデ 内：指ナデ	外：にぶい赤褐(2.5YR4/3) 内：にぶい黄(2.5Y6/3) 断：灰(5Y4/1)	2mm 以下の白色砂粒・雲母を少量含む	
17	25	弥生土器 甕	SR01-1	底部ほぼ完存 底径4.0cm	外：摩滅のため調整不明 内：指頭痕	外：にぶい黄褐(2.5YR5/4) 内：明褐(7.5YR5/6) 断：黒褐(7.5Y3/1)	3mm 以下の白色小石を多量含む	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
18	25	弥生土器 壺	ＳＲ01-1	底部1/2存 底径10.0cm	外内：摩滅のため調整不明	外断：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：にぶい黄橙(10YR6/4)	4 mm以下の白・茶色小石を多量含む	
19	25	弥生土器 壺	ＳＲ01-1	底部1/3存 底径9.0cm	外内：摩滅のため調整不明	外：にぶい黄橙(10YR6/4) 内断：にぶい黄(2.5Y6/3)	5mm 以下の白・茶色小石を多量含む	
20	26	弥生土器 壺	ＳＲ01-1	底部1/8存 底径7.0cm	外内：摩滅のため調整不明	外：赤(10R5/6) 内：黒(2.5Y2/1) 断：赤(10R5/6) 黒(2.5Y2/1)	3mm 以下の白色小石を少量含む	
21	26	弥生土器 鉢	ＳＲ01-1	体部1/2存 口径18.2cm 器高 8.9cm	外：ナデ 内：ナデ．ハケ目指ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3)	4mm 以下の白・茶色小石を多量含む	
22	26	弥生土器 高杯	ＳＲ01-1	体部2/5存	外：摩滅のため調整不明．指頭痕 内：摩滅のため調整不明	外：橙(5YR6/6) 内：にぶい黄褐(10YR5/3) 断：灰黄褐(10YR4/2)	4mm 以下の白・灰色小石を多量含む	
23	26	弥生土器 高杯	ＳＲ01-1	底部脚部存	外：ハケ目 内：ナデ	外内：浅黄(2.5Y7/3) 断：黒(2.5Y2/1)	3mm 以下の白色小石を多量含む	
24	26	弥生土器 高杯	ＳＲ01-1	口縁部1/11存 口径18.0cm	外：ナデ．指頭圧痕 内：ナデ	外：橙(5YR7/6) 内：にぶい橙(5YR7/4) 断：褐灰(10YR6/1)	1mm 以下の白色砂粒を少量含む	
25	26	弥生土器 高杯	ＳＲ01-1	脚部ほぼ完存	外：ナデ 内：ハケ目	にぶい黄褐(10YR5/3)	4mm 以下の白色小石をやや多量含む	
26	26	土師器 甕	ＳＲ01-1	口縁部1/4存 口径27.0cm	外内：ナデ．ハケ目	外：褐灰(10YR4/1) 内：にぶい黄橙(10YR6/3) 断：にぶい赤褐(5YR5/3)	4mm 以下の白色小石を少量含む	
27	27	土師器 甕	ＳＲ01-1	口縁部1/24存 口径19.6cm	外：横ナデ．指押さえの後ハケ目 内：横ナデ．指押さえ	外断：明赤褐(2.5YR5/6) 赤黒(2.5YR1.7/1) 内：赤黒(2.5YR2/1)	2mm 以下の白色砂粒を多量含む	
28	27	土師器 甕	ＳＲ01-1	頸部1/8存	外：横ナデ 内：横ナデ．ハケ目	にぶい黄褐(10YR5/3)	6.5mm 以下の白・茶色小石を少量含む	
29	27	土師器 甕	ＳＲ01-1	口縁部1/13存 口径16.4cm	外：横ナデ．ハケ目 内：ナデ．指頭痕	外：黒褐(10YR3/1) 内：暗灰黄(2.5Y5/2) 断：赤褐(5YR4/6)	2mm 以下の白・茶色砂粒・雲母を少量含む	
30	27	土師器 甕	ＳＲ01-1	口縁部1/17存 口径24.0cm	外内：摩滅のため調整不明	外内：にぶい黄橙(10YR6/4 断：灰黄褐(10YR5/2)	7.5mm 以下の白・茶・灰色小石を多量含む	
31	27	土師器 蛸壺	ＳＲ01-1	口縁部1/12存 口径10.6cm	外：横ナデ．指頭圧痕．ハケ目 内：横ナデ．ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm 以下の赤色砂粒を多量含む	
32	27	土師器 壺	ＳＲ01-1	体部4/5存 口径12.0cm 器高11.9cm	外内：ナデ．ハケ目	灰黄褐(10YR6/2)	5mm 以下の茶・灰色小石を多量含む	底部に穿孔あり
33	27	土師器 壺	ＳＲ01-1	口縁部1/5 存 口径9.9cm	外内：横ナデ．ハケ目	外内：にぶい黄(2.5YR6/3) 断：にぶい黄(2.5YR6/3) 黄灰(2.5YR5/1)	3mm 以下の白色小石を多量含む	外面に黒斑が見られる

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
34	27	土師器 皿	ＳＲ01-1	口縁部1/5存 口径18.0cm 器高 2.4cm 底径14.0cm	外：横ナデ 内：横ナデ．ミガキ	外断：黄灰(2.5Y7/2) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	0.1mm 以下の黒・茶色砂粒を少量含む	内面に赤色顔料塗布
35	27	土師器 皿	ＳＲ01-1	口縁部1/20存 口径22.0cm	外内：ナデ	橙(5YR7/6)	2mm 以下の白・灰色砂粒を少量含む	
36	28	土師器 皿	ＳＲ01-1	底部1/8存 底径16.2cm	外内：摩滅のため調整不明	外内：にぶい赤褐(2.5YR5/4) 断：にぶい赤褐(2.5YR5/4) にぶい黄橙(10YR6/3)	3mm 以下の白色小石を多量含む	
37	28	土師器 高杯	ＳＲ01-1	脚部ほぼ完存	外：ケズリ．ヘラケズリ 内：ナデ．ハケ目	浅黄(5Y7/3)	3mm 以下の白色小石を極少量含む	外：各面取り上端部にヘラで押さえた跡がみられる
40	28	弥生土器 支脚	ＳＲ01-1	下部 器高14.7cm	外内：ナデ．指頭痕	外内：灰オリーブ(5Y6/2) 断：黒(7.5YR1.7/1)	2mm 以下の白色砂粒を多量，雲母を少量含む	
41	28	土師器 蛸壺	ＳＲ01-1	底部ほぼ完存 口径12.4cm 器高26.3cm 底径 3.6cm	外：指押さえ後ハケ目 内：指押さえ．ハケ目	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：浅黄橙(10YR8/3) 断：灰白(10YR7/1)	3mm 以下の白色小石を多量，雲母を少量含む	底部に穿孔あり
42	29	土師器 蛸壺	ＳＲ01-1	頸部1/2存	外：ナデ．ハケ目 内：ナデ．指頭痕	灰白(2.5Y8/1)	2mm 以下の白色砂粒を多量，雲母を少量含む	
43	29	須恵器 甕	ＳＲ01-1	口縁部1/20存 口径24.8cm	外内：回転ナデ	青灰(5PB6/1)	1mm 以下の白色砂粒を少量含む	
44	29	須恵器 甕	ＳＲ01-1	口縁部1/4存 口径22.0cm	外内：回転ナデ	外：灰白(N7/) 内：暗青灰(5PB4/1) 断：灰(N5/)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	外面に自然釉付着
45	29	須恵器 甕	ＳＲ01-1	体部1/5存 口径22.0cm	外：回転ナデ．タタキ目 内：回転ナデ．同心円文	外：灰(N4/) 内：青灰(5PB5/1) 断：暗赤灰(7.5R4/1)	1.8 mm以下の白色砂粒を少量含む	外面に自然釉付着
46	29	須恵器 杯蓋	ＳＲ01-1	口縁部1/6存 口径11.0cm	外内：回転ナデ	明青灰(5PB7/1)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	
47	29	須恵器 杯蓋	ＳＲ01-1	口縁部1/8存 口径12.5cm	外内：回転ナデ	外：灰白(N7/) 内断：明紫灰(5P7/1)	1mm 以下の黒色砂粒を含む	外面に自然釉付着
48	29	須恵器 杯蓋	ＳＲ01-1	口縁部1/4存 口径14.3cm	外内：回転ナデ	外：灰(N5/) 内断：灰(N6/)	1mm 以下の白色砂粒を少量含む	
49	29	須恵器 杯	ＳＲ01-1	口縁部1/18存 口径15.0cm	外内：回転ナデ	外：明オリーブ灰(2.5GY7/1) 内断：灰(N6/)	1mm 以下の灰色砂粒を少量含む	外面に自然釉付着
50	29	須恵器 杯	ＳＲ01-1	底部1/4存 底径8.3cm	外：回転ナデ．ケズリ 内：回転ナデ	灰白(5Y7/1)	2mm 以下の白色小石を多量含む	
51	30	須恵器 杯	ＳＲ01-1	底部1/3存 底径9.5cm	外：回転ナデ．貼り付け高台 内：回転ナデ	灰白(5Y8/1)	3.5mm 以下の白色小石を少量含む	
52	30	須恵器 高杯	ＳＲ01-1	脚部1/8存 底径13.2cm	外内：回転ナデ	外断：灰(N6/) 内：灰(N7/)	1mm 以下の白色砂粒を少量含む	内面に自然釉が点々と付着

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
53	30	土師器 杯	ＳＲ01-1	口縁部1/5存 口径11.0cm	外内：回転ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	1.3mm 以下の白・茶色砂粒を少	
54	30	土師器 杯	ＳＲ01-1	口縁部1/10存 口径13.0cm	外内：回転ナデ	灰黄(2.5Y7/2)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	
55	30	土師器 杯	ＳＲ01-1	底部1/4存 底径6.4cm	外内：摩滅のため調整不明	灰白(7.5YR8/2)	1mm 以下の赤色砂粒を含む	円盤状高台 焼成不良
56	30	土師器 皿	ＳＲ01-1	底部1/2存 底径7.7cm	外：回転ナデ．ヘラ切り 内：回転ナデ	外：明褐灰(7.5YR7/2) 内断：にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm 以下の白色砂粒を多量含む	
57	30	土師器 土釜	ＳＲ01-1	鍔部1/20存	外内：ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	3mm 以下の白色小石を多量含む	外面に煤付着
58	30	須恵器 杯	ＳＲ01-1	底部完存 底径6.2cm	外：回転ナデ．回転ヘラ切り 内：回転ナデ	灰白(2.5Y7/1)	1mm 以下の黒色砂粒を少量含む	
59	30	須恵器 杯	ＳＲ01-1	底部1/3存 口径14.8cm 器高 5.2cm 底径 7.7cm	外：回転ナデ．ヘラ切り 内：回転ナデ	青灰(5PB5/1)	1mm 以下の白色砂粒を含む	
60	30	黒色土器 (Ａ類)椀	ＳＲ01-1	底部完存 口径15.0cm 器高 6.0cm 底径 7.0cm	外：ナデ．ミガキ（暗文）．貼り付け高台 内：ミガキ(暗文)	外：黒(N1.5/) 灰白(10YR8/1) 内：暗灰(N3/) 断：灰白(10YR8/1)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	
61	31	弥生土器 甕	ＳＲ01-3	頸部1/8存	外：ナデ．タタキ目 内：ナデ．指頭痕	外：灰オリーブ(5Y4/2) 内断：黄褐(2.5Y5/3)	2mm 以下の白色砂粒を多量含む	
62	31	須恵器 杯蓋	ＳＲ01-3	口縁部1/3存 口径17.0cm	外内：回転ナデ	灰(7.5Y6/1)	1mm 以下の白・茶色砂粒を少量含む	
63	－	瓦質土器 焙烙	ＳＲ01	口縁部破片 口径30.0cm	外内：横ナデ	外：暗灰(N3/) 内：灰(7.5Y4/1) 断：灰(7.5Y5/1)	1.5mm 以下の白色砂粒を少量含む	
64	－	肥前 陶胎染付 椀	ＳＲ01	底部1/7存 底径5.4cm	外内：施釉．貫入	外：オリーブ灰(5GY5/1) 内：オリーブ灰(2.5GY5/1) 断：灰(7.5Y5/1) にぶい橙(7.5YR6/4)	精緻	
65	－	肥前 陶胎染付 椀	ＳＲ01	底部1/2存 底径4.6cm	外：施釉．鉄絵？染付？貫入 内：施釉．貫入	外：オリーブ灰(5GY6/1) 灰オリーブ(5Y6/2) 内：灰(10Y6/1) 断：灰(N5/)	1mm 以下の白色砂粒を少量含む	
66	－	京焼風陶器 椀	ＳＲ01	高台部完存 底径4.6cm	外内：施釉．貫入	外内：浅黄(2.5Y8/4) 断：灰白(2.5Y8/1)	精緻	
67	31	弥生土器 高杯	ＳＤ01	口縁部1/26存 口径28.0cm	外内：ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	1mm 以下の白・黒色砂粒を少量含む	
68	31	弥生土器 甕	ＳＤ01	頸部破片	外内：摩滅のため調整不明	にぶい褐(7.5YR5/4)	2mm 以下の白色砂粒を多量含む	
69	31	土師器 小皿	ＳＤ02	口縁部1/6存 口径8.4cm 器高1.7cm 底径5.8cm	外：回転ナデ．板目 内：回転ナデ	灰白(5Y7/1) 黒(7.5YR2/1)	1mm 以下の黒色砂粒・雲母を少量含む	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
70	31	土師器 椀	ＳＤ03	底部1/4存 底径7.0cm	外内：ナデ	外内：淡橙(5YR8/3) 断：灰白(7.5YR8/1)	1mm 以下の白・茶色砂粒を多量含む	円盤状高台
71	31	土師器 椀	ＳＤ03	高台部ほぼ完存 底径5.4cm	外：ナデ．貼り付け高台 内：ナデ	灰白(10YR8/2)	2mm 以下の白色砂粒を多量含む	
72	31	土師器 椀	ＳＤ03	体部1/4存 口径12.0cm 器高 4.4cm 底径 3.6cm	外内：摩滅のため調整不明	外：明オリーブ灰(2.5GY4/1) 内断：灰白(5Y8/1)	0.5mm 以下の茶・灰色砂粒を少量含む	
73	31	土師器 鍋	ＳＤ03	口縁部1/2存 口径36.0cm	外内：摩滅のため調整不明	外：褐灰(10YR4/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/3) 断：褐灰(10YR5/1)	3mm 以下の白・茶・黒色小石を多量含む	煤付着
74	31	須恵器 杯	ＳＤ04	底部1/5存 底径6.0cm	外内：摩滅のため調整不明	外断：灰白(N7/) 内：灰(N5/)	1.5mm 以下の白色砂粒を少量含む	
75	32	須恵器 杯	ＳＤ04	底部1/7存 底径8.0cm	外：回転ナデ．貼り付け高台 内：回転ナデ	外：灰(N6/) 内断：灰白(N7/)	3.5mm 以下の白色小石を少量含む	
76	32	土師器 土鍋	ＳＫ01	口縁部1/7存 口径25.7cm	外：ナデ後指頭痕 内：横ナデ	外：黒褐(2.5YR3/1) にぶい橙(7.5YR7/4) 内断：にぶい橙(7.5YR7/4)	1.5mm 以下の白・茶色砂粒と雲母を少量含む	口縁部穿孔あり 二次焼成
77	32	土師器 小皿	ＳＫ02	口縁部1/3存 口径8.1cm 器高1.6cm 底径4.7cm	外：回転ナデ．ヘラ切り 内：回転ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	1mm 以下の白・赤色砂粒を含む	
78	32	土師器 土鍋	ＳＫ02	口縁部破片	外内：ナデ	外：褐灰(10YR4/1) 内断:にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm 以下の白色砂粒を少量含む	外面に煤付着
79	32	土師器 甕	ＳＫ02	口縁部1/6存 口径44.0cm	外：ナデ．指頭痕 波状文 内：ナデ．板ナデ	外：にぶい黄橙(10YR7/3) にぶい橙(5YR7/4) 内：にぶい橙(7.5YR7/4) にぶい赤褐(5YR5/4) 断：にぶい黄橙(10YR7/3)	4mm 以下の白・茶色小石を多量,1mm以下の雲母を多量含む	
80	32	瓦質土器 羽釜	ＳＫ02	口縁部1/8存 口径26.0cm	外内：ナデ	外：灰(N4/) 内：灰(5Y5/1) 断：にぶい褐(7.5YR5/3)	2mm 以下の白・灰色砂粒を少量含む	二次焼成
81	32	瓦質土器 羽釜	ＳＫ02	口縁部1/8存 口径23.6cm	外：ナデ 内：ナデ．指頭痕	外断：灰(10Y4/1) 内：灰(N6/)	1mm 以下の黒色砂粒を少量含む	二次焼成
82	32	備前 摺り鉢	ＳＫ02	口縁部1/11存 口径30.0cm	外：横ナデ．凹線２条 内：横ナデ．卸目10条/2.6cm	外：にぶい橙(2.5YR6/4) 橙(2.5YR7/6) 内：橙(2.5YR7/6) 断：橙(2.5YR6/6)	1.5mm 以下の白色砂粒を少量含む	
83	32	備前 摺り鉢	ＳＫ02	口縁部1/8存 口径32.0cm	外：横ナデ．凹線２条 内：横ナデ．卸目10条/2.2cm	外：灰赤(2.5YR4/2) 赤褐(10R5/4) 内：にぶい赤褐(2.5YR5/4) 断：灰(N5/) にぶい赤褐(2.5YR5/4)	3mm 以下の白色小石を少量含む	
84	33	備前 摺り鉢	ＳＫ02	口縁部1/12存 口径30.6cm	外：回転ナデ．凹線２条 内：回転ナデ．卸目11条/2.8cm	橙(2.5YR6/6) 赤灰(2.5YR5/1)	2mm 以下の白・黒色小石を含む	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
85	33	備前 摺り鉢	ＳＫ02	口縁部1/6存 口径19.0cm	外：回転ナデ．凹線1条 内：回転ナデ．卸目12条/2.1cm	明赤褐(2.5YR5/6)	2mm 以下の黒色砂粒を含む	
86	33	土師器 羽釜	ＳＫ02	耳部ほぼ完存	外：ナデ．指頭痕 内：ナデ．ハケ目	外：黒(7.5YR2/1) にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙(5YR6/6) にぶい橙(7.5YR7/4) 断：にぶい橙(5YR7/4)	2mm 以下の白色小石を多量，2mm以下の雲母を少量含む	
87	33	京焼風陶器 椀	ＳＫ02	高台部ほぼ完存 底径5.0cm	外：施釉 内：施釉．貫入	外断：灰白(2.58/1) 内：灰黄(2.5Y7/2)	1mm 以下の白色砂粒を少量含む	
88	33	京焼風陶器 椀	ＳＫ02	高台部破片 底径5.0cm	外内：施釉．貫入	外内：浅黄(2.5Y8/3) 断：浅黄(2.5Y8/2)	精緻	
89	33	京焼風陶器 椀	ＳＫ02	底部ほぼ完存 底径5.1cm	外内：施釉．貫入	外：灰白(N8/) 内：浅黄(2.5Y8/3) 断：灰白(5Y8/2)	精緻	
90	33	京焼風陶器 椀	ＳＫ02	高台部2/3存 底径6.0cm	外：施釉 内：施釉．貫入	外内：浅黄(2.5Y7/4) 断：灰白(2.5Y8/2)	精緻	
91	33	唐津 刷毛目椀	ＳＫ02	底部ほぼ完存 底径4.6cm	外内：施釉．刷毛目	外：褐灰(7.5YR4/1) 灰白(5Y8/2) 内：褐灰(10YR4/1) 灰白(5Y8/2) 断：赤褐(10R5/4)	精緻	
92	33	肥前系染付 椀	ＳＫ02	底部2/3存 底径4.5cm	外：施釉．染付 内：施釉	外：明緑灰(7.5GY8/1) 藍 内：灰白(5GY8/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
93	34	肥前系染付 椀	ＳＫ02	底部2/3存 底径4.0cm	外：施釉．染付．圏線 内：施釉	外：灰白(5GY8/1) 藍 内：灰白(5GY8/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
94	34	肥前 陶胎染付 壺	ＳＫ02	底部1/2存 底径5.6cm	外：施釉．底部無釉．染付 内：施釉．無釉	外：灰(N5/) 褐灰(7.5YR6/1) 緑灰(10GY6/1) 青灰(5B6/1) 内：明緑灰(7.5GY7/1) にぶい橙(5YR6/4) 断：にぶい橙(5YR6/4)	精緻	
95	34	肥前 陶胎染付 香炉	ＳＫ02	口縁部1/8存 底部完存 口径12.1cm 器高 9.0cm 底径 7.1cm	外：施釉．染付．貫入 内：無釉	外：明オリーブ灰(5GY7/1) 灰褐(7.5YR4/2) 藍 内：灰褐(7.5YR5/2) 断：灰白(N7/)	精緻	
96	34	肥前系染付 皿	ＳＫ02	底部1/2存 底径6.0cm	外：施釉.染付(連弁)．圏線 内：施釉．染付(花)	外内：明緑灰(10GY8/1) 青灰(5B5/1) 断：灰白(N8/)	精緻	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
97	34	瀬戸・美濃系	ＳＫ02	破片	外内：施釉．刷毛目	外：灰白(7.5Y8/1) オリーブ灰(10Y4/2) 黒(N2/) 内：灰白(N8/) 灰(N6/) 断：灰(N5/)	精緻	
98	34	磁器 椀	ＳＫ02	底部1/3存 底径4.6cm	外：施釉 内：施釉．蛇ノ目釉剝ぎ．砂目	外内無釉：灰白(10Y8/1) 外内釉：明緑灰(10GY7/1) 断：灰白(N8/)	1mm以下の黒色砂粒を多量含む	
99	34	陶器 鉢	ＳＫ02	高台部1/3存 底径8.4cm	外内：回転ナデ	外：明褐(7.5YR5/6) 内：暗赤灰(5R4/1) 断：赤褐(2.5YR4/6)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
100	34	陶器 壺	ＳＫ02	底部完存 底径5.2cm	外内：回転ナデ	外：にぶい橙(2.5YR6/4) 内断：にぶい橙(5YR7/4)	0.8mm以下の白・茶色小石を少量含む	
101	35	陶器 壺	ＳＫ02	底部ほぼ完存 底径6.8cm	外内：回転ナデ	外：赤褐(10R4/4) にぶい赤褐(2.5YR5/4) 内断：にぶい橙(2.5YR6/4)	0.5mm以下の茶色小石を少量含む	
103	35	肥前系染付 皿	ＳＫ03	口縁部1/12存 口径20.9cm	外：施釉 内：施釉．染付	外：灰白(5GY8/1) 内：灰白(5GY8/1) 暗青灰(5BG4/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
104	35	肥前系染付 椀	ＳＫ03	口縁部1/4存 底部1/3存 口径11.3cm 器高 6.0cm 底径 3.8cm	外：施釉．染付 内：施釉	外：灰白(5GY8/1) 青灰(5B6/1) にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰白(5GY8/1) 断：灰白(2.5Y8/1)	精緻	
105	35	土師器 大甕	ＳＫ04・05	口縁部1/6存 口径99.2cm	外内：横ナデ	外：橙(7.5YR7/6) 内：にぶい橙(5YR6/4) 断：褐灰(7.5YR6/1)	2mm以下の白・茶・灰色砂粒を多量，雲母を微量含む	
106	35	土師器 大甕	ＳＫ04・05	口縁部1/13存 口径90.0cm	外内：横ナデ．ナデ	浅黄(2.5Y8/3)	3mm以下の白・茶・灰色小石を多量含む	
107	35	備前 摺り鉢	ＳＫ04・05	口縁部1/7存 口径28.4cm	外：回転ナデ．凹線2条 内：回転ナデ．沈線1条	暗赤灰(10R3/1)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
108	35	肥前系染付 椀	ＳＫ04・05	底部1/2存 口径10.6cm 器高 5.4cm 底径 3.4cm	外内：施釉．染付	外内：明青灰(10GY7/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
109	36	土師器 甕	ＳＫ06	口縁部1/3存 口径49.0cm	外内：横ナデ	外：橙(5YR7/6) 内断：浅黄橙(7.5YR8/4)	4mm以下の白・茶色小石，2mm以下の雲母を多量含む	
110	36	土師器 甕	ＳＫ06	底部完存 底径32.0cm	外内：ナデ	外：橙(5YR6/6) 内断：灰白(10YR8/2)	2mm以下の白色砂粒・雲母を多量含む	
111	36	陶器 鉢	ＳＫ06	底部1/7存 底径8.2cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ．施釉	外：にぶい褐(7.5YR5/3) 内：褐灰(10YR4/1) 断：赤灰(2.5YR4/1)	2.5mm以下の白・黒色小石を少量含む	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
112	36	備前 摺り鉢	ＳＫ07	口縁部1/5存 口径34.5cm	外：片口．回転ナデ．凹線2～3条 内：回転ナデ．御目10条/ 2.5cm	赤褐(10R4/4)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
113	36	備前 摺り鉢	ＳＫ07	口縁部1/6存 口径31.0cm	外：片口．回転ナデ．凹線2条 内：回転ナデ.卸目10条/2.2cm	外：赤(10R5/6) 赤褐(10R4/3) 内：にぶい赤褐(2.5YR5/4) 断：にぶい赤褐(2.5YR5/4) 赤灰(10R5/1)	2mm以下の白色砂粒を少量含む	
114	36	土師器 甕	ＳＫ07	口縁部破片	外内：横ナデ	外断:にぶい黄橙(10YR7/4) 内：橙(5YR7/6)	1mm以下の白色砂粒・雲母を多量含む	外面に煤付着
115	36	京焼風陶器 椀	ＳＫ07	底部完存 底径4.9cm	外：施釉 内：施釉．貫入	外：灰白(2.5Y8/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/2) 断：浅黄(2.5Y8/3)	0.8mm以下の白色砂粒を少量含む	
116	36	肥前陶胎染付 椀	ＳＫ07	底部完存 底径4.3cm	外：施釉 内：無釉	外：明緑灰(7.5GY8/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/3) 断：灰白(N8/)	0.8mm以下の白色砂粒を少量含む	
117	36	肥前陶胎染付 椀	ＳＫ07	底部1/3存 底径3.8cm	外：施釉．貫入．染付 内：施釉	外：明オリーブ灰(5GY7/1) 内：明オリーブ灰(2.5GY7/1) 断：灰(7.5Y6/1)	精緻	
118	37	肥前系染付 椀	ＳＫ07	底部ほぼ完存 底径3.9cm	外：施釉．染付．圏線 内：施釉	外：青い灰白 群青色 内：青い灰白 断：灰白(N8/)	精緻	「太明年製」(ずし銘)
119	37	肥前系染付 椀	ＳＫ07	底部1/2存 底径4.2cm	外内：施釉.染付	外：灰白(5GY8/1) 内：明緑灰(10GY8/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
120	37	肥前系染付 皿	ＳＫ07	体部1/2存 口径13.0cm 器高 3.5cm 底径 2.3cm	外：体部～高台外面施釉.底部～高台中心無釉．砂目積 内：施釉．染付．蛇ノ目釉剣ぎ砂目積	外：明緑灰(7.5GY8/1) 内：明緑灰(10GY8/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
121	37	肥前系染付 皿	ＳＫ07	高台部1/12存 底径12.2cm	外：施釉 内：施釉．染付	外：明青灰(10BG7/1) 青 内：明青灰(10BG7/1) 断：灰白(N8/)	精緻	
122	38	肥前系染付 皿	ＳＫ07	底部1/6存 底径8.4cm	外：施釉．染付．圏線．丸福 内：施釉．染付．圏線．五弁花文	外内：灰白(5GY 8/1) 暗緑灰(10G4/1) 青灰(10BG6/1) 藍(五弁花文他) 断：灰白(N8/)	精緻	18世紀
123	38	肥前系染付 皿	ＳＫ07	口縁部1/5存 口径11.9cm	外内：施釉．染付	外内：明緑灰(10GY8/1) 藍 断：灰白(N8/)	精緻	
124	38	肥前系染付 瓶	ＳＫ07	体部破片	外：施釉．色絵 内：無釉	外：明緑灰(7.5GY8/1) 内：灰白(2.5Y8/2) 断：灰白(7.5Y8/1)	精緻	
125	38	染付 椀	ＳＫ07	口縁部1/10存 口径12.0cm	外：施釉．染付 内：施釉	外：灰白(10Y7/1) 緑灰(10GY5/1) 内断：灰白(10Y7/1)	精緻	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
126	38	磁器 椀	ＳＫ07	底部完存 底径4.5cm	外：無釉 内：施釉．蛇ノ目釉剝ぎ	外断：灰白(10YR8/2) 内：オリーブ灰(2.5GY6/1) 灰白(10YR8/2)	精緻	
127	38	磁器 色絵(赤絵)皿	ＳＫ07	口縁部1/6存 口径10.4cm 器高 2.4cm 底径 6.2cm	外：施釉 内：施釉．色絵	灰白(N8/)	精緻	
128	38	軒丸瓦	ＳＫ07	瓦頭1/3存 厚さ1.4cm	摩滅のため調整不明	外内：灰(N5/) 断：灰白(N8/)	1.5mm以下の赤色砂粒を少量含む	
129	38	軒平瓦	ＳＫ07	長さ(14.6)cm 厚さ　1.5cm	凹：ヘラ状工具によるナデ 凸：ナデ	凹凸：灰(N5/) 灰白(7.5YR8/2) 断：灰白(7.5YR8/2)	2mm以下の白色砂粒を少量含む	
130	39	平瓦	ＳＫ07	破片 長さ(7.9)cm 厚さ　1.4cm	凹凸：ナデ	凹凸：褐灰(10YR4/1) 断：黒褐(10YR3/1)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
131	39	平瓦	ＳＫ07	1/4存 長さ(12.8)cm 厚さ　1.5cm	凹凸：ナデ	凹：褐灰(10YR6/1) 凸：灰白(10YR7/1) 断：灰白(10YR8/2)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
132	39	平瓦	ＳＫ07	1/2存 長さ(16.9)cm 広端幅20.4cm 厚さ　1.6cm	凹凸：ナデ	凹：黄灰(2.5Y5/1) 凸：灰(5Y6/1) 断：灰白(2.5Y7/1)	m以下の白色砂粒を多量含む	
133	39	平瓦	ＳＫ07	1/2存 長さ(18.4)cm 狭端幅20.0cm 厚さ　1.5cm	凹：ヘラ状工具によるナデ 凸：ナデ	凹凸：暗灰(N3/) 灰白(5Y7/1) 断：灰(N4/)	1.5mm以下の白色砂粒を少量含む	
134	39	平瓦	ＳＫ07	1/2存 長さ(16.9)cm 広端幅21.5cm 厚さ　1.7cm	凹凸：ナデ	凹凸：黄灰(2.5Y6/1) 断：褐灰(10YR4/1) 褐灰(10YR6/1)	0.5mm以下の灰色砂粒を少量含む	
135	40	熨斗瓦	ＳＫ07	1/3存 長さ(10.2)cm 狭端幅 3.6cm 厚さ　1.3cm	凹凸：ヘラ削り	凹凸：黄灰(2.5Y4/1) 断：黄褐(2.5Y5/6)	2mm以下の赤色砂粒を少量含む	
136	40	熨斗瓦	ＳＫ07	2/3存 長さ　10.8cm 狭端幅 3.1cm 厚さ　1.3cm	凹：ナデ 凸：ヘラ削り	凹凸：灰(N5/) 断：灰白(2.5Y8/1)	1mm以下の白色砂粒を多量含む	
137	40	熨斗瓦	ＳＫ07	完存 長さ　11.4cm 広端幅 9.6cm 狭端幅 4.1cm 厚さ　1.3cm	凹：ナデ 凸：ヘラ状工具によるナデ	凹凸：灰(N4/)	0.2mm以下の白色砂粒を少量含む	
138	40	熨斗瓦	ＳＫ07	ほぼ完存 長さ　11.3cm 広端幅10.5cm 狭端幅 2.4cm 厚さ　1.2cm	凹凸：ナデ	凹：灰(N4/) 凸：灰(N4/) 灰白(5Y8/1) 断：浅黄(2.5Y7/3)	1cm以下の白色砂粒を少量含む	
139	40	熨斗瓦	ＳＫ07	ほぼ完存 長さ　10.6cm 広端幅 7.5cm 狭端幅 2.4cm 厚さ　1.8cm	凹凸：ナデ	凹凸：灰(N4/) 灰(N6/) 断：灰白(N8/)	1.5mm以下の灰色砂粒を少量含む	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
140	40	熨斗瓦	ＳＫ07	9/10存 長さ　11.4cm 広端幅 9.3cm 狭端幅 5.0cm 厚さ　1.5cm	凹凸：ナデ	凹凸：灰(N4/) 断：灰白(2.5Y8/1)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
141	40	熨斗瓦	ＳＫ07	4/5存 長さ　11.5cm 狭端幅 2.7cm 厚さ　1.2cm	凹凸：ナデ	凹凸：灰(N4/) 断：灰(N5/)	1.5mm以下の茶色砂粒を少量含む	
142	40	熨斗瓦	ＳＫ07	ほぼ完存 長さ　11.0cm 広端幅10.5cm 狭端幅 2.9cm 厚さ　1.3cm	凹凸：ナデ	凹凸：灰(N4/) 断：灰白(N8/)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
144	41	土師器	ＳＫ09	口縁部1/15存 口径54.0cm	外内：横ナデ	外：灰褐(7.5YR4/2) 黒(N2/) 内断：橙(5YR6/6)	3mm以下の白・黒色小石，1.5mm以下の雲母を多量含む	外面に煤付着 二次焼成
145	41	土師器	ＳＫ09	口縁部1/12存 口径38.0cm	外内：横ナデ	外：黒褐(10YR3/1) 内断:にぶい黄橙(10YR6/4)	2mm以下の白・灰色砂粒を多量，1mm以下の雲母を少量含む	二次焼成
146	41	土師器	ＳＫ09	口縁部1/10存 口径38.0cm	外内：横ナデ	外：黒(10YR2/1) 内断:にぶい黄褐(10YR5/3)	4mm以下の白・茶色小石を多量，0.8mm以下の雲母を少量含む	二次焼成
147	41	土師器 甕	ＳＫ09	口縁部1/9存 口径38.0cm	外内：横ナデ	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3) 断：灰白(10YR8/2)	5mm以下の白・灰色小石を多量，1.5mm以下の雲母を微量含む	
148	41	瓦質土器 羽釜	ＳＫ09	口縁部1/12存 口径20.7cm	外：横ナデ．指頭痕 内：横ナデ．ハケ目後ナデ	外：灰(5Y4/1) 内：灰(5Y5/1) 断：灰オリーブ(5Y5/2)	2mm以下の白・黒色小石を含む	外面に煤付着
149	41	須恵器 壺	ＳＫ09	底部1/4存 底径15.0cm	外：ナデ．タタキ目 内：ナデ．タタキ目．指頭痕	外：暗灰黄(2.5YR3/1) 内：青黒(5BG2/1) 断：灰白(5Y7/1)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	
150	41	備前 摺り鉢	ＳＫ09	体部1/5存 口径31.2cm 器高12.2cm 底径14.0cm	外：片口．回転ナデ．凹線2条 内：回転ナデ．凹線1条．卸目11条/2.7cm	外：にぶい赤褐(2.5YR4/3) 灰(N4/) 褐灰(7.5YR5/1) 内：褐灰(5YR41) 灰赤(2.5YR4/2) 断：灰白(N7/)	2.5mm以下の白・茶・黒色小石を多量含む	
151	41	京焼風陶器 椀	ＳＫ09	底部完存 底径4.8cm	外内：施釉．貫入	外：にぶい黄橙(10YR7/4) 内：浅黄(2.5Y7/4) 断：淡黄(2.5Y8/3)	精緻	
152	42	京焼風陶器 椀	ＳＫ09	底部ほぼ完存 底径4.3cm	外内：施釉．貫入	外：にぶい黄橙(10YR7/3) 灰白(10YR8/1) 内：にぶい黄橙(10YR7/2) 断：灰白(10YR8/2)	精緻	

遺物	図版	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色　調	胎　土	備　考
153	42	唐津 椀	ＳＫ09	高台部1/8存 底径6.0cm	外：施釉 内：施釉．刷毛目	外：灰白(7.5Y7/1) 内：灰オリーブ(5Y4/2) 断：にぶい褐(7.5YR5/2)	精緻	
154	42	唐津 刷毛目椀	ＳＫ09	底部完存 底径4.3cm	外：施釉．高台～底部無釉 内：施釉．刷毛目砂目	外：黒褐(2.5Y3/2) にぶい黄橙(10YR6/3) 内：灰黄褐(10YR4/2) 灰白(2.5Y8/1) 断：灰(5Y5/1)	精緻	
155	42	肥前系染付 皿	ＳＫ09	底部ほぼ完存 底径9.0cm	外：施釉．ナデ 内：施釉．染付	灰白(N8/)	精緻	
156	42	青磁 香炉	ＳＫ09	底部1/3存 底径8.0cm	外：施釉．底部鉄釉．高台部無釉 内：無釉	外：明緑灰(7.5GY7/1) 浅黄橙(7.5YR8/3) 灰黄褐(10YR5/2) 内：灰白(10YR8/2) 断：灰白(5Y8/1)	精緻	
157	42	陶器	ＳＫ09	底部完存 底径5.1cm	外内：回転ナデ	外：赤(10R5/6) 内：赤褐(10R5/4) 断：赤(10R5/8)	精緻	
158	42	陶器 椀	ＳＫ09	底部ほぼ完存 底径4.7cm	外：施灰釉．貫入 内：施灰釉．貫入 胎土目積	外内：浅黄(5Y7/3) 断：浅黄(5Y8/3)	精緻	
159	42	染付 皿	ＳＫ09	底部1/3存 底径8.2cm	外：施灰釉．高台部無釉 内：施釉．染付．貫入	外：灰黄(2.5Y7/2) 灰白(5Y7/1) にぶい黄橙(10YR7/3) 内：灰白(5Y7/2) オリーブ灰(5GY6/1) 断：灰白(5Y7/1)	精緻	
160	－	平瓦	ＳＫ10	7/10存 長さ　23.8cm 広端幅20.6cm 厚さ　1.4cm	凹：ヘラ状工具によるナデ 凸：ナデ	凹：灰白(2.5Y8/1) 褐灰(10YR6/1) 灰白(5Y7/1) 凸：灰白(5Y7/1) 灰白(5Y8/1) 断：灰白(5Y8/1)	2mm以下の白・茶色砂粒を少量含む	
161	42	唐津系 皿	ＳＫ10	底部完存 口径14.0cm 器高 3.9cm 底径 5.1cm	外：施鉄釉 内：施鉄釉．蛇ノ目釉剝ぎ	外内：黒褐(10YR3/2) 断：灰白(10YR7/1)	精緻	
162	－	瀬戸・美濃系 椀	ＳＫ10	底部1/2存 底径5.0cm	外：施釉(上部灰釉・下部鉄釉)貫入 内：施釉．貫入	外：浅黄(2.5Y7/4) 暗赤褐(2.5Y3/2) 内：浅黄(2.5Y7/4) 断：灰白(2.5Y8/2)	1mm以下の白色砂粒を少量含む	

第2表　石器・石製品観察表

遺物番号	図版番号	器　種	出土地点	材　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	備　考
163	43	ナイフ形石器	Ⅲ②　北	サヌカイト	5.6	4.1	1.7	41.80	基部
164	43	翼状剥片	Ⅳ区② 西北部	サヌカイト	4.4	2.7	0.8	8.66	
165	43	横長剥片石核	Ⅱ区 南側たちわり	サヌカイト	2.2	5.3	1.1	11.59	
166	43	楔状石器	Ⅳ区① 第3層	サヌカイト	3.9	2.4	1.0	12.15	
167	43	楔状石器の素材	Ⅳ区① 第2層	サヌカイト	3.4	3.5	0.9	13.46	
168	43	楔状石器	Ⅳ区① 第2層	サヌカイト	4.2	3.6	0.9	16.32	
169	44	打製石斧	表採	サヌカイト	3.3	4.8	0.7	14.35	基部
170	44	打製石斧	Ⅲ区② 南	サヌカイト	6.4	4.8	1.9	60.10	
171	45	打製石斧	表採	サヌカイト	6.1	6.3	1.2	61.00	全体的にやや摩滅
172	44	スクレイパー	Ⅲ②　南	サヌカイト	6.7	4.3	1.0	37.47	
173	45	スクレイパー	表採	サヌカイト	5.8	4.8	1.1	32.94	
174	44	スクレイパー	表採	サヌカイト	4.2	3.4	0.7	12.38	
175	43	スクレイパー	Ⅳ区②　西北部 第3層	サヌカイト	3.0	2.7	0.6	5.20	
176	44	スクレイパー	Ⅱ－①区地山直上	サヌカイト	3.3	5.1	0.9	19.89	
177	46	石鏃	Ⅲ区②地山直上	サヌカイト	2.4	1.6	0.5	1.05	凹基
178	46	石鏃	Ⅱ－①区地山直上	サヌカイト	2.0	1.5	0.4	0.73	凹基. 風化著しい
179	46	石鏃	表採	黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.69	凹基
180	46	石鏃	Ⅳ区①	サヌカイト	2.1	1.3	0.3	0.48	凹基
181	46	石鏃	Ⅳ区②地山直上	サヌカイト	1.7	1.3	0.3	0.58	凹基
182	46	石鏃	Ⅳ区②地山直上	サヌカイト	1.8	0.8	0.3	0.39	凹基
183	46	石鏃	Ⅱ－①区地山直上	サヌカイト	1.7	1.2	0.2	0.34	凹基
184	46	石鏃	ＳＰ54	サヌカイト	2.5	1.8	0.4	1.45	平基
185	45	打製石庖丁	ＳＲ01	サヌカイト	11.1	6.1	1.1	91.29	片面全体がやや摩滅
186	－	砥石	ＳＫ09	砂　岩	9.1	6.0	2.8	215.64	
187	－	砥石	ＳＫ07	砂　岩	8.7	5.8	2.7	203.32	
188	47	砥石	表採	流紋岩	9.4	4.2	3.1	202.38	
189	47	砥石	表採	流紋岩	7.1	5.6	2.4	118.00	
190	47	砥石	表採	流紋岩	9.2	5.2	3.2	242.70	
191	47	砥石	表採	安山岩	5.1	3.9	2.2	55.70	
192	48	石臼	表採	礫　石	径　28.8	－	12.7	9500.00	
193	48	石臼	表採	礫　石	径　32.0	－	10.5	3850.00	
194	48	石臼	ＳＫ07	礫　石	径　32.8	－	12.5	5480.00	

第3表　木製品観察表

遺物番号	図版番号	種　類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　考
38	28	斎串	SR01-1	24.9	0.6	0.4	
39	28	斎串	SR01-1	(23.9)	1.9	0.2	

第4表　金属器観察表

遺物番号	図版番号	種　類	出土地点	長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材　質	備　考
102	35	柄鏡	SK02	(8.6)	8.4	0.20	(46.98)		
143	41	銭	SK08	—	2.4	0.15	—		寛永通寶

土器観察表凡例

残存量　その個体の径を測定した部位と径に対する残存率を記した。

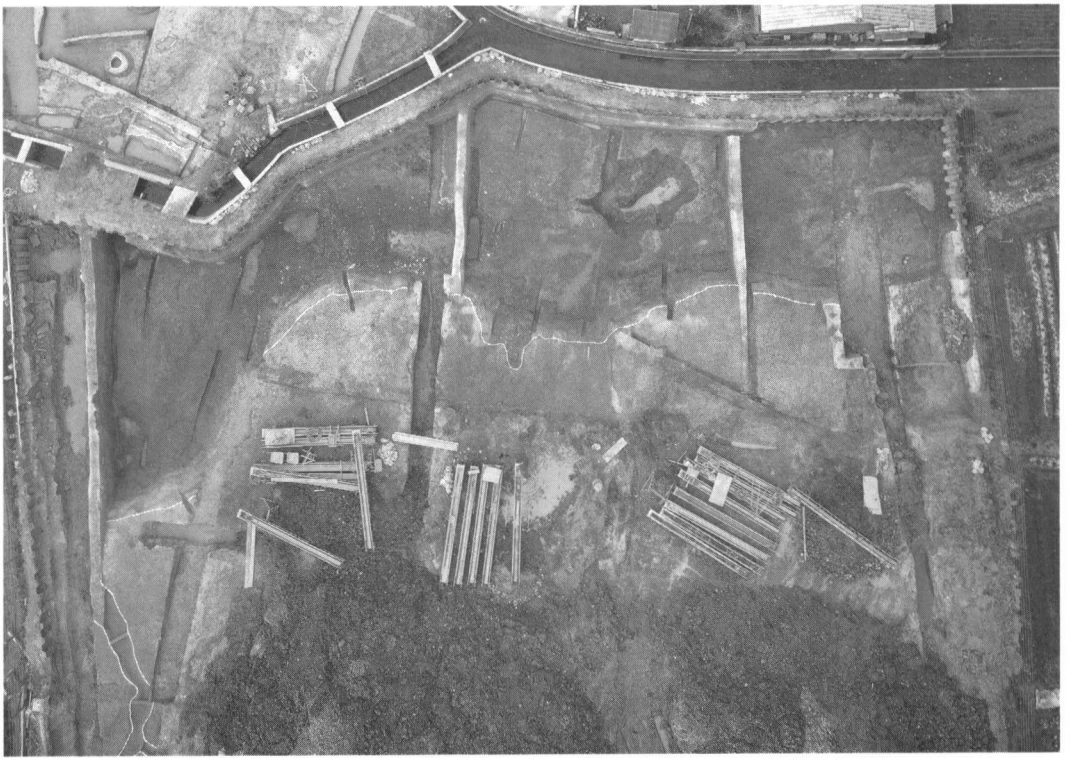
法　量　口径・底径は最大幅を測定した。

色　調　『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 編著）を基準として色名を記載した。

ＪＩＳ該当記号を記載した。

図　　版

1．Ⅰ区全景（航空写真）



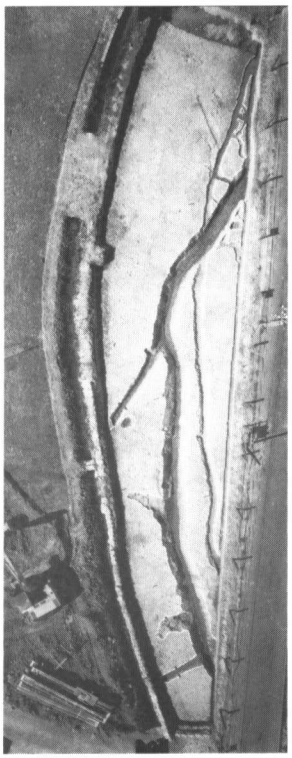
2．Ⅰ区東部全景（航空写真）

図版第 2

1．Ⅱ区全景（航空写真）

2．Ⅲ区北部全景（航空写真）

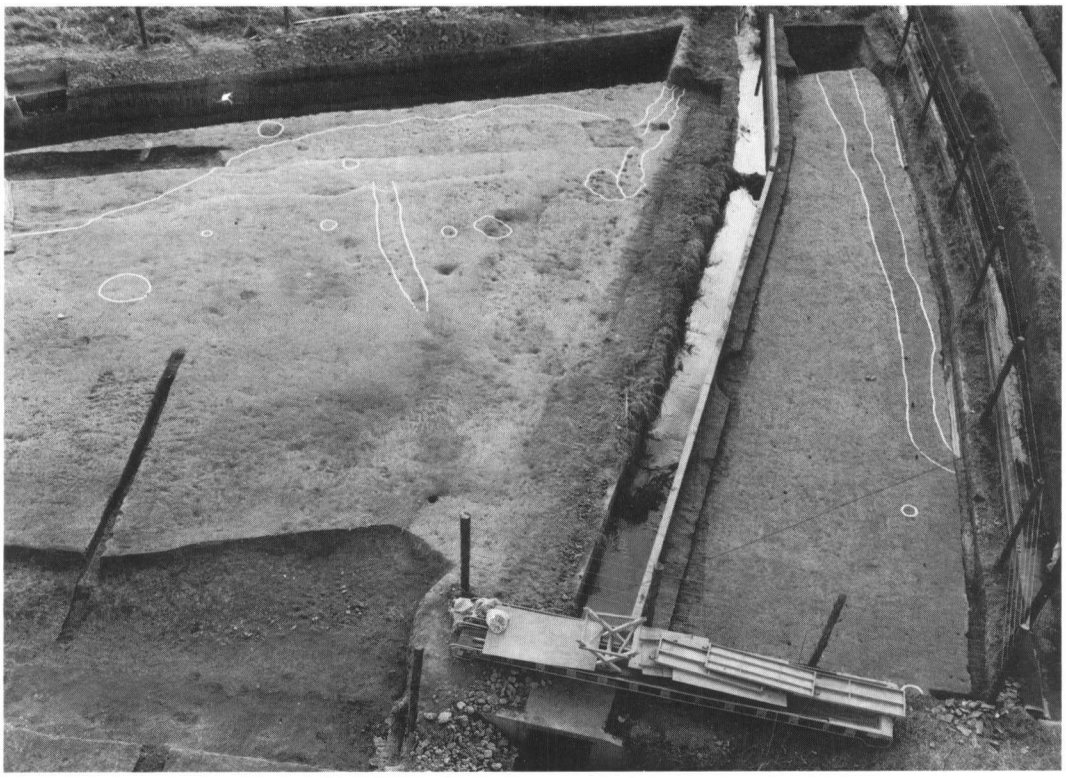
1．Ⅲ区南部全景（航空写真）



2．Ⅳ区西部全景（航空写真）

3．Ⅳ区東部全景（航空写真）

図版第4



1．Ⅰ区西部全景（北から）

2．Ⅱ区北部全景（東から）

1．Ⅱ区南部全景（東から）

2．Ⅳ区西部全景（東から）

図版第６

1．ＳＲ01（南から）

2．ＳＲ01土層堆積状況（南から）

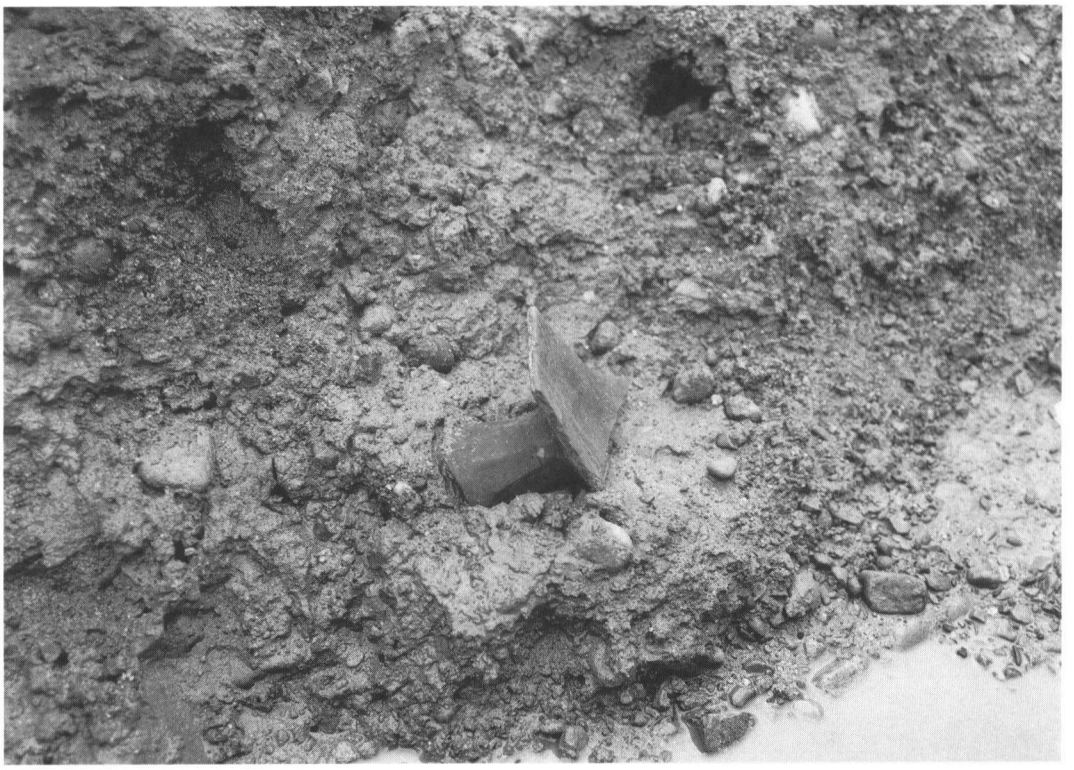
１．ＳＲ01遺物出土状況

２．ＳＲ01遺物出土状況

図版第８

1．ＳＲ01遺物出土状況

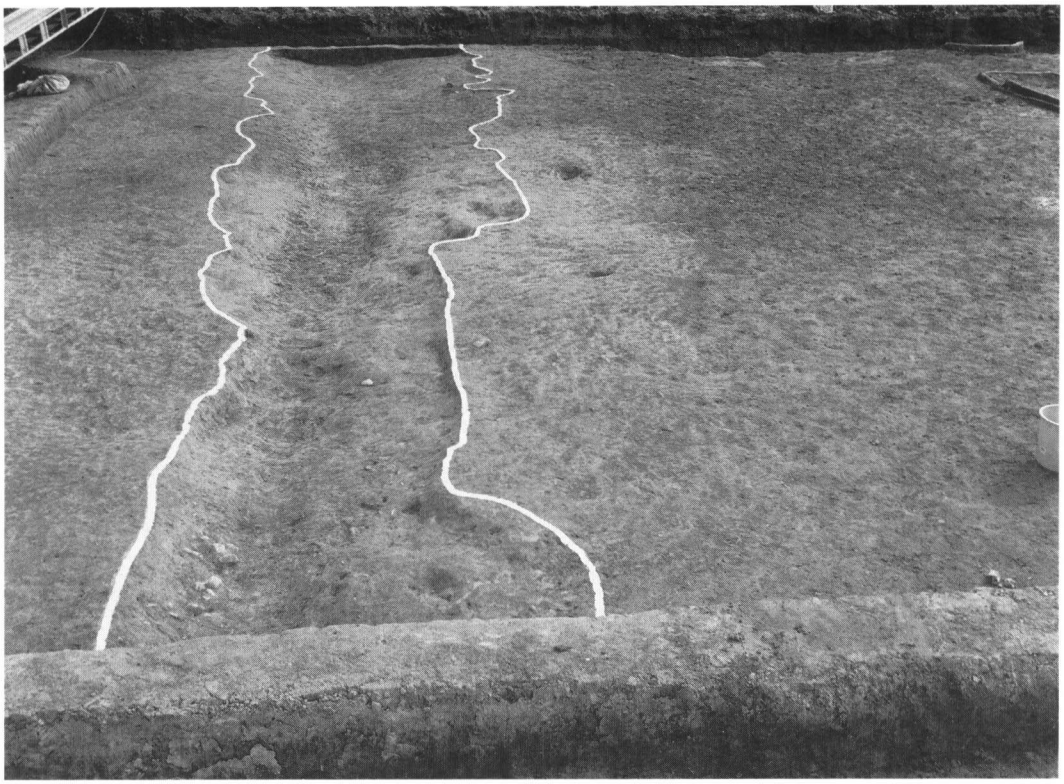
2．ＳＲ01遺物出土状況



１．ＳＲ01遺物出土状況

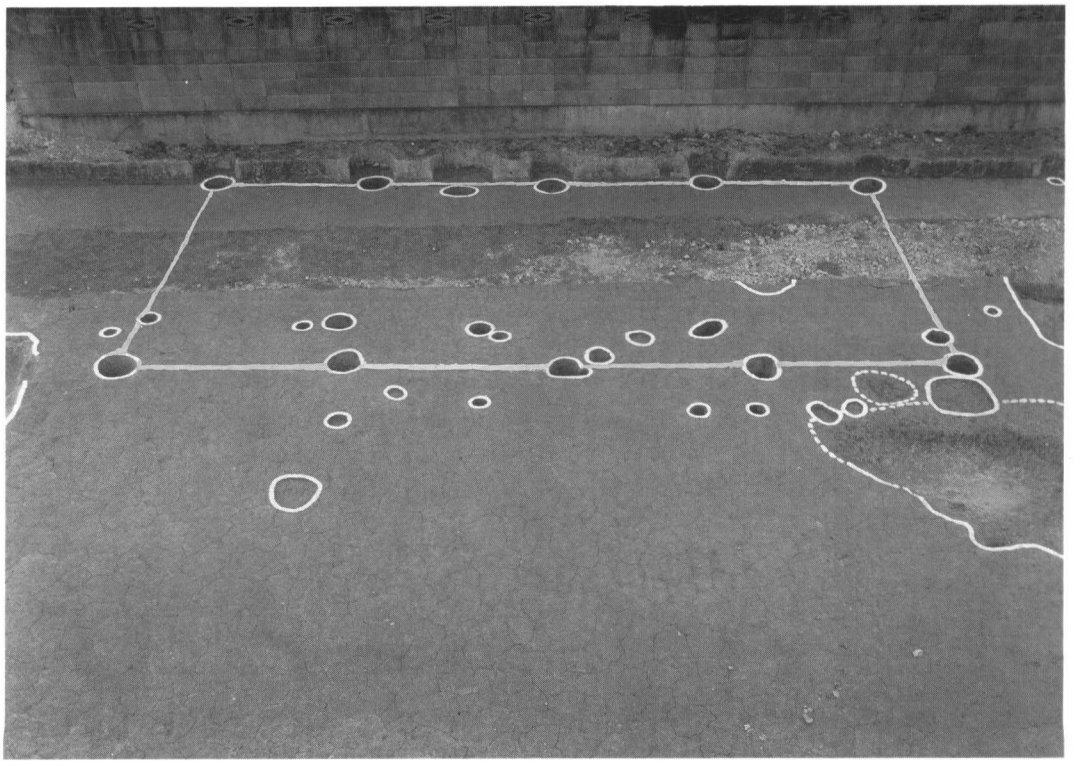
２．ＳＲ01遺物出土状況

図版第10

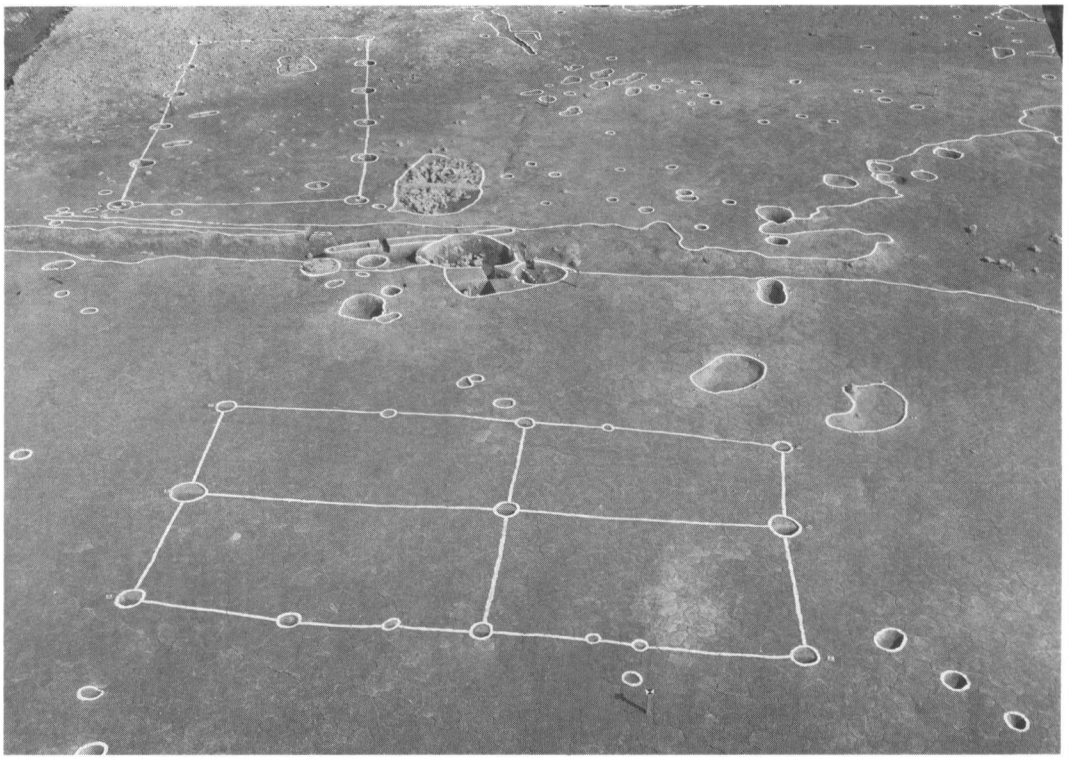


1．ＳＲ02（西から）

2．ＳＲ03（東から）



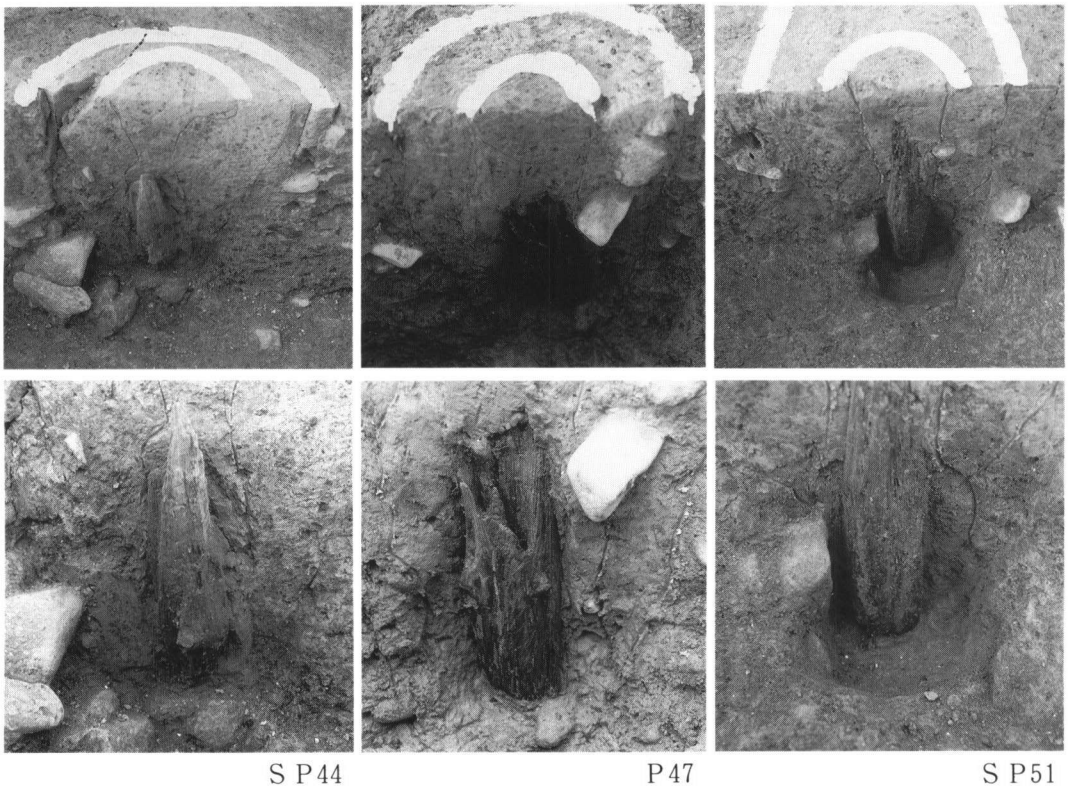
1．ＳＢ02（南から）



2．ＳＢ03・04（西から）

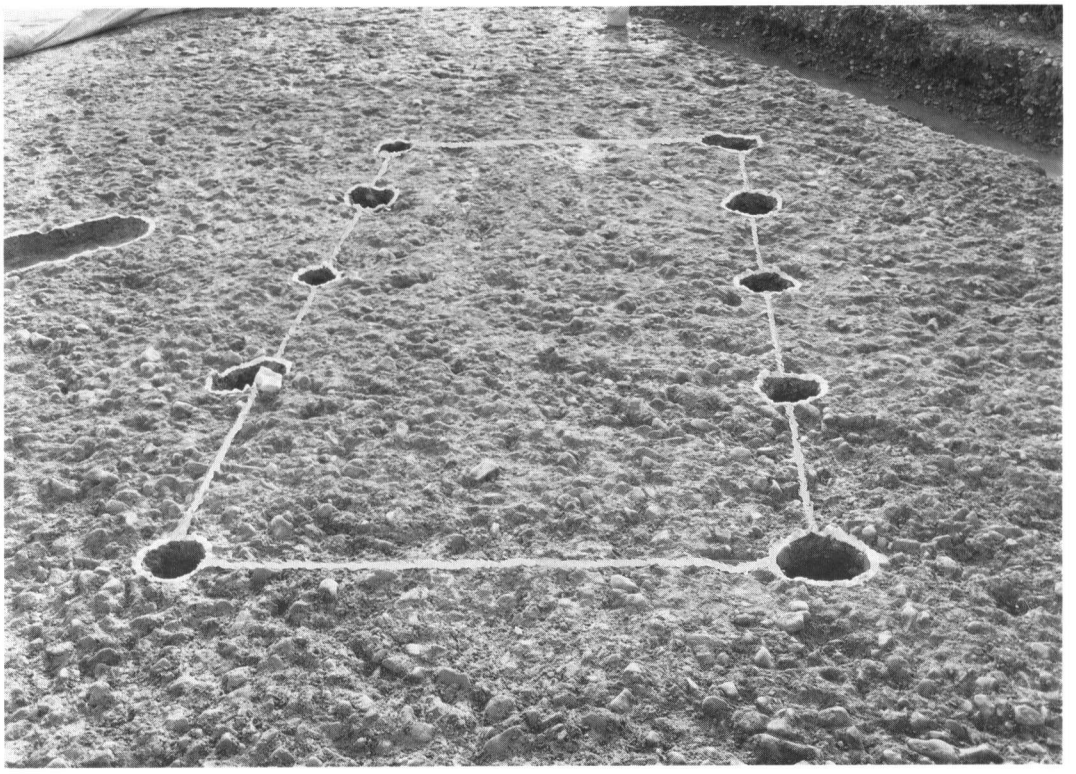
図版第12

1．ＳＢ04（南から）

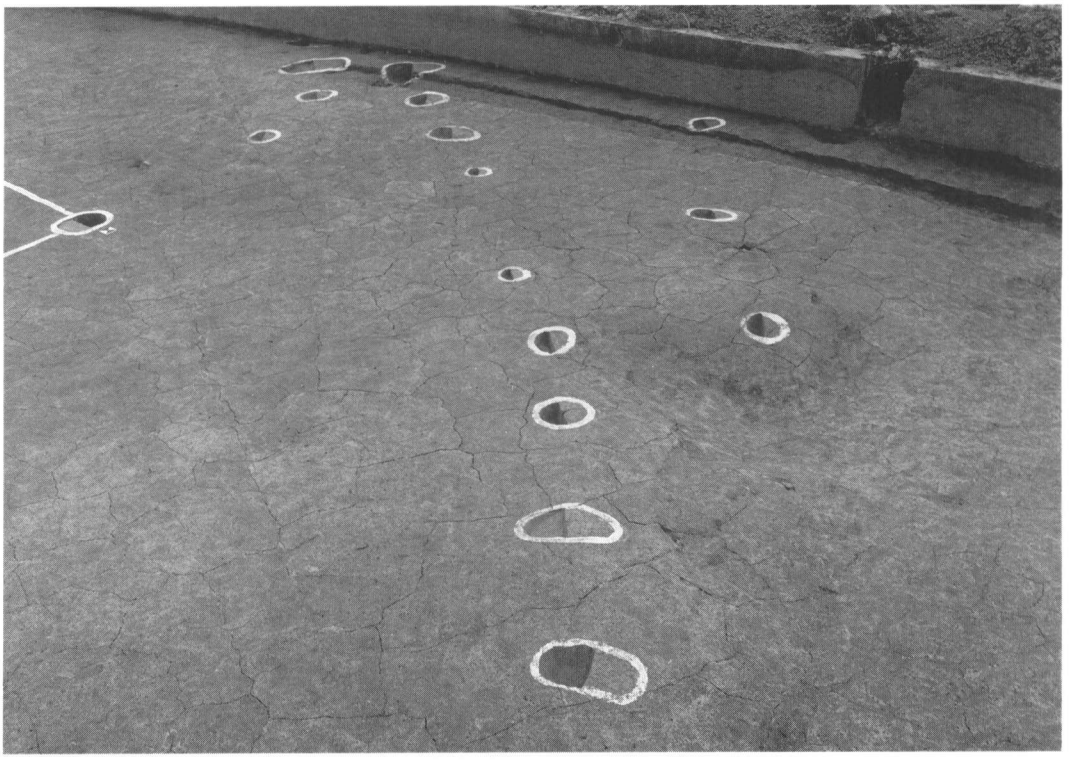


ＳＰ44　　Ｐ47　　ＳＰ51

2．ＳＢ04柱穴

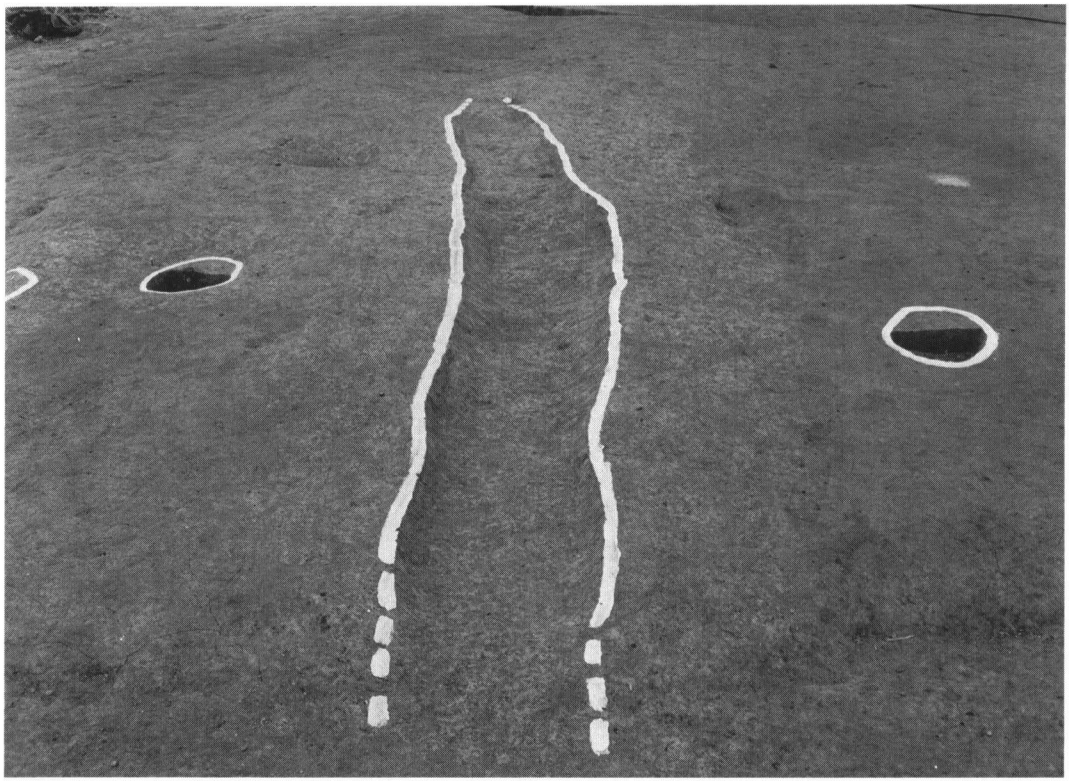


1．ＳＢ05（東から）

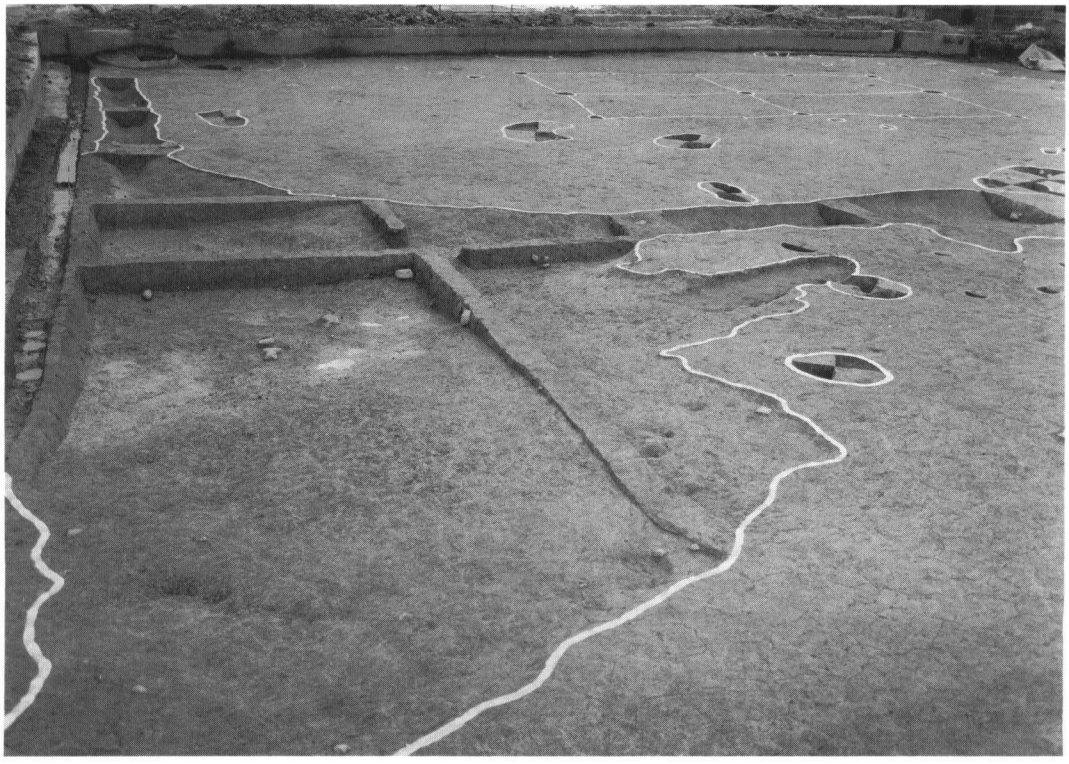


2．ＳＡ01（北から）

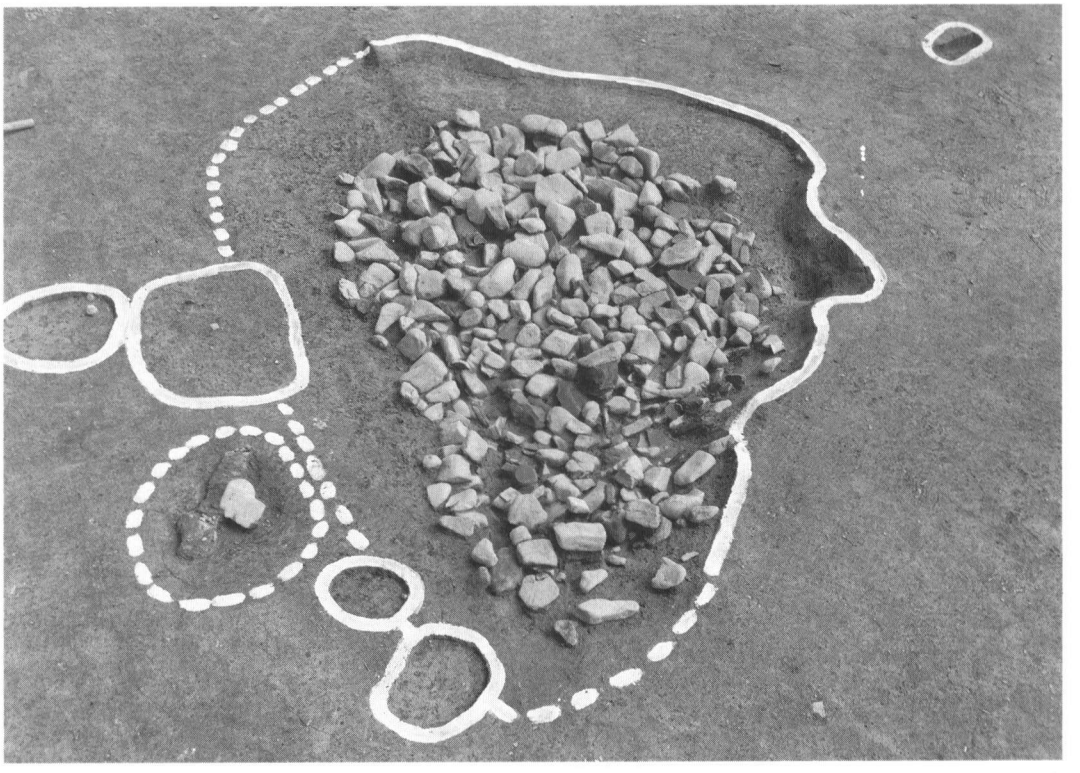
図版第14



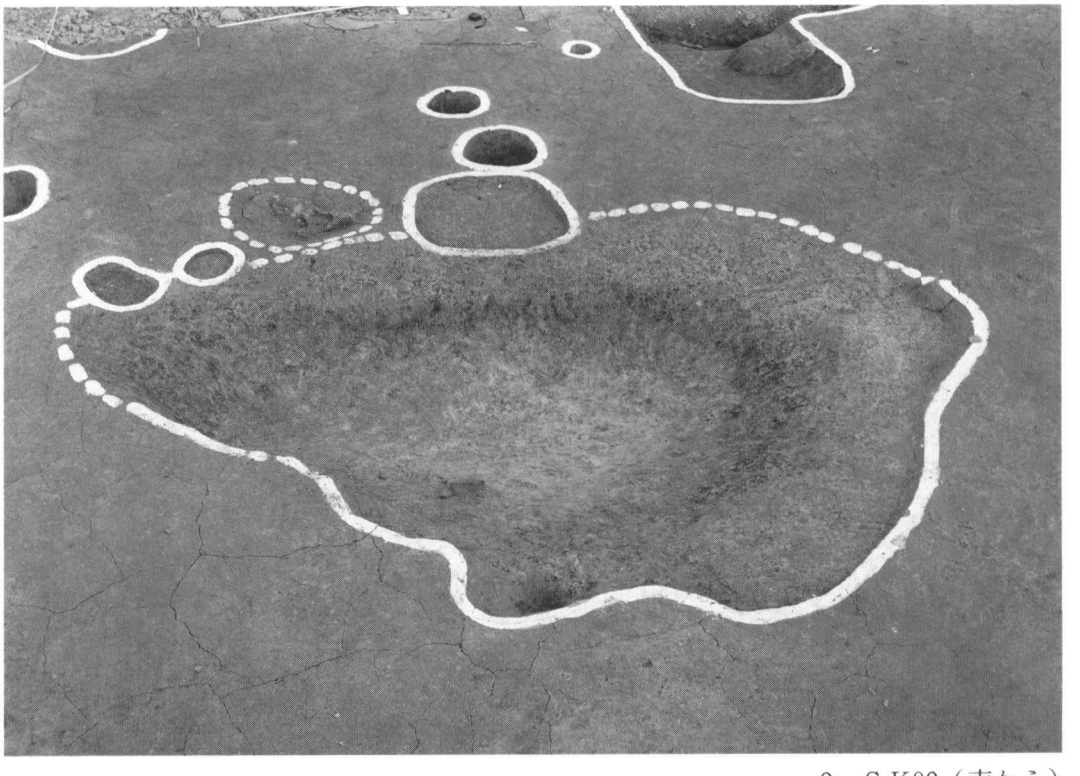
1．ＳＤ01（南から）



2．ＳＤ02・03（東から）



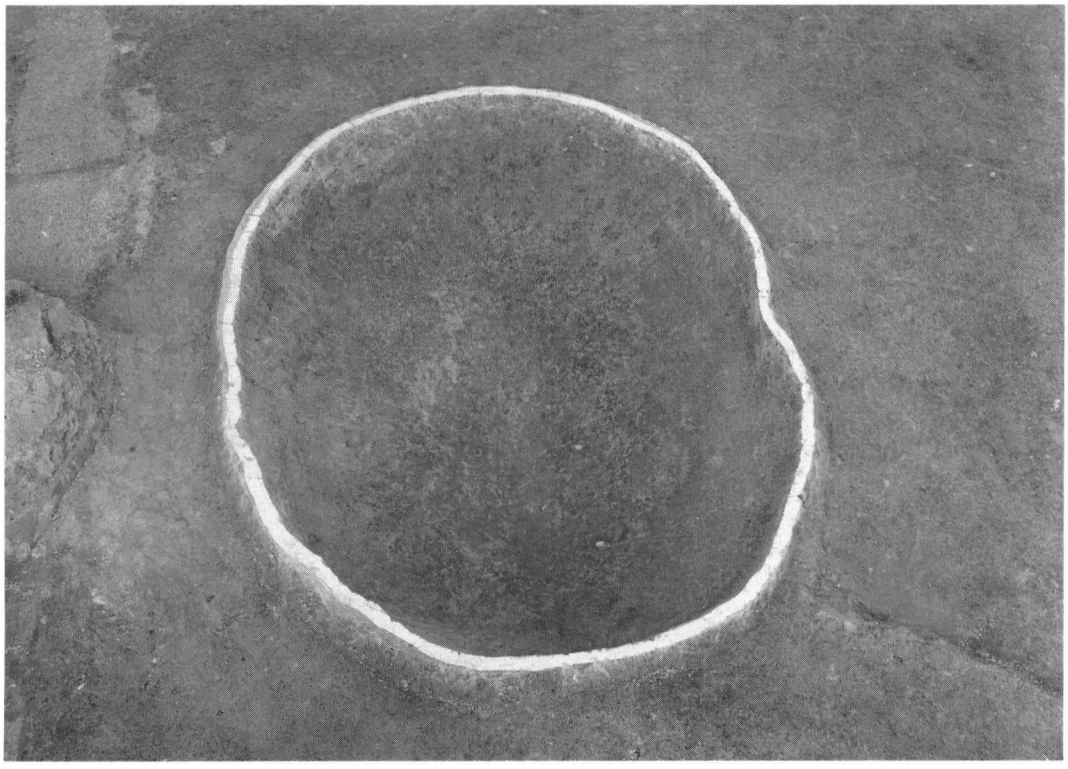
1．ＳＫ02（西から）



2．ＳＫ02（南から）

図版第16

1．ＳＫ02遺物出土状況

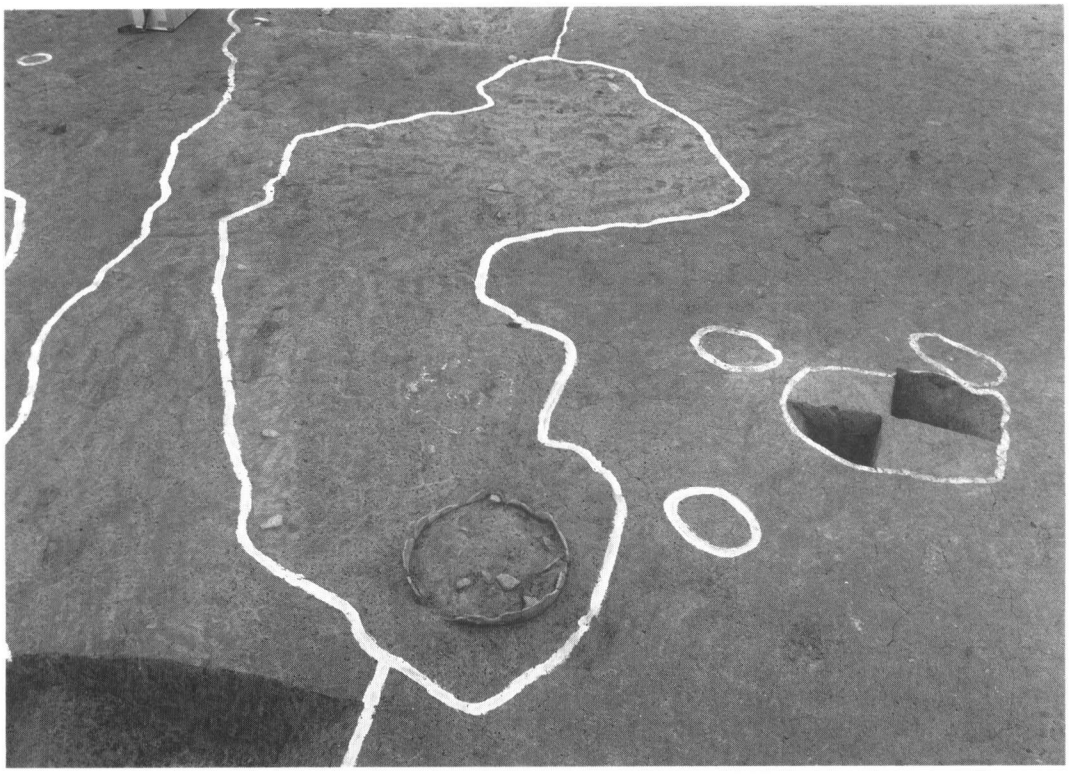


2．ＳＫ03（東から）

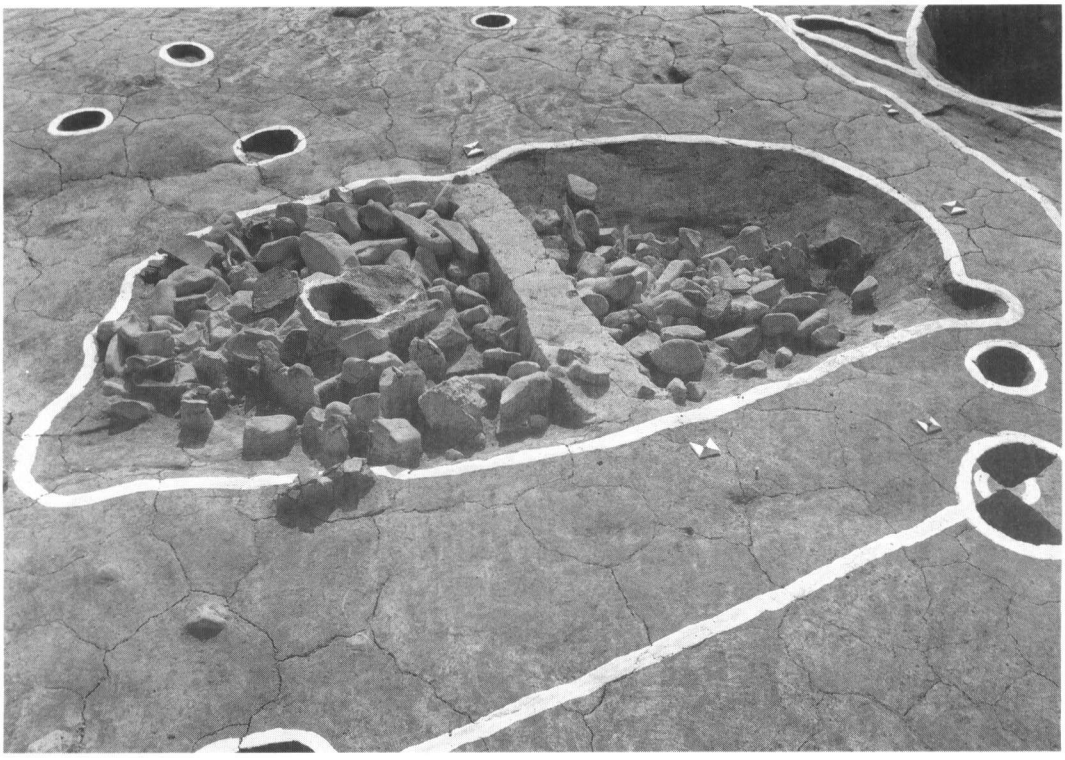
1．ＳＫ04（東から）

2．ＳＫ05（東から）

図版第18



1．ＳＫ06（北から）



2．ＳＫ07（北から）

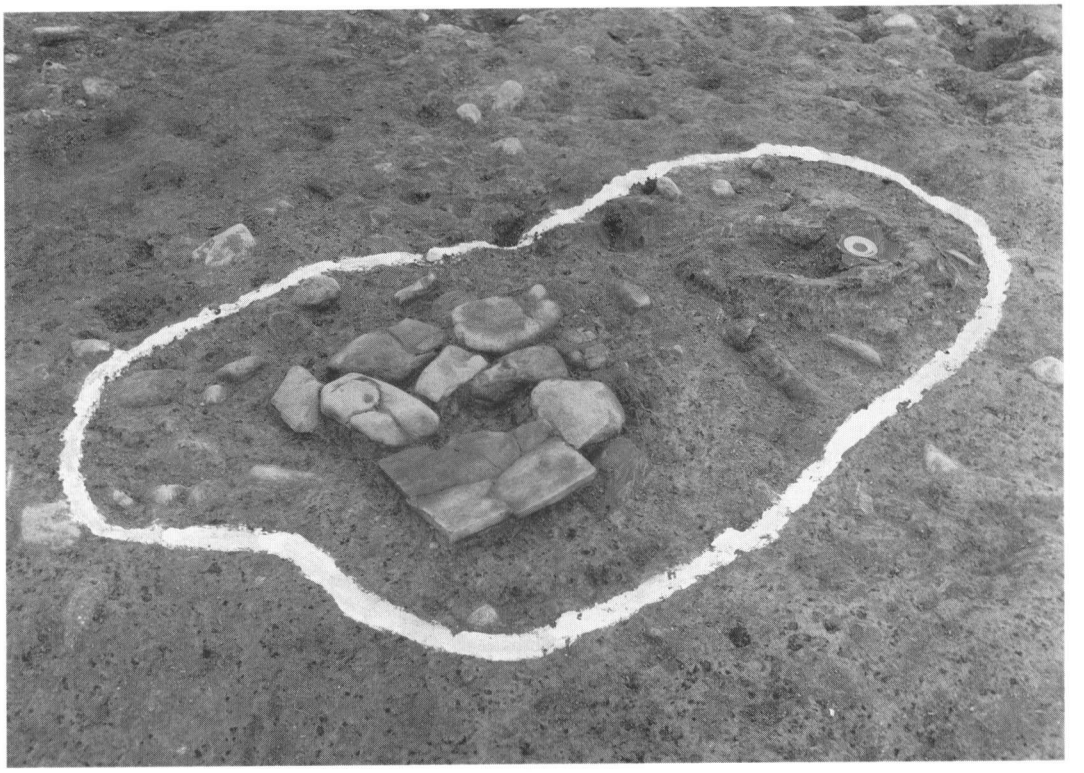
1．ＳＫ08（東から）

2．ＳＫ08遺物出土状況（西から）

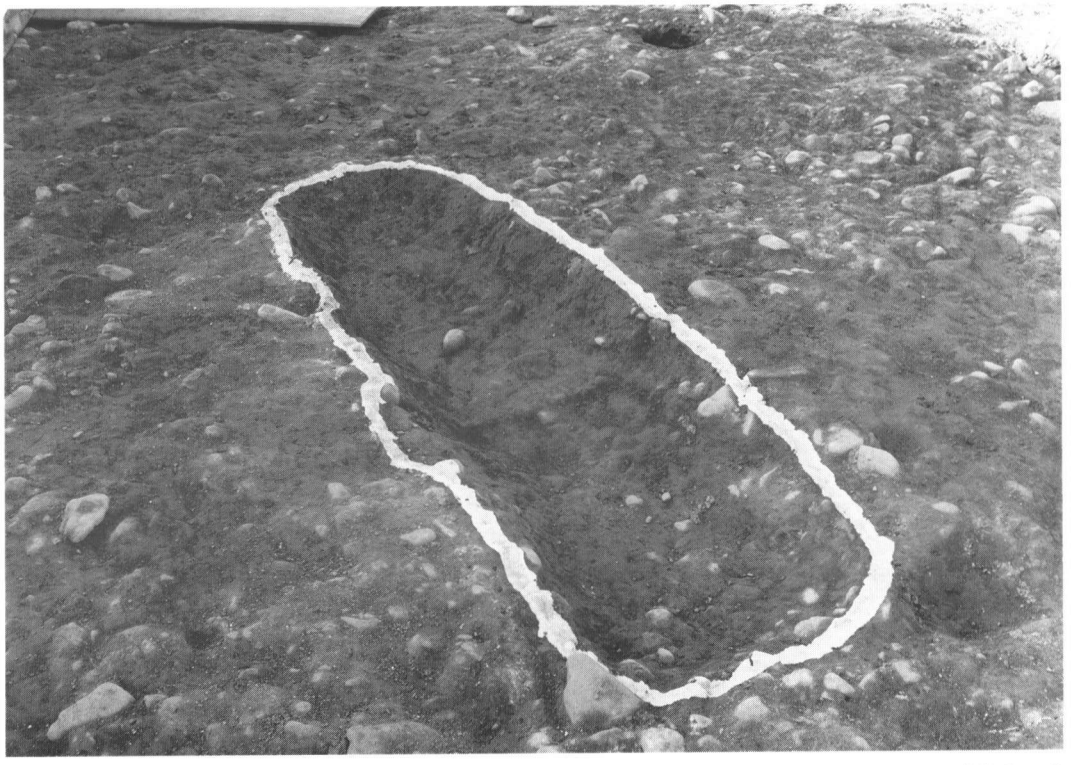
図版第20

1．ＳＫ09（北から）

2．ＳＫ09遺物出土状況（南から）



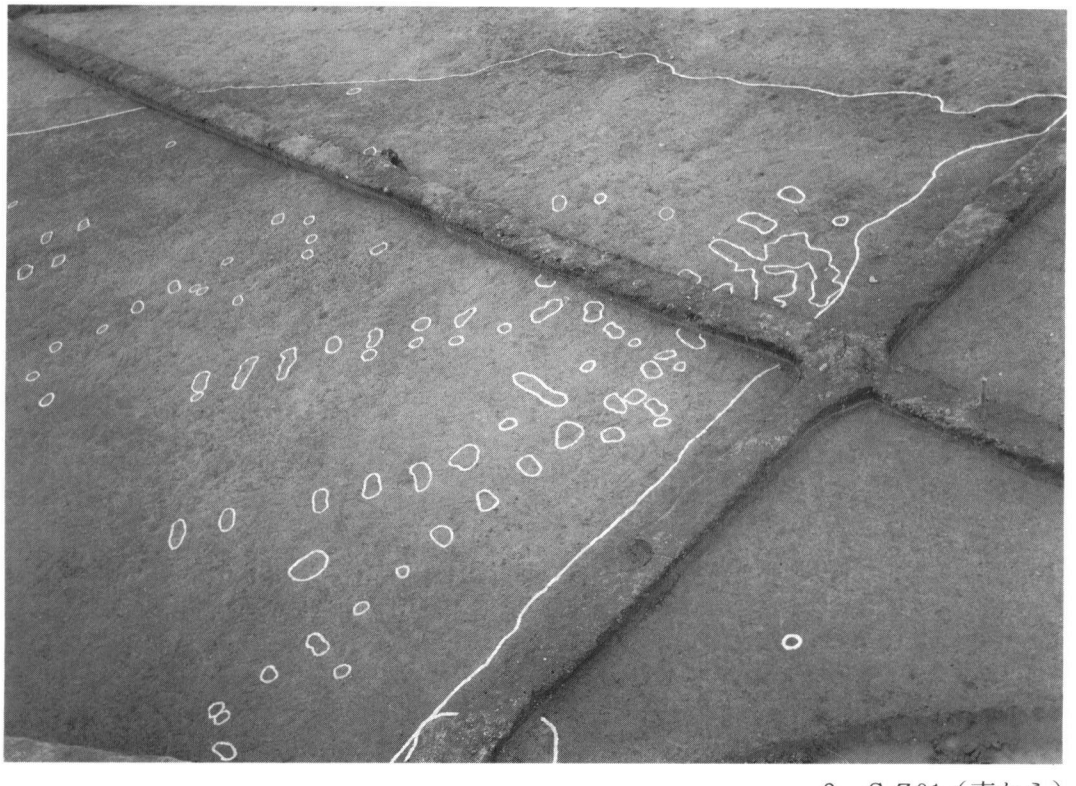
1．ＳＫ10（南から）



2．ＳＫ12（南から）

図版第22

1．ＳＫ13（東から）

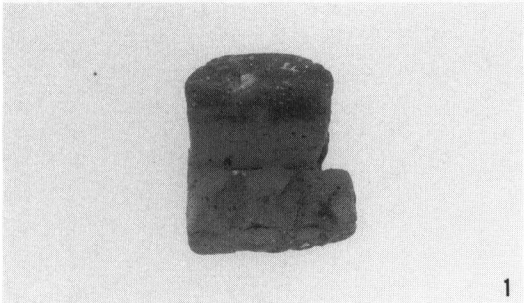


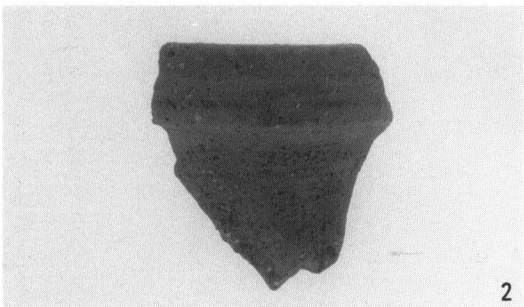
2．ＳＺ01（南から）

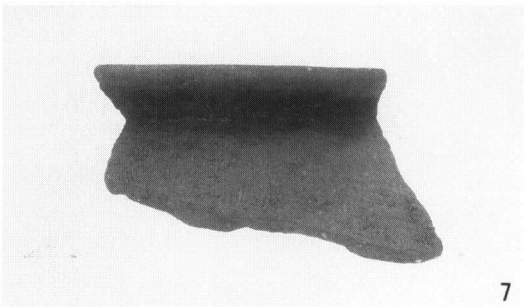
1．ＳＺ02

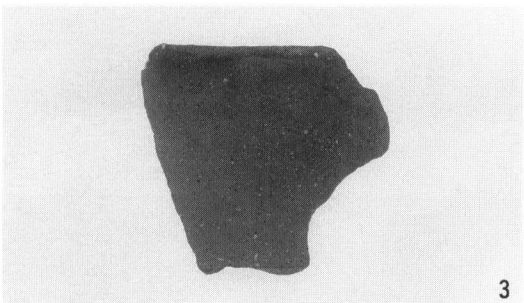
2．ＳＺ03（西から）

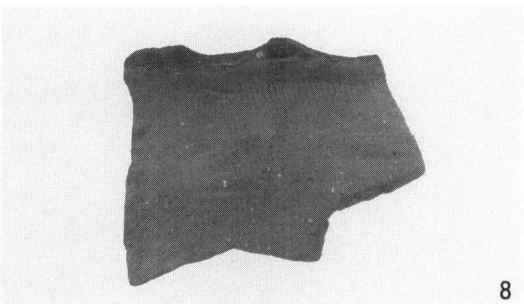
図版第24

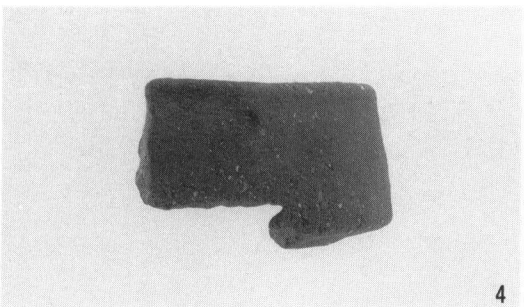


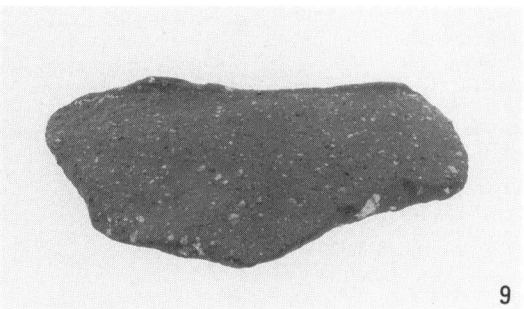


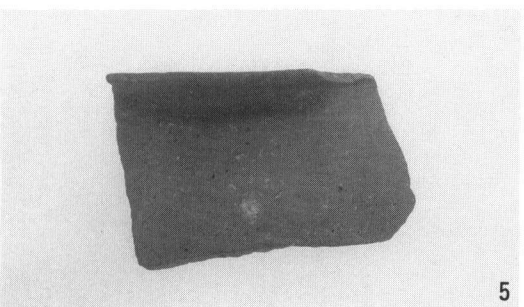


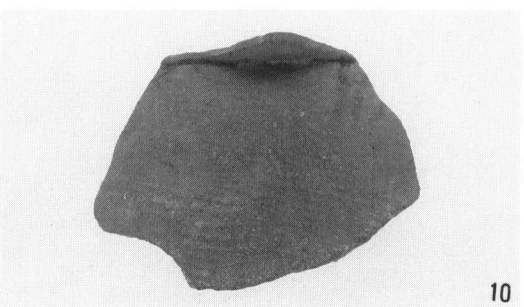




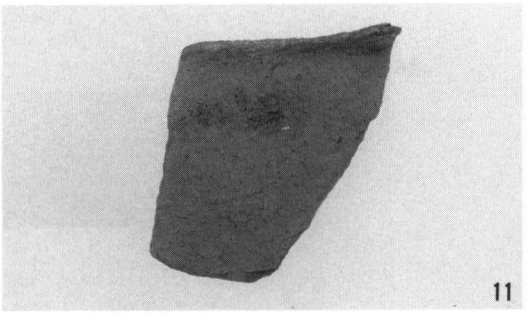


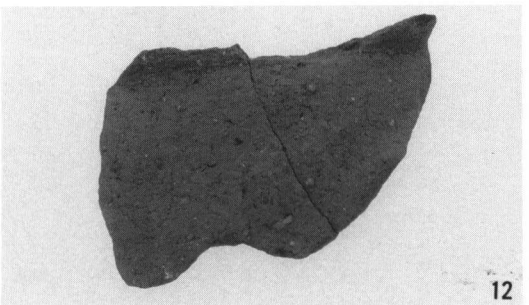


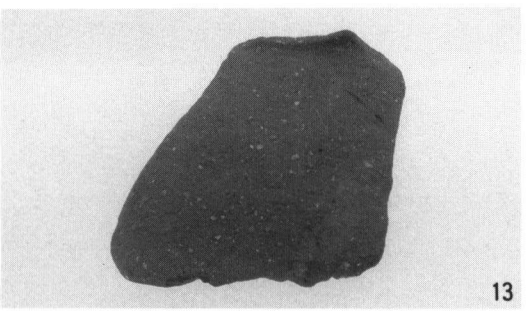


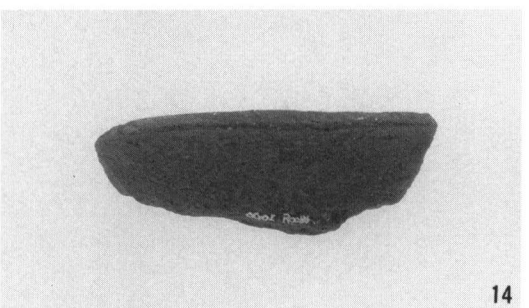


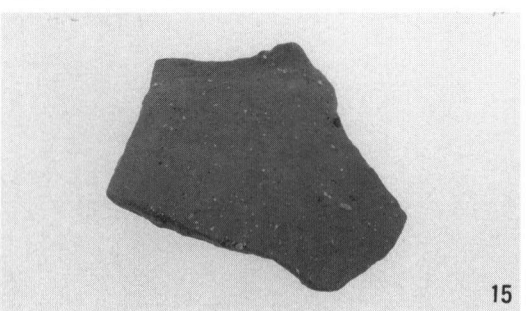
ＳＲ01出土遺物

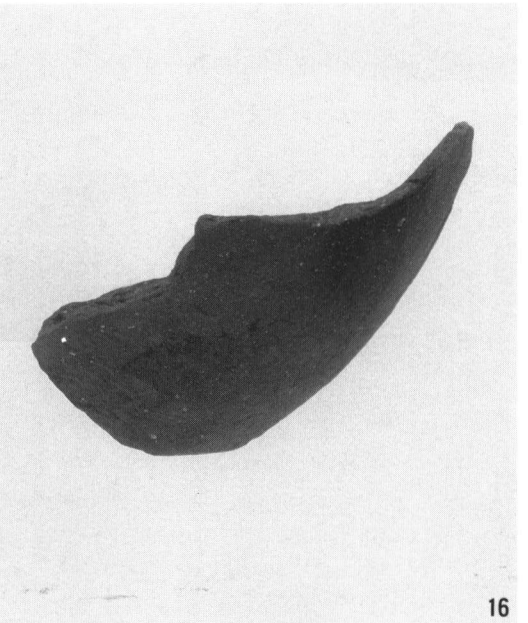

11

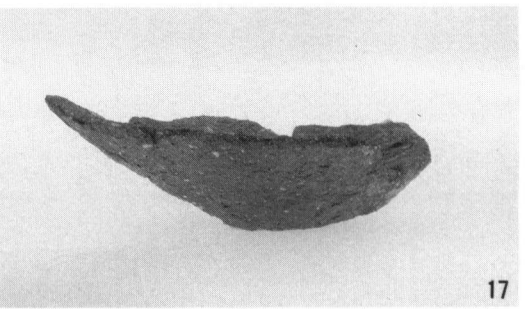

12


13


14


15

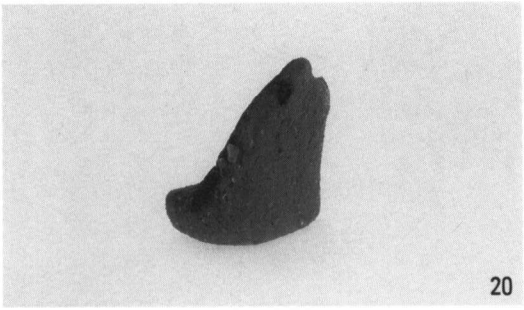

16

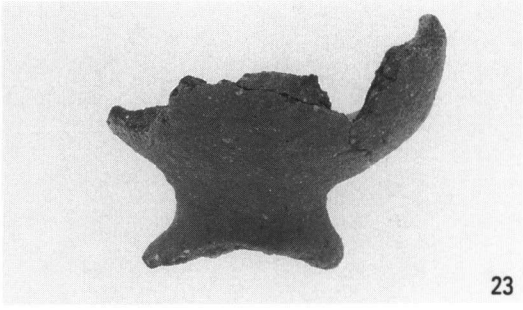

17

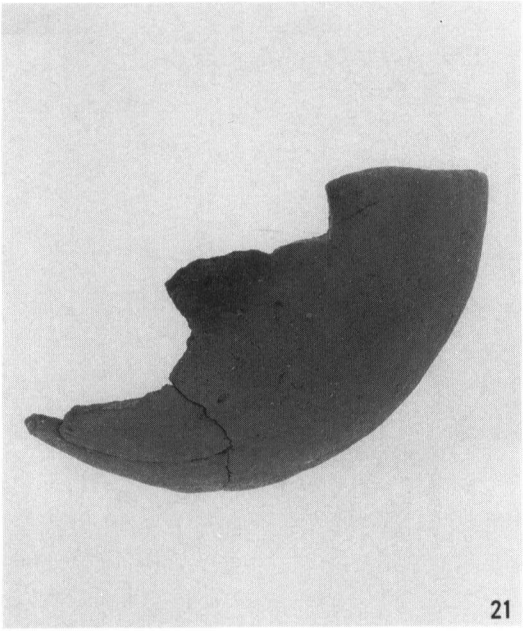
18

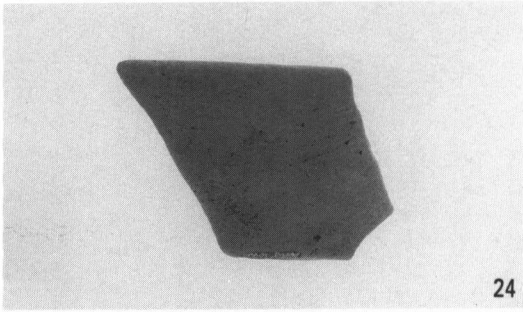
19

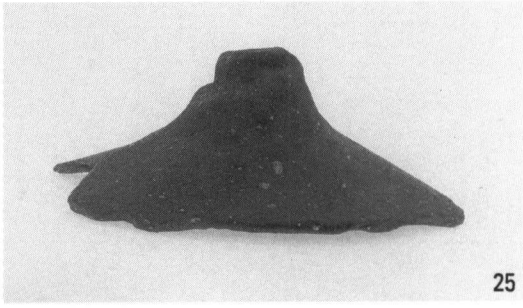
ＳＲ01出土遺物



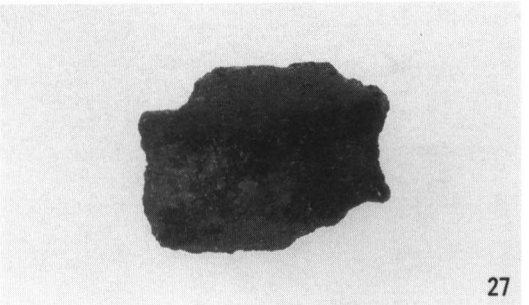


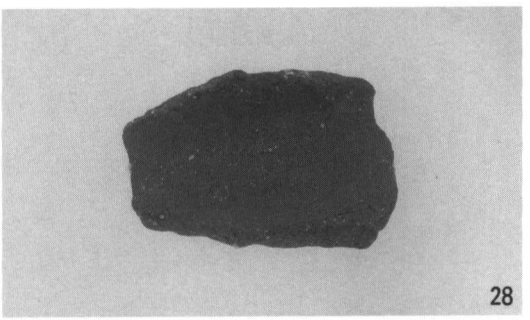


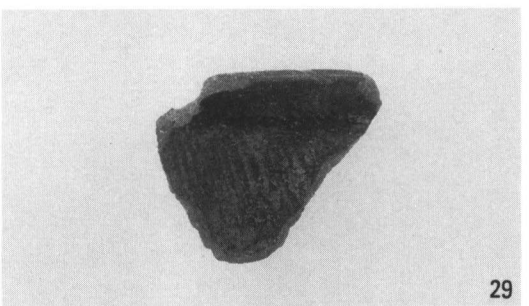


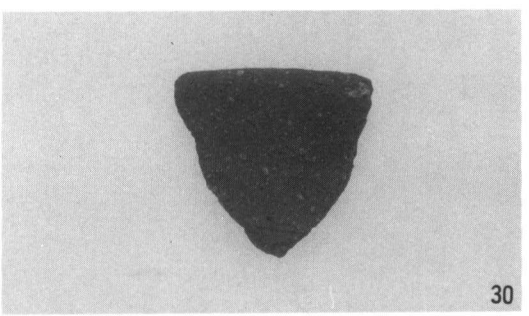


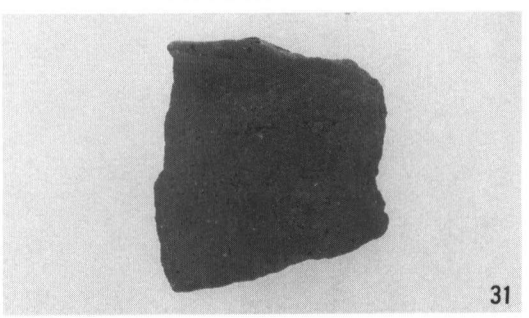
ＳＲ01出土遺物

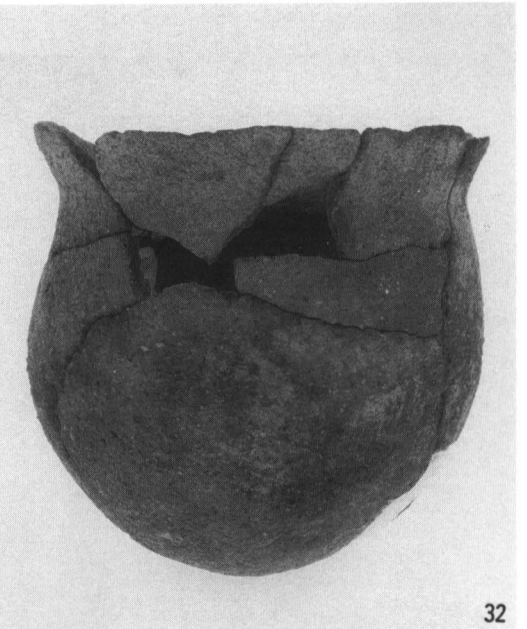


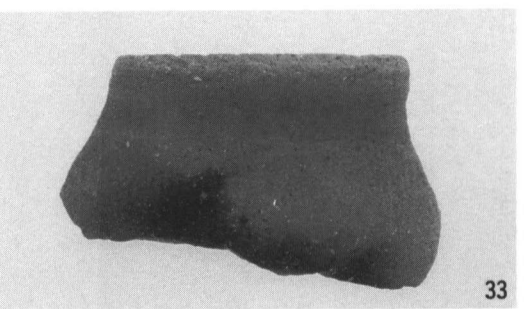


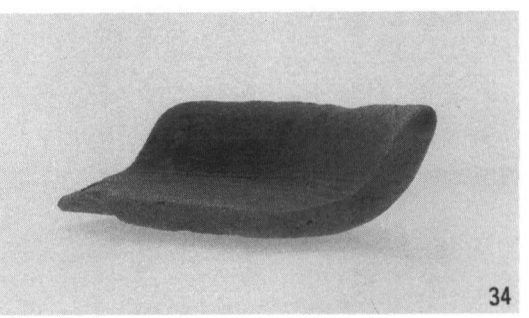


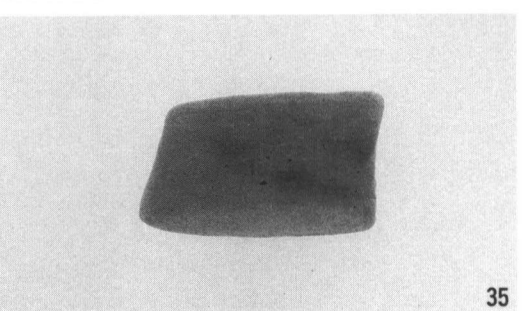






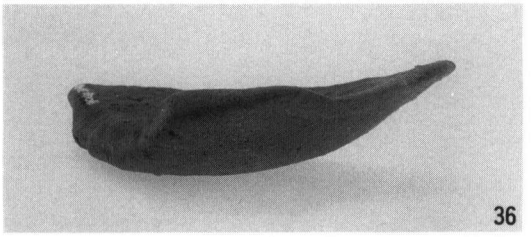


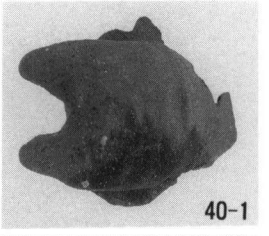


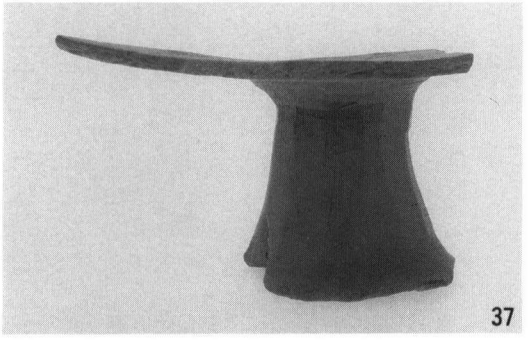


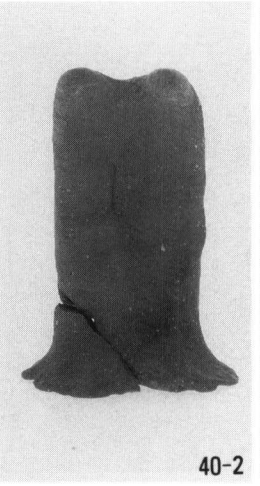
ＳＲ01出土遺物

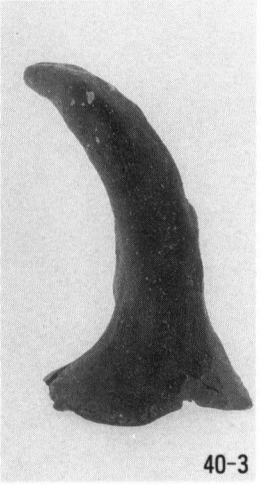
図版第28

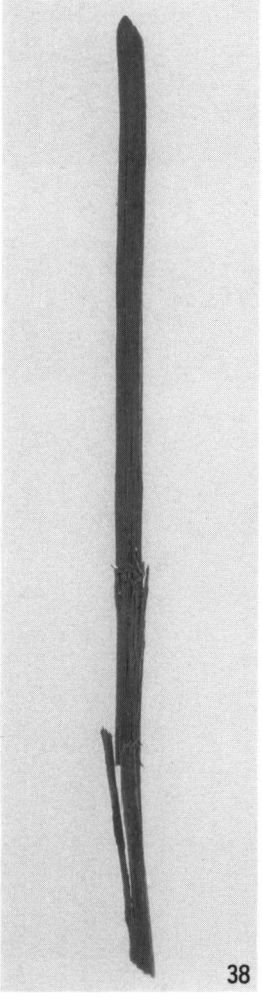

36

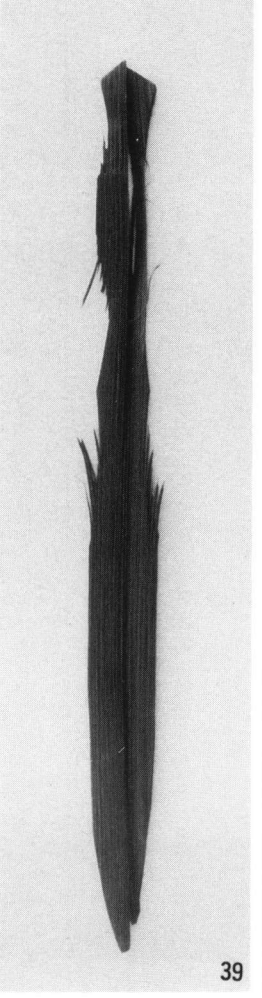

40-1

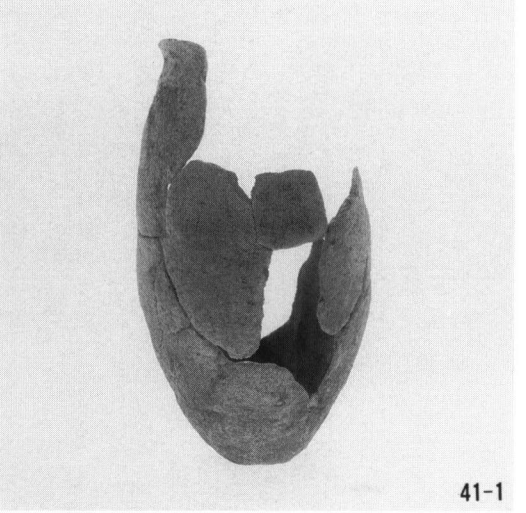

37

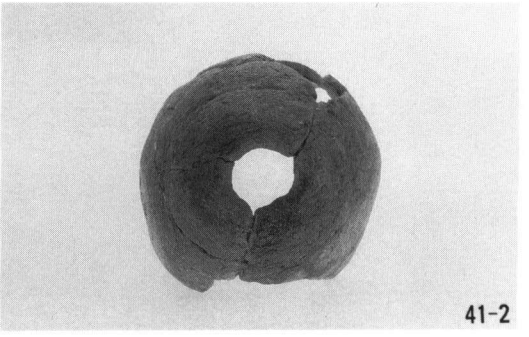

40-2


40-3

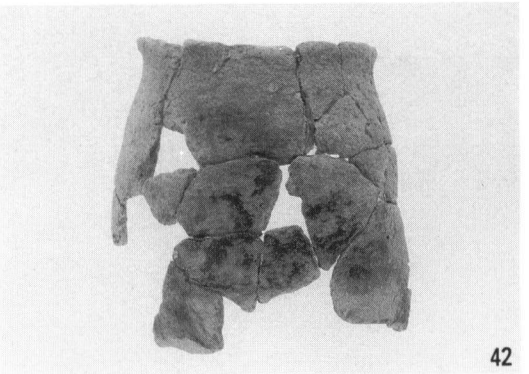

38

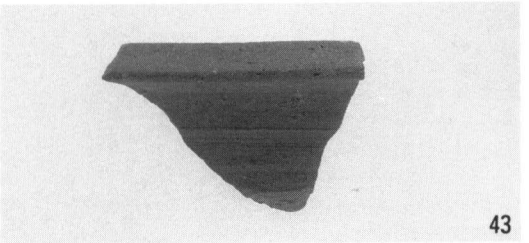

39

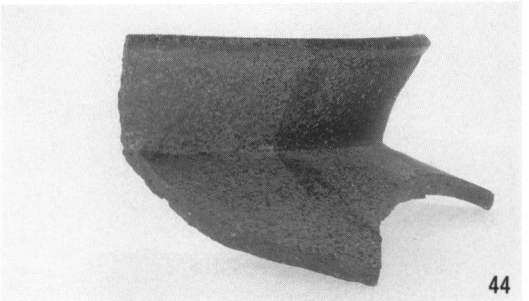

41-1

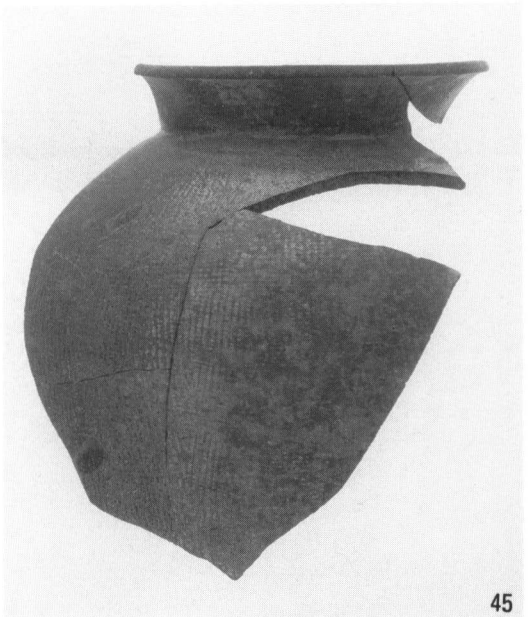

41-2

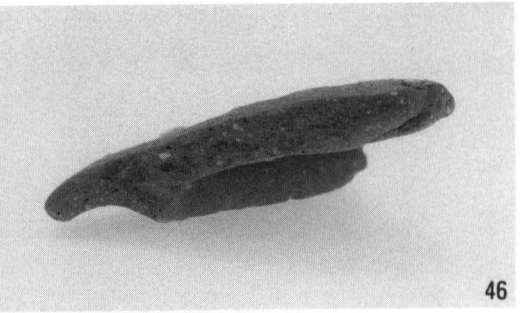
ＳＲ01出土遺物

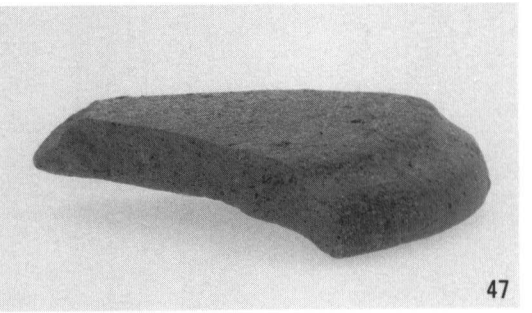

42

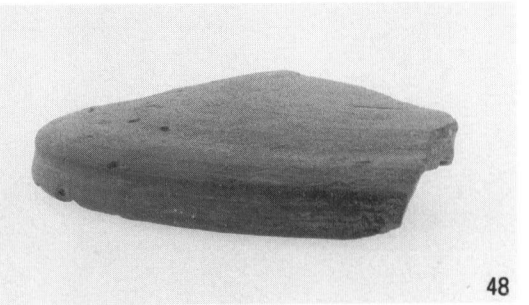

43

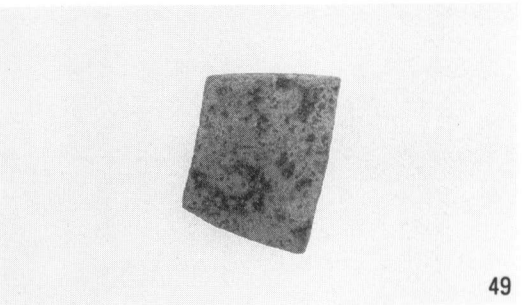

44

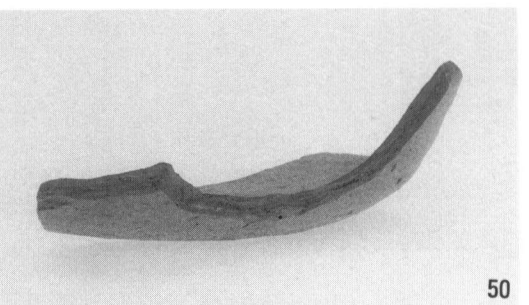

45


46


47

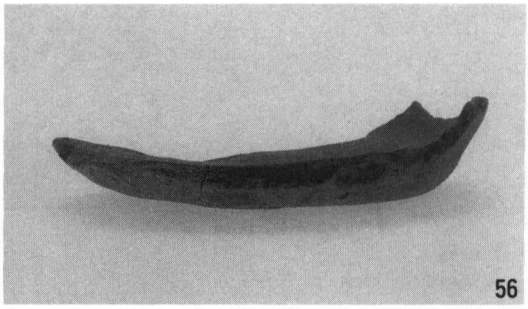

48

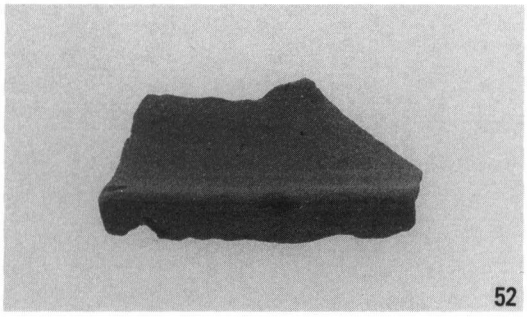

49

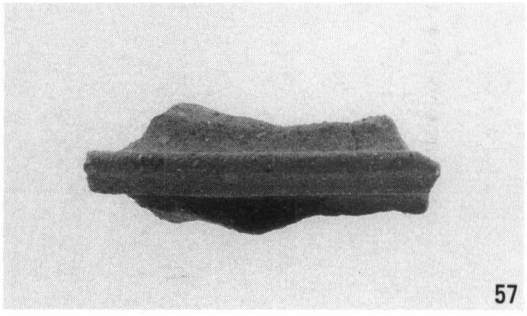

50

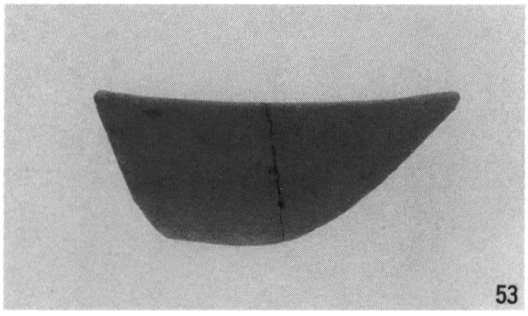
ＳＲ01出土遺物

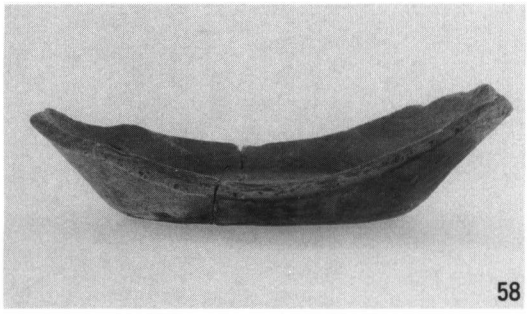
51

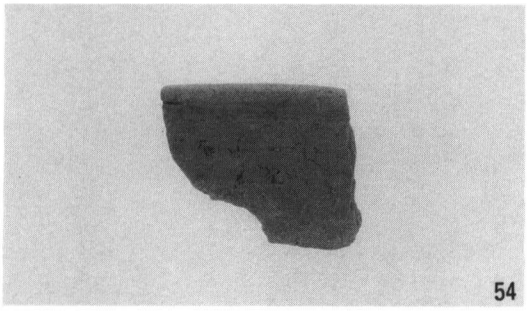

56

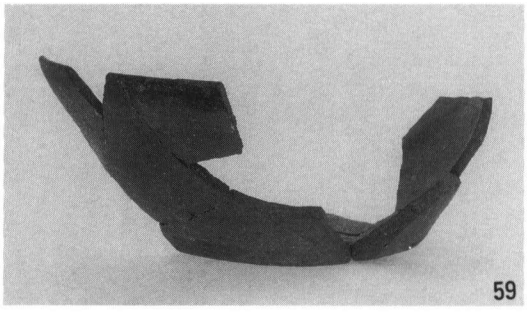

52

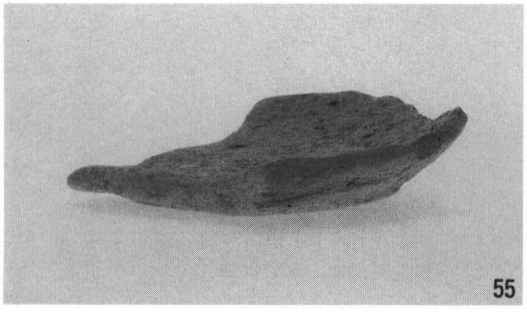

57


53


58

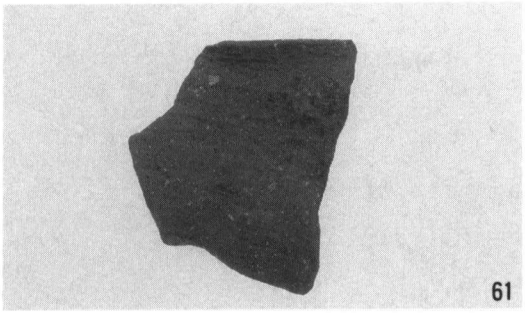

54

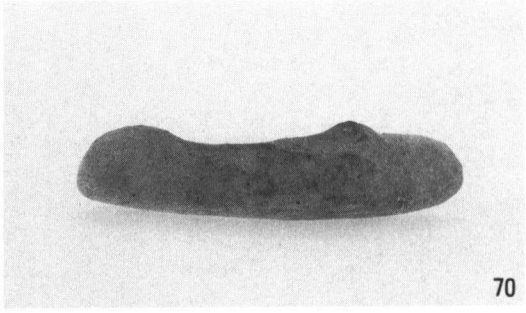

59

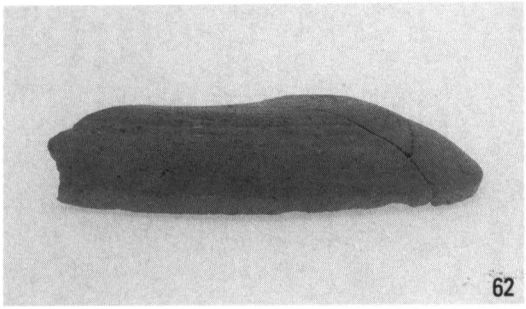

55

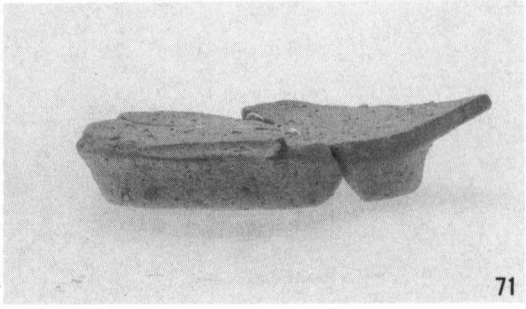
60

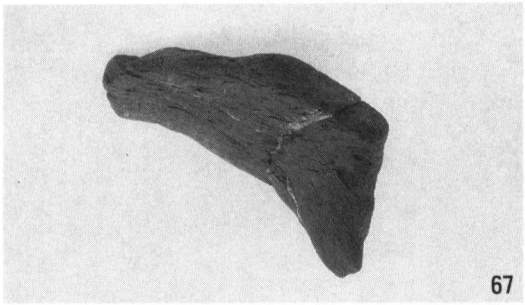
ＳＲ01出土遺物

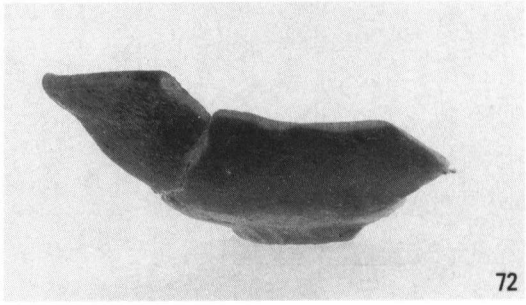

61

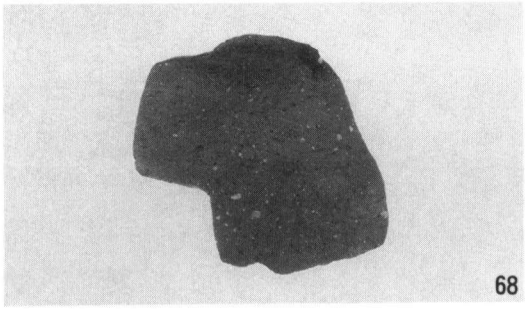

70

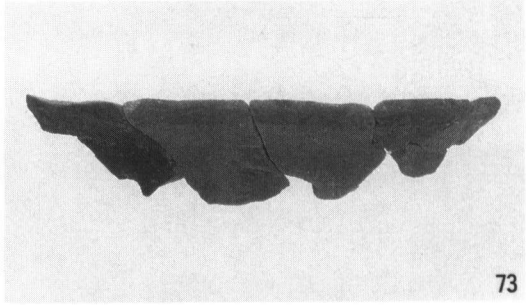

62

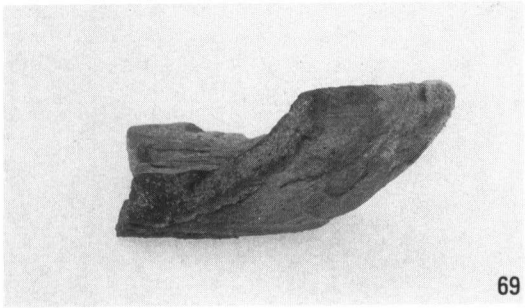

71

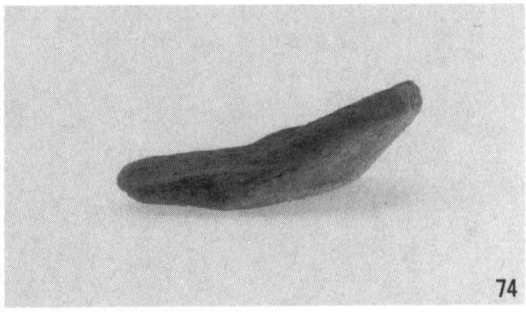

67


72


68

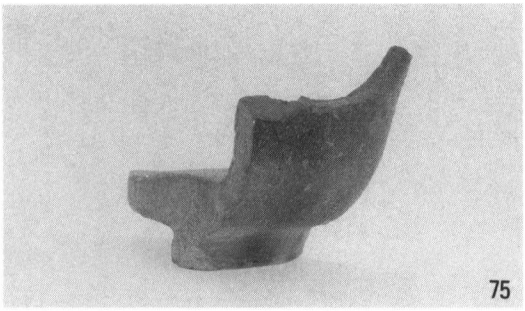

73

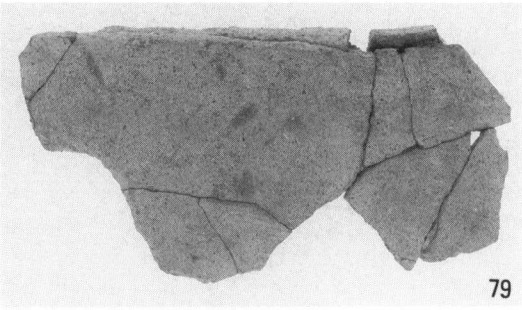

69

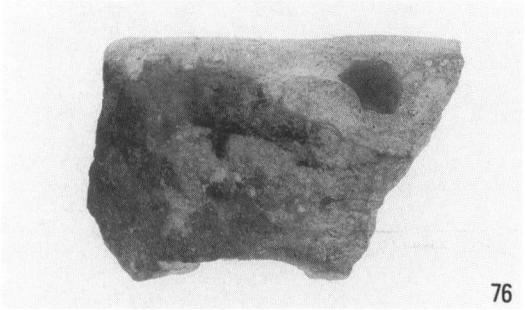

74

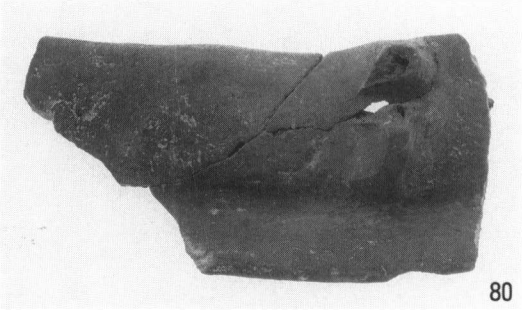
ＳＲ01，ＳＤ01～04出土遺物

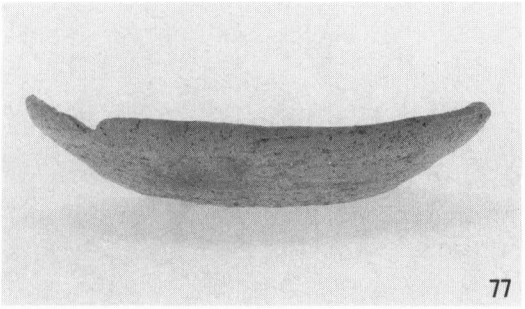
図版第32

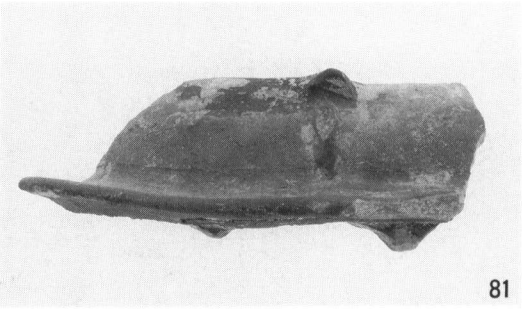

75

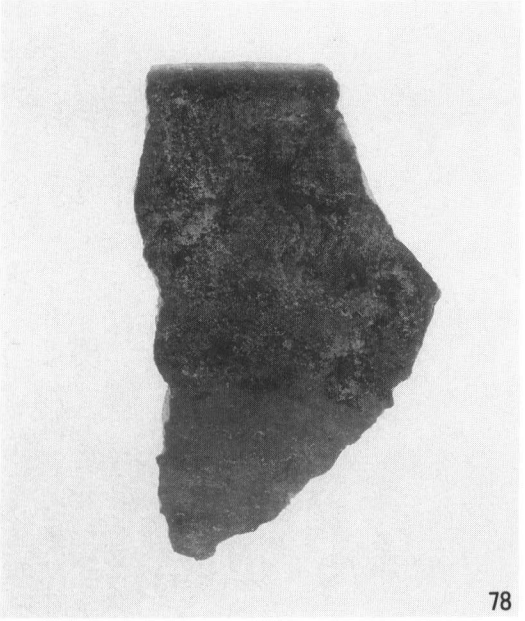

79

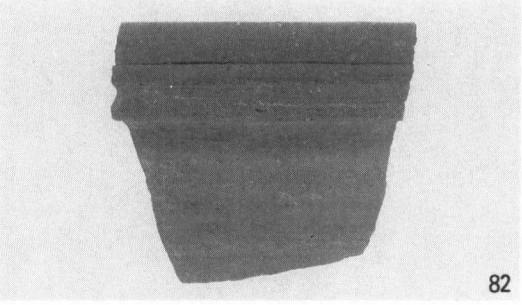

76

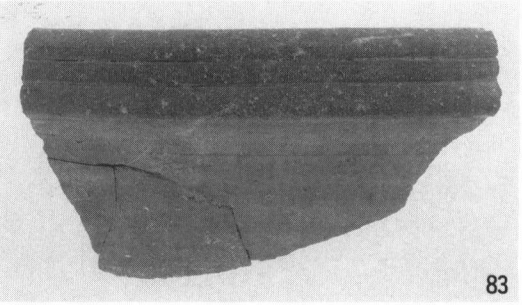

80


77


81


78


82


83

ＳＤ04，ＳＫ01・02出土遺物